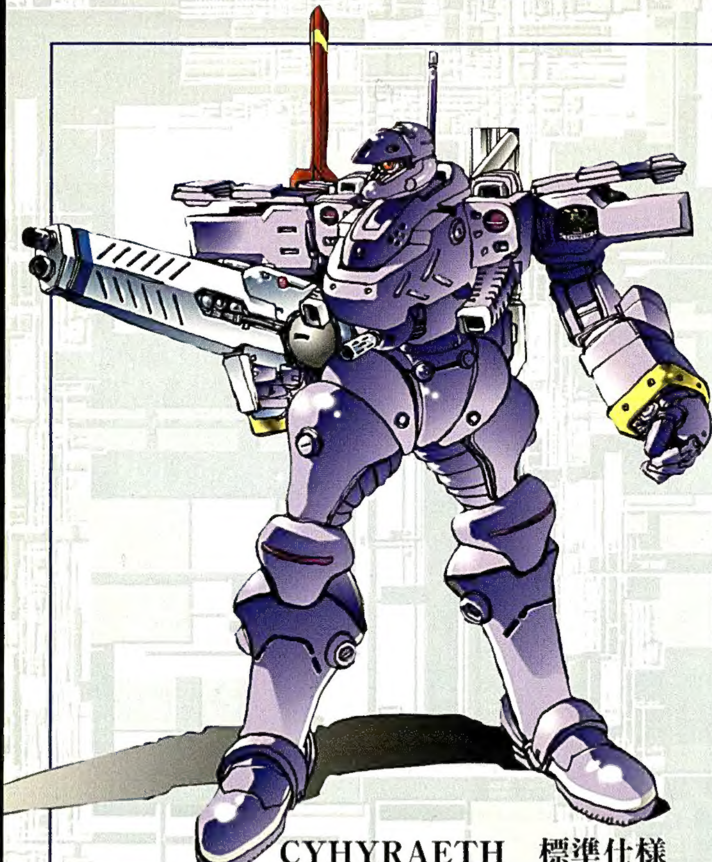
アーマード・コア

～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

篠崎砂美

ファミ通文庫


ARMORED CORE
アーマード・コア
~The Fake Illusions~
〜ザ・フェイク・イリュージョンズ〜

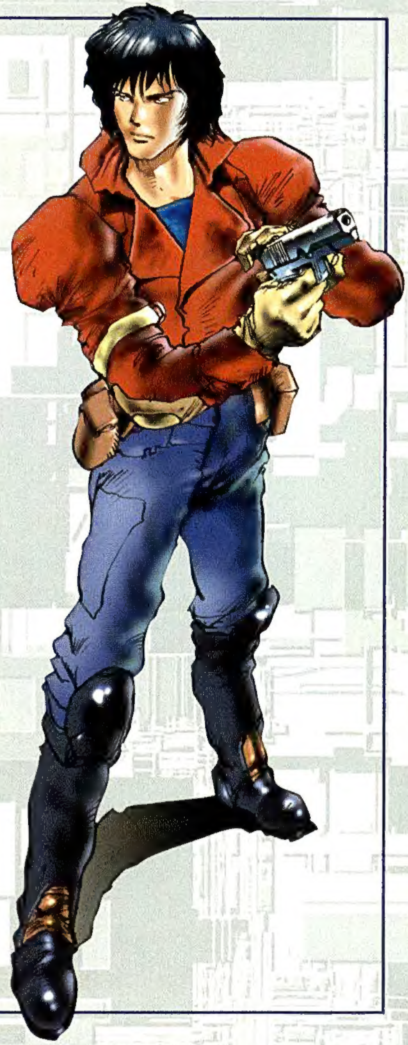


CYHYRAETH　標準仕様

頭部：HD-REDEYE　胴部：XCL-01　腕部：AN-25
脚部：LN-D-8000R　右手：WS-XFwPPk　左手：LS-3303
右肩：RZ-BBP　左肩：WC-IR24　推進：B-VR-33
動力：GBG-10000　火器管理：TRYX-QUAD
補助：SP-JAM・SP-ABS・SP-SAP・SP-CND-K・SP-AXL・SP-S/SCR・SP-E/SCR・SP-EH・SP-E+

CYHYRAETH

LEANNAN



リャノン=シードル

性別:男
年齢:20歳
身長:180cm
体重:不明
職業:レイヴン

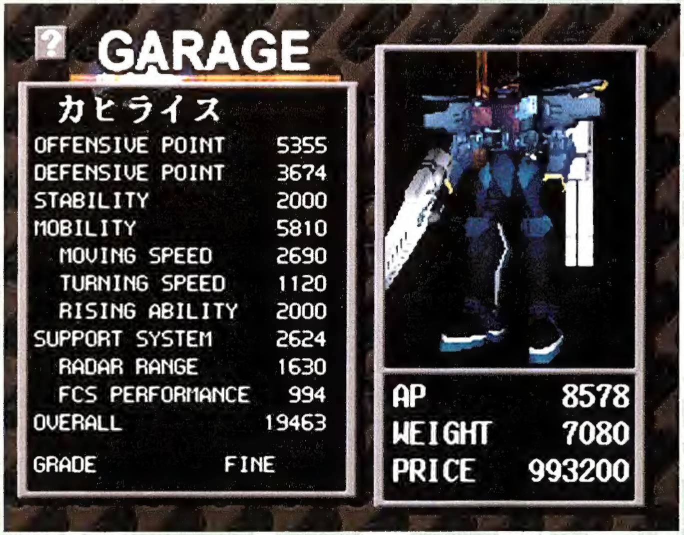
筋肉質ではないが、無駄のない引き締まった身体をしている。髪は黒で少しまとまりが悪い。目はグレイ。過去の経緯から厭世的になっており口数が少ない。乗機はAC・カヒライス。AC乗りとしての腕は超一級だが、アリーナでは勝率6割程度になるよう調整している。

涙でその身を蒼く染めし少女







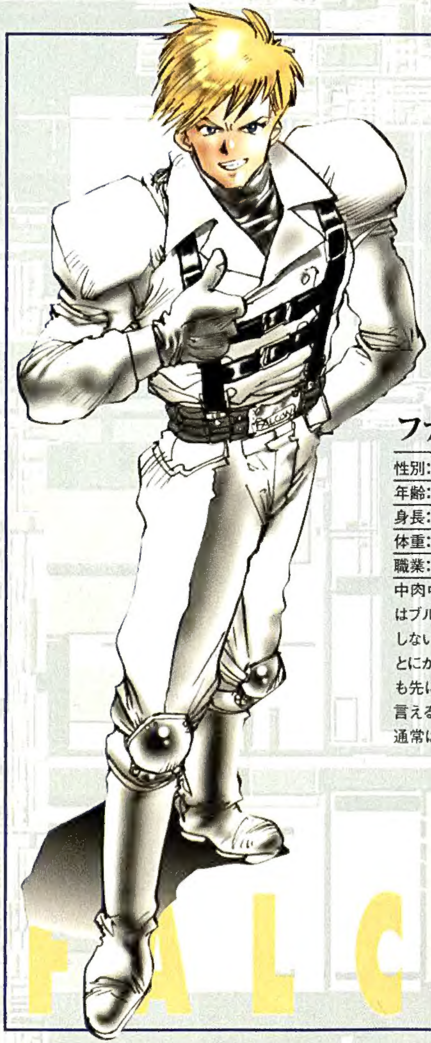


カヒライス機体解説

カヒライスは中・長距離からの攻撃を前提に組み立てられた軽量2足歩行型ACである。右腕武器のWS-XFwPPk（レーザーライフル）もしくは左肩に装着されたWC-IR24（ショルダーキャノン）のいずれかにより、距離10000以上のアウトレンジから敵にダメージを与え、弱ったところを近接してLS-3303（レーザーブレード）で切り裂く、というのが勝利パターンとなっている。もっとも、操縦者であるリャノンの技量の高さゆえ、狭い範囲での短距離高速戦闘でも大抵の相手には引けを取らない。

エンブレムは光の中に立つ美少女。緑の服に灰色のマントを着ていて目は赤い。いわゆるアイルランドのバンシーという妖精で、死の先触れとして現れる泣き女でもある。ちなみにカヒライスはバンシーの別名。

GARAGE



ファルコン

性別:男
年齢:不明
身長:不明
体重:不明
職業:レイヴン

中肉中背でまとまりの悪い金髪。目はブルー。なれなれしく、人見知りをしない。わりと女好きで調子がいい。とにかくおしゃべりである。考えるよりも先に行動して墓穴を掘るタイプとも言える。乗機はAC・ヴィジランティ。通常は標準2足歩行の多弾タイプ。

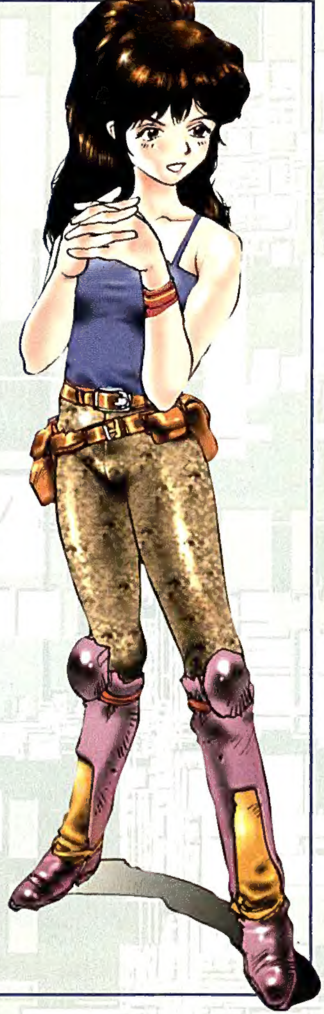
FALCON

FATAMAY

ファータ=アマイ

性別:女
年齢:17歳
身長:158cm
体重:40kg
職業:オペレータ

やや華奢な体格。髪は黒のストレートロング。通常は、シニョンやポニーテールやひっつめにしてまとめている。吸い込まれるような光沢のある黒い目の持ち主。結構、行動力があり、言い出したら利かない面がある。乗機はコンバット・リグのレッド・ブランチ。



アーマード・コア

～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

篠崎砂美

FB
ファミ通文庫



ダイナマイトブル

性別：男

年齢：不明

職業：レイブン

レスラーのようながっちりとした外見。性格的には無謀で粗暴、思慮が浅く単純である。乗機はAC・ブロックバスター。殲滅戦をとくに好むため、高火力タイプとなっている。



リンクスミンクス

性別：女

年齢：不明

職業：レイブン

赤毛に何色ものカラフルなメッシュを入れた豪奢な髪の美丈夫。直感で行動するタイプで、その性格は豪快。即時行動を好む。乗機はAC・プリティキトゥン。高速戦闘を得意とする。

イラスト　松田大秀

目次

Let's admit your power.
Now, you are raven from this moment.

Let's admit your power.
Now, you are raven from this moment.

プロローグ

「レイヴン」

「……認めよう、君の力を。今この瞬間から、君はレイヴンだ」

この言葉に、心躍らせた者は多い。

アーマード・コア(AC)と呼ばれる鋼鉄のロボット。それを駆って様々な依頼をこなす者たち。時代は、彼らをレイヴンと呼んだ。

あるときは、彼らは街にはびこる悪を叩きのめす正義の味方となり、人々の称賛を浴びる存在だった。またあるときは、彼らは依頼された物をすべて破壊する破壊者(デストロイヤー)となり、人々に恐怖を振りまく存在となった。

合法非合法に関わらず、ナーブと呼ばれるネットワークシステム上で受けた依頼を、冷徹なまでに遂行していくレイヴンたち。正義という言葉ほど、彼らの胸に空しく響く言葉はなかった。

一騎当千の彼らに敵はいない。そして、友と呼べる者も……。昨日の敵は今日の友かもしれず、今日の友は明日の敵かもしれないのだ。

「……認めよう、君の力を。今この瞬間から、君はレイヴンだ」

この言葉に、心躍らせた者は多い。

けれども、この言葉の真の意味を知る者は数少ない……。

MISSION 1

『生体兵器殲滅』

1

散弾が降り注ぐ。

直前までリャノンがいた大地には、七つの大きな弾痕が刻まれた。

高所からのスラッグガン（WC ST120）による狙撃だ。

丘陵地帯の起伏のある土地を、リャノンの駆るACカヒライスは、ブースター（BVR33）による断続加速で高速移動していった。二足歩行の機体（AC）は、ブースター加速（ダッシュ）による高機動戦闘を行えるのが特徴だ。急加速による方向転換は、自動照準（ロックオン）後の敵の攻撃を直前回避するのに有効だった。とはいえ、拡散弾に相当するスラッグガンの攻撃すべてを回避するのには、パイロットの技量をかなり必要とする。

『敵AC確認。ヴィジランティです。方位プラス二〇度。上下角プラス。距離七〇〇〇』

ACに搭載された高性能コンピュータが、広域レーダー（RZ BBP）で捉えている敵の情報を報告してくる。カヒライスと同様の二足歩行標準型で、キャノンと銃が主体の機体だ。

——アリーナ。

ここはアーマード・コア（AC）と呼ばれる大型ロボット同士が、見せ物試合としての戦闘を行う場所だ。それによって、主催者側は観客から観戦料や賭け金を吸い上げ、パイロットたちは

ファイトマネーを稼ぐ。時代が生んだ、歪みの溜まり場であると言えるだろう。

敵が射撃体勢を解く間に、リャノンは距離を詰めつつ横に回り込んだ。肩装備の武装は強力な分、二足歩行の機体では発射時の反動に耐えるために明確な射撃体勢をとらなければならない。そこにすきが生じる。

敵ACが回頭する前に、リャノンは自機にショルダーキャノン(WC-IR24)の射撃体勢をとらせた。左肩に折り畳まれていた砲身が展開し、長砲身のエネルギー砲となってチャージを終了した。大気を切り裂く甲高い音とともに発射されたエネルギー弾が、誰もいない大地に命中して大音響とともに爆炎を拡散させた。爆炎は、目くらましとなって敵の光学カメラを一時的に封じる。

ヴィジランティが、近距離レーダー(RXA-01WE)だけを頼りにロックオンを待たずしてハンドパルスレーザーガン(WG-XP1000)を乱射して反撃に出た。弾幕を張ってカヒライスの動きを封じようという狙いだろう。だが、すでにリャノンは自機を高々度までジャンプさせていた。青く輝くカヒライスの機体が、空に溶け込む。

下方を通り過ぎる火線を尻目に、リャノンは敵を捉えながら○方向からレーザーライフル(WS-XFwPPk)で攻撃を加えた。メインモニタに、攻撃の命中を示すシグナルが点滅し、被弾したヴィジランティが慌てて後退する。それを追いかけるように降下したカヒライスは、着地と同時に左腕のレーザーブレード(LS-3303)を一閃させた。先の攻撃で弱くなっていた装甲を完全に切り裂いて、敵の内部機構に大ダメージを与える。その時点で、闘技場(アリーナ)の管理システムから送られてくる敵の耐久値の情報が○を示した。コックピット維持の限界値に達した証拠だ。

この数値は、アリーナ固有の試合上の持ち点のようなものであった。機体ダメージに比例して減算されていき、○になった時点でパイロットの安全性が限界と判断されて試合は強制的に終了される。ゲームである以上、デスマッチでない限りルールは適用されるということだ。そうでなければ、無限にパイロットがいない限りすぐにアリーナでの試合は商売として成り立たなくなってしまう。それに、多くの試合経歴があるパイロットほど賭けに参加する客をたくさん呼ぶことができるので、主催者側としても簡単に死なれては困るというわけだ。

シルバーホワイトの機体から黒煙をたなびかせながら、ヴィジランティが沈黙した。そして、カヒライスのコンピュータに試合終了の信号が送られてくる。

『システム通常モードに移行します』

コンピュータの音声とともに、システムが戦闘モードから通常モードに移行する。コックピットメインモニタからターゲットマーカーと武装残弾表示が消え、火器管制システム(FCS)がオフになった。

今日もまた、意味のない戦いの一つが終わったのだ。

2

自販機の読み取り機（リーダー）にカードをくぐらせると、リャノンは落ちてきたコーヒーの缶を拾い上げた。

「よう、一緒してもいいかな」

ぶしつけに声をかけながら、金髪碧眼の若い男がリャノンに近づいてきた。白いパイロットスーツを着た男の顔に、リャノンは見覚えがあった。つい先ほど戦ったヴィジランティのパイロット、ファルコンと名乗っている男だ。

別に嫌がる素振りも見せず、リャノンはタブを押し込んだ缶コーヒーを黙って一口すすった。好きにすればいいのさ。そう目で語る。

そんなリャノンの態度を見るまでもなく、ファルコンは勝手にジュースを買って彼のそばでごくごくと飲み始めた。

「ふう。やっぱり、試合の後の一杯はうめえぜ」

通用門から吹き込んでくる風に髪を踊らせながら、ファルコンが気持ちよさそうに言った。

「それにしても、あんた強えな。久しぶりに、完璧にやられたぜ。まったく、ほんとに久しぶりだ」

沈黙が恐いのではないかと錯覚させるほどに、がちゃがちゃとよく動きよくしゃべる。通路の色褪せた蛍光灯のほの暗い光に溶け込むかのような黒髪のリャノンとは、好対照な男だ。

このファルコンという男、人並み以上の実力はあるものの、決してトップランクのパイロットというわけではない。アンプルールやラディウスなどの上位陣と比べれば、ここアヴァロン・バレーのアリーナでは、まだ勝率六割ほどの中堅パイロットだ。つまり、試合に負けることもさほど珍しいことではない。そのわりには、先程の台詞は自信過剰の最たるものだ。あるいは、リャノンのようにわざと勝ち負けを調整して目立たないようにしているとでも言うのだろうか。

この世界、目立って得をすることもあれば、損をすることもある。名声とリスクのどちらをとるかは、パイロットそれぞれの問題だ。好きにすればいい。

あるいは、よくある試合後の逆恨みだろうかとリャノンはこころなしか警戒した。のんびりとアリーナ付属のガレージでACのメンテナンスが終わるのを待っていたのは失敗だったのかもしれない。他のパイロットや観客たちと遭遇しやすい場所に長居するのはいらぬトラブルのもとだ。

「なんだい、少しはしゃべってもいいだろうが」

ずっと押し黙ったままのリャノンに、さすがに気分を害したのか、ファルコンが軽く口を尖らせて言った。

「どうせ、あんたも仕事を求めてアヴァロン・バレーのアリーナに流れてきた口なんだろう。もとの住処（すみか）は、アイザック・シティかい、それともガル・シティかアンバー・クラウンかい」

いらぬことを、ファルコンがぽんぽんと口にする。

「あれだけの腕だ。昔はランカーACだったんだろう。実は、俺だって、少し前まではランカーだったんだぜ」

「ランカーか……。懐かしい言葉だな。だが、今は無意味な言葉だ」

らしくもない感慨を込めて、リャノンは口を開いた。

兵器であるACを使う依頼には血なまぐさいものが多かった。そのためか、彼らACのパイロットは、不吉の先触れとして現れるワタリガラスになぞらえてレイヴンと呼ばれていた。

そして、彼らの集う組織が、鴉たちの巣、すなわち、レイヴンズ＝ネストと呼ばれる組織だった。

合法非合法に関わらず、ACを使った依頼を受諾し斡旋する傭兵組織、それがレイヴンズ＝ネストと呼ばれる存在だった。一定レベルの実戦試験に合格した者は誰でもレイヴンズ＝ネストにパイロットとして登録された。そして、ナーブと呼ばれる世界規模のネットワークシステムを通じて、依頼主（クライアント）からの依頼を斡旋してもらうことができた。実際、多くの者たちにとっては、レイヴンズ＝ネストはネットワークの上だけの存在、いわゆる商売上のシステムそのものであると言えた。

さらに、レイヴンズ＝ネストは、それぞれのミッションに対して得点（ポイント）を設定した。無事にミッションを遂行したレイヴンは、評価としてその得点を加算される。言ってみれば、レイヴンの成績表のようなものだ。そのリストの上位に位置する者たちと彼らの乗るACの両方をさして、人々はランカーと呼び讃えつつも恐れていた。ランカーとは、レイヴンズ＝ネストが定めていた制度というよりは、一種の称号となっていたのだ。

もっとも、それも今は昔の話だった。

一年ほど前、ちょうどクロームとムラクモという二大企業が抗争によって共倒れになった頃であろうか、レイヴンズ＝ネストは突然消滅してしまった。そう、まさにそれは消滅だった。ナーブでのアクセスが不可能になり、情報伝達システムとして機能していたレイヴンズ＝ネストから、いっさいの情報が流れてこなくなってしまったのだ。

当時は、いろいろと噂も流れた。いわく、スポンサーとしての企業を失って資金的にいきづまったのだと。いわく、レイヴンズ＝ネストに恨みを持つ組織との抗争に敗れ去ったのだと。いわく、初めからそんなものは存在していなかった、ただの幻影だったのだと……。

詳細は誰も知らない。そして、真実も……。

だが、取り残された形になったレイヴンたちにとっては、事は死活問題であった。仕事の依頼を一括管理していた組織がなくなったのだ。これからは仕事は自分自身の力で見つけてこなければならなかった。

ある者は、かつての二大企業の後釜を狙う企業の用心棒として専属契約を結んだ。またある者は、ネットワーク上で地道に独自のルートを開発していった。だが、そうそう依頼があるわけもなく、多くのレイヴンたちは時間とその力を持て余し始めていた。

そこで注目されたのが、ACバトルであり、アリーナであった。

もともとは、地下複合都市アンバー・クラウンの企業が、レイヴンズ＝ネストと契約を結んで始めたのがアリーナだ。

予想外に客を動員したアリーナは、商売として成功した。大金の流れとともに、アリーナはアンバー・クラウン以外の都市でも設置されるようになっていった。

レイヴンたちを受け入れる新たな場所は、こうしてあらかじめ用意されていたのだった。

とはいえ、ACバトルは、本来は違法である。たとえ、都市警備を取り仕切っているシティ・ガードが黙認していたとしてもだ。そのため、アリーナがある場所はスラムの奥地や、開発途中で見捨てられた都市などが多かった。ここアヴァロン・バレーと呼ばれる都市も、二大企業の崩壊とともに開発計画が中断したままの場所だった。アリーナを設置するには最適な場所であったと言える。そのため、二大企業が健在な時代からあった小規模なアリーナが、レイヴンズ＝ネストが消滅してから急速に発達しだし、アイザック・シティ周辺でも最大規模のものに成長したのだ。

皮肉なことに、アヴァロン・バレーは開発を中断されて見捨てられたことによって、裏の

世界としての繁栄を手に入れたのだった。

実力さえあれば安定した金が稼げるアヴァロン・バレーのアリーナには、たちまちかつてのランカーたちが群がってきた。たいていは、みなわけありの者たちである。

だからこそ、かつてランカーであったということは、あまり思い出したくない者もいる。

「まあな、確かに昔のランクは今は無意味だろうさ。だから、このアリーナのランキングで上位にのし上がって名前を売ってやるのさ。そうすりゃ、もっと金が稼げる」

ぎゅっと缶を握りしめてファルコンが力説した。若さゆえのささやかな野望というものが、彼に力を与えているのは明白だった。

「それで、俺に何の用だ。ただの自慢屋か」

別段他人の自慢話を聞く趣味はないと、リャノンは冷たく言い放った。

「つれない奴だな。まあ、確かにあんたにとっちゃ、俺なんて相手にもならないと言うところだろうがな。今日の試合でよくわかったよ。さっきガレージで見てもらったら、俺のヴィジランティは確実に駆動系やエネルギー伝達系だけを破壊されてた。実に無駄のない壊され方だと修理屋の奴らに誉められちまったくらいだ」

「だから、何が言いたいんだ」

まくしたてるファルコンに、リャノンはうんざりしたように再び訊ねた。

「あんたの腕が、すげえってことさ。アリーナには、破壊魔みたいなACもたくさんいるっ

てのに、あんたの場合は実に事務的に試合をこなしている。相当の腕がなければ、こんなことやりたくてもできやしねえ。なのに、何で、あんたはアリーナのランキング中位で安定してるんだ。どう考えても、トップテンに入ってなきゃおかしいだろうが」

「俺の勝手だ。とやかく言われる筋合いのものじゃない」

「とぼけるなって。俺にはわかるぜ、あんたはこのアリーナなんかに満足しちゃいねえのさ。レイヴンズ＝ネストがあった時代に比べれば、実入りは少ねえし、戦闘のスリルも減ってるからな。そこで提案だが……」

　にやにやしながら話を続けるファルコンを尻目に、リャノンはいかにも彼の話には興味がないといったふうにその場から歩き出した。

「おい待てよ、俺の話を聞けよ」

　慌てて、ファルコンが後を追ってくる。

「俺と組まないか。いい儲け話があるんだ。あんたと俺が組めば、楽勝の依頼なんだぜ」

「興味はない。俺は誰とも組むつもりはない」

　通用門を目指して歩き続けながらリャノンは答えた。手を組もうなどと言うレイヴンは素直に信用することはできない。金のためには主義主張を簡単に変える奴らだ。昨日は敵、今日は味方。状況によっては、後ろから撃たれることもないわけではない。事実、リャノンも昔は手痛い日に遭ったことがある。過去は過去のまま封印しておきたいものだ。あらためて

体験するつもりなど、リャノンは毛頭なかった。

「おいおい、つれないなあ。少しぐらい話を聞いてくれてもいいじゃねえか……っとっとっとっとっと……」

　足早に進んでいたリャノンは、通用門の手前でふいに立ち止まった。小走りに追いかけていたファルコンが、彼に追突しそうになってバランスを崩しながら宙を泳いだ。

「おい、止まるなら止まると……。んっ、何だ何だ!?」

　文句を言いかけたファルコンが、リャノンの見ている方に視線をむけて小首をかしげた。

　何やら、警備員と一人の少女がもめている。

「だから、私はレイヴンに会いたいの」

「だめだ。ここから先は関係者以外立入禁止だ」

「少しだけでいいのよ」

「だったら、許可をもらってくるんだな」

　声高に押し問答が続く。

　アリーナでのレイヴンといえば、ある意味スター扱いだった。固定のファンたちも存在する。だが、同時に賭けの対象でもある彼らは、不条理な逆恨みの対象ともなりえた。そのため、レイヴンたちと観客たちのエリアの間には、ちゃんと警備の者がいる。

「やれやれ、熱狂的なファンか何かかね。はたして、どっちのだと思う？　俺のとあんたの

と」

二人のやりとりを遠目に眺めながら、ファルコンが軽く肩をすくめてみせた。

後ろをファルコン、前を見知らぬ少女にふさがれて、リャノンは困ったように視線を通用門の方にむけた。そのとき、警備員ともみあっていた少女が顔を上げた。その視線が、リャノンの顔を捉える。睨むとも焦がれるともつかない視線が、瞬間リャノンを動けなくした。次の瞬間、少女は警備員の手を振り払って、脱兎のごとく駆け出していた。

「何……!?」

本能的にファルコンが身構える。これが暴漢であったら、反応の遅れは命取りだ。

だが、リャノンは動かなかった。突進してきた少女に、体当たりをくらうような形でだきつかれる。

「あなたたち、レイヴンでしょ。私たちを助けて」

リャノンの暗灰色の瞳を見つめながら、少女が懇願した。漆黒と言うには若い瑞々しさに満ちた瞳が、一心に意識を集中させてリャノンを見つめている。すべてを受け止めて取り込んでしまうような底深き瞳。リャノンは、その瞳に覚えがあった。それは、決して惑わしの闇ではなく……。

「申し訳ありません」

追いついた警備員が、謝りながら少女の肩に手をかけた。あらがうように、少女がリャノンの身体に回した腕に力を込めた。

「ちょい待ち」

ファルコンが警備員の腕をつかんだ。強い握力に、男が顔をしかめながらファルコンを見た。

「悪かったな、この子、俺のファンなんだ。待ち合わせしてたんだけど、通行証渡すの忘れちまってな」

顔の半分で笑顔を作りながらファルコンが言った。

「そんなことは聞いておりませんが……」

当然のように警備員が戸惑う。もともとありもしない話なのだから無理もない。

「だから忘れてたって言ってるだろうが。俺がそう言ってるんだ、レイヴンのファルコンがな。それで十分じゃねえのか。なあ、リャノン」

ちょっと凄んでみせてから、ファルコンがリャノンに同意を求めた。

「ああ」

リャノンは、そう答えるしかなかった。ここでもめても時間の無駄になるだけだ。きりのいいところで、少女をファルコンに押しつけてしまえば済むことだった。それに、少女の言葉の意味が気にならないと言えば嘘になる。

「そういうことでしたら……」

渋々警備員が引き下がった。それを見て、やっと少女がリャノンの身体から離れる。

「とりあえず、もう一度お茶しようや」

ファルコンの意見で、三人は通路にある自動販売機の前まで戻った。ファルコンがコーヒーを三つ買い、自販機前のベンチに腰を下ろしたリャノンと少女に投げ渡した。

「さてと、俺たちレイヴンに何の用かな、お嬢ちゃん」

リャノンとで少女を挟むような形でベンチに座りながら、ファルコンが訊ねた。ぞんざいな態度だが、実際には少女よりそう年上というわけでもない。

あらためて見てみると、その少女はどこかしら変だった。着ている服から見て浮浪者というわけではなさそうなのに、全身埃まみれで、服のあちこちに鉤裂きがある。まるで、今さっき誰かと格闘してきたか、何者かに追われている逃亡者といった雰囲気だ。そうとう慌ててここにやってきたのか、結い上げた黒髪がいくぶん解けて肩や胸に零れているのもそのままにしている。

「まずは、名前からいこうか。俺はファルコン、こいつは相棒のリャノン。二人とも、腕利きのレイヴンだ」

すっかり自分のペースで、ファルコンが話を進めていった。なし崩しに、リャノンを巻き込もうとしているのは明白だ。

「私は、ファータ。ファータ＝アマイ」

そして、少女は語り始めた。

彼女は、近郊にあるガル・シティから助けを求めてやってきたと言う。

彼女の住むガル・シティは、今や地獄と化していた。

バグ。

かつて、クローム社がケミカルダインという子会社に命じて開発させた生体兵器。巨大な蟻か甲虫を思わせるその生物は、有機生命体の餌がある限り自己繁殖を行いながら攻撃目標の都市を文字通り破壊し尽くす。まさに殺人兵器だった。

バグの存在が公になった原因に、研究施設からの脱走事件があった。記録に残るものは二回。一度目は、ガル・シティに大量に発生し、都市を守る警察機構であるシティ・ガードと、雇われたレイヴンの活躍によって何とか駆除することができた。二度目は、ケミカルダインの研究施設内での事故による脱走だった。このときは外部への脱走はないとされているが、レイヴンによる駆除がなければどうなっていたかはわからない。これによって、ケミカルダインが徹底的に調べられて、すべてが白日のもとにさらされたのだ。

この非人道的な兵器の開発を公に暴かれたために、クローム社は社会的に葬り去られることになったのだった。市民的支持を失い、世論と対立したクローム社は、武装蜂起を決行した。経済的支配が不可能と知り、軍事的支配に切り替えようとしたのだ。結局、それによって彼らの命運は尽きた。ライバルであった二大巨頭企業の一翼であるムラクモ・ミレニアム

と、彼らに雇われたレイヴンたちによって掃討されたのだ。

その後、バグのデータは破棄され、すべてはおさまったかのように思われた。だが、実際には、バグは滅んではいなかったのだ。地上に逃げ、環境に適応し、少ない餌を奪い合いながら生き延びていたのだ。彼らが、どちらの事件で逃げ出したものの末裔かはわからない。だが、彼らは再び繁殖すべく、ガル・シティに襲いかかったのだった。

野生化したバグたちは、ガル・シティ内に入り込むと直ちに繁殖を始めた。かつての悪夢の再来に、ガル・シティのガードたちはなす術がなかった。いや、実際には果敢に抵抗を繰り広げたのだが、圧倒的な物量の前には彼らの力では足りなかった。

不幸だったのは、バグの女王であるセンチュリオン・バグが侵入して巣を作ったのが、ガル・シティの通信コントロールセンターだったということだ。これによって、最初に通信手段を弱体化されてしまったため、他のシティに助けを呼ぶことができなくなっていた。その上、センチュリオン・バグが呼びよせたウォリアー・バグが地下都市への連絡通路から大挙押しよせ、都市内で生まれた新たなウォリアー・バグとともにガードの部隊を挟み撃ちすることによって、ガードはほぼ全滅に近い被害を被ってしまっていた。

「人々はシェルターに避難しながら、助けを待っているんです。でも、シェルターだって、いつまで保つかわかりません。だからお願いです、早く助けにきてください」

ファータが、リャノンたちに懇願した。

「それは、レイヴンに対する仕事の依頼かな」

「ええ、そうです」

ファルコンの質問に、ファータがこくりとうなずいた。

「いいねえ。俺は鼻が利くんだ。追い返さないで正解だったただろ」

自慢げにファルコンがリャノンに言った。

レイヴンズ・ネストがなくなって以来、レイヴンに対する仕事の依頼は直接交渉が原則となっていた。ナーブを通じて、直接レイヴンたちのメイルボックスに依頼の手紙を出すか、紹介者を通じて直接コンタクトをとって交渉するかだ。そういう意味では、交渉のルートを持っていない者にとっては、アリーナはレイヴンに会うための格好の場所であると言えた。

「バグか……」

個人的な感慨を込めてリャノンはつぶやいた。

「それならば、俺たちよりも、ここのガードなりアイザック・シティのガードに救援を要請した方がいい」

言い捨てると、リャノンは飲み終えた空き缶を、ゴミ箱にむかって投げ捨てた。壁にあたった空き缶が、空しい音を立ててゴミ箱の中に落ちていく。

「どうして！」

驚いたようにファータが叫んだ。ファルコンの態度から、無事に二人を雇うことができる

と思いかけていた彼女にとって、リャノンの言葉は予想外のものだった。
「胡散臭い仕事はしたくない。それに、ガードに頼んだ方が安く済む」
「報酬なら払います。それに、ガードの人たちにはもう頼みました。でも、許可がなければ他のシティにいくことはできないの一点張りなんです。だから、私たちが頼れるのは、もうあなたたちレイヴンだけなんです」
　ファータが、ベンチから立ち上がって叫んだ。
「おいおい、せっかくの儲け話をふいにするつもりかよ、相棒」
「俺は、貴様のパートナーになったつもりはない。俺は、パートナーは作らない主義だ」
　彼女に負けず劣らず勢いよく立ち上がりながらファルコンが言った。
　落ち着いてベンチに座ったまま、リャノンは言い放った。
「そんなんじゃ長生きしないぜ」
「俺は長生きしたいんでな」
　軽く睨みつけるファルコンに、リャノンは動じることなく言った。
　他人を信じる、あるいは他人を利用する。それがいつもいい結果を導き出すとは限らない。一番いいことは、他人に頼らず、他人を巻き込まないことだ。それがリャノンの経験からくる持論であり、ファルコンとの意見の相違というものだった。
「どこが気に入らないんです」

　二人のやりとりは無視して、ファータがリャノンに訊ねた。
「なぜ、お前はここにいる」
　端的にリャノンは訊ねた。
「そういうことか」
　ファルコンが納得する。
「こんな娘が脱出できるぐらいの事件なら、あんたが出る幕じゃないと言いたいわけだ。あるいは、この依頼は何かわけありとふんだわけかな。そうでなけりゃ、不自然だと言いたいのだろう」
「疑うのなら、他の人をあたります。でも、もう時間を無駄にしたくないんです。私を信じてはもらえないのですか」
　二人のレイヴンを見比べながら、ファータが頼み込んだ。
「なら、どうやって脱出してきた。バグに脱出路をふさがれていたんじゃないのか」
　ファルコンが、最大の疑問をファータにぶつけた。
「バグたちの非活動期を利用しました。半日周期で、バグは二時間ほどの休息時間をとるんです。代謝機能に依存するスプライト弾生成器官を維持するために必要な休息ですから。その間は動きが緩慢になるから、十分な距離をとれば気づかれることなくやり過ごすことが可能なんです。私はその時間を利用して脱出しました。それに、シティ・ガードの人たちもま

だ戦っていましたし、地上への通路のいくつかはバグの群れが通り過ぎた後で、手薄だったんです。それで、みんなの協力で何とか突破することができました」

「みんなというと、仲間がいたのか」

ファルコンが、彼女の言葉を聞きとがめて訊ねた。

「ええ、一緒に助けを呼びにいこうとした街の人たちです。でも、脱出できたのは私の車だけでした。最後には、みんなは囮になって私を逃がしてくれたんです。だから、私は助けをつれて戻らなくちゃいけないんです。絶対に……」

軽く唇を噛みしめるファータに、ファルコンはそういう決意は好きじゃないとばかりに苦笑いをリャノンにむけた。

「やけにバグに関して詳しいんだな」

リャノンに問われて、ファータがあからさまに顔を翳らせた。初めて、しばらく沈黙する。

だが、やがて決意したように口を開いた。

「バグは……、バグは私の父が造ったものです」

言葉を絞り出すようにして、ファータが答えた。

予想もしなかった言葉に、ファルコンが意見を求めるかのようにリャノンの顔を振り返った。

「私がバグに初めて出会ったのは、一年ちょっと前のことです……」

ファータが語ったことは、ある意味リャノンにとってはまざまざとその光景が目に浮かぶできごとだった。

歴史上初めて現れたバグたちによって、ガル・シティは地獄と化していた。人々は次々にバグに襲われ、ファータの母親も犠牲となった。命からがら逃げ回っていた彼女も、まさにバグに殺される寸前まで追いつめられていた。だが、そのときかけつけたレイヴンによって、彼女は奇跡的に救われたのだ。青く輝く四足型のACは、ファータをシェルターまで運ぶと何事もなかったかのようにバグの掃討を続けに去っていった。彼女がレイヴンと出会ったのは、それが最初であった。それ以降、直接的にそのレイヴンや他のレイヴンに出会うことはなかった。

それを知った彼女の父は、激しくショックを受けたらしい。なにしろ、自分の造ったものが妻を殺し、実の娘まで殺そうとしたのだから。

彼は、密かにバグを駆除する研究を始めた。だが、彼の勤める研究所でバグの大量脱走事件があり、不幸にもその際にファータの父親は命を落としていた。純粋な事故であったかどうかは、いまさら確かめようもないが。

残されたものは、密かにファータに渡されていたバグに対する研究結果だけであった。

「バグは、私の家族をめちゃめちゃにしたわ。憎んでも憎みきれないほどに。そしてまた、私の住む街を破壊しようとしている。許せない。あんなものは、この世に存在しちゃいけな

いのよ。バグが父の犯した過ちそのものなら、その息の根を止めるのは私じゃなきゃいけない。私はそう思うんです。これはいけないことですか」

自らとバグの関係を吐露したファータは、そう二人のレイヴンに訊ねた。それは、彼女にとって不退転の決意を表している。仮に、彼女が首尾よくバグを退治できたとしても、彼女の家族がバグの誕生に関わったと知れば、被害にあった人々は彼女に憎しみの矛先をむけるだろう。たとえ彼女自身に責はなくとも、怒りをむける対象には十分なりえるのだから。それゆえ、この話をリャノンたちに聞かせたということは、彼女の生殺与奪権を彼らに与えたに等しい行為だと言えた。

「話が込み入ってきたなあ」

まとまりの悪い金髪をかきむしりながらファルコンがうめいた。どうも、この手の話は苦手らしい。彼としては、もっとすっぱりと割り切れる単純な仕事の方が好みだった。

「そんなことはないさ。バグを殲滅すればいい。それだけのことだ」

リャノンは淡々と言った。

「そういうことだな。やっとやる気になったか」

してやったりという顔で、ファルコンがほくそ笑んだ。

「引き受けてくれるのですか」

ファータも顔を明るくする。

「そういうことだ。ところで、報酬はどのくらいだ。それによっちゃ、また話が違ってくるということもあるんだぜ」

ファルコンが、すかさず商談に話を持っていった。レイヴンが傭兵である以上、ただで働くということはありえない。

さすがに、ファータも即答は避けた。値踏みをしているのか、唇に指をあててしきりに考え込んでいる。ややあって……。

「二人で四〇〇〇〇コーム。そこまでなら、報酬として払えます」

ぽそりと、ファータは答えた。そんな大金を支払うということは、彼女の全財産なのであろう。これ見よがしに、ちらりとポケットからカードをのぞかせて見せる。

「いいねえ。前金かい」

思わずファルコンがほくそ笑んだ。彼にとって、金の素性などは興味のないことだ。

「……いいえ、成功報酬ということにしてください」

「まあ、しかたないか」

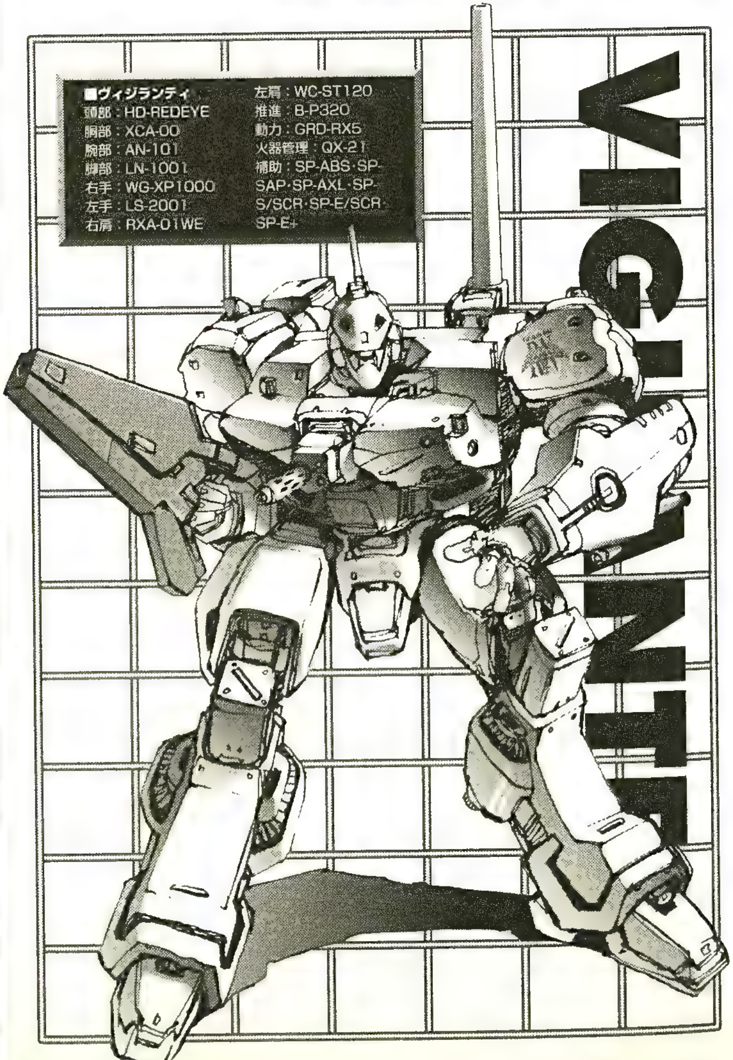
ファータの答えに、ファルコンがそんなものかと頭を掻いた。

レイヴンの報酬は、前金で全額払いということはまれだ。通常は、成功した場合のみ報酬が支払われる。失敗すれば、ＡＣの修理費や使用した弾薬代などの経費分赤字ということになる。

「前払いは、できないのだな」
　リャノンが、念を押した。
「……ええ」
　こくりと、静かにファータがうなずいた。
「ようし、契約成立だ。さっそく、ガレージにＡＣを取りにいこうぜ」
　ファルコンが大声で宣言した。その言葉を合図にでもしたかのように、三人はガレージにむかって歩き出した。
　こうして、再会ははたされたのだった。

3

「よお、修理は終わってるか」
　ガレージでせわしなく動いているメカニックたちのチーフにむかって、ファルコンが気安く声をかけた。
　ガレージ内の格納台（ハンガー）には、修理の終わったヴィジランティと、調整の終わったカヒライスが固定されていた。他にも、数台のＡＣの姿が見える。
「ああ、とっくに済んどるさ。修理代はこの金額だ、さっさと支払いを済ませてくれ」



　チーフが、修理代を入力したカードリーダーをずいと突き出した。
「高いぜ。もうすこしまかんないのかよ」
　金額を見たファルコンが、顔をしかめる。
「壊しといて、文句言える立場じゃないだろうが」
　チーフにうながされて、ファルコンは渋々カードをリーダーに通した。
「おやじ、ついでだが、パーツの換装を頼む」
　騒がしく表情豊かなファルコンとは対照的に、ファータを後ろにつれたリャノンは、淡々とチーフに注文した。
「急ぎか」
「ああ、すぐにだ」
「仕事というわけか。タイプを言いな」
　みなまで聞かずに納得したチーフが、オーダーを訊ねた。余計な詮索は、この世界ではタブーだ。
「ヘッドを、HD－ONEに換装してくれ。武装は、両肩をWC－01QLに変更だ」
「あいよ、一時間ほど待ちな」
　さっと頭の中で作業の見積もりをたてて、チーフが答える。
「二機で一時間だ」

　間髪入れず、リャノンは訂正した。時間が惜しい。それに、どのみちメカニックが言う時間は、余裕を持って水増しされているに決まっている。
「どういうことだ。あんたが持っているACは一機のはずだろ」
　数が合わないと、ファルコンが問い返した。
「お前の分だ。頭部を生体センサーのついたものに換装しておけ。奴らは、金属じゃない。通常センサーじゃロックオンはしないんだ。それに、実体弾よりもビーム兵器の方が効果がある。数が多いので、継戦能力も重要だ」
　リャノンは、必要事項をならべたてた。同行する以上、足手まといになられては困る。
「そういうことか。おっさん、俺も頼むぜ」
「金はあるんだろうな」
　リャノンと違って、ファルコンに対してはチーフが確認を入れた。
「何で、俺にだけ聞くんだよ」
「お前さんは修理したばかりだからな。金欠だろうが。で、武装は同じにするのか」
「……いや、ヘッドをHD－01－SRVTに替えるだけでいい」
　財力を見すかされて、ファルコンはムッとしながらも、それだけ言うのが精一杯だった。
　オーダーを繰り返すと、メカニックたちはさっそく作業に取りかかった。カヒライスとヴィジランティの頭部がクレーンでつり上げられ、接合点（ハードポイント）から外されていく。

大破壊と呼ばれる世界規模の戦争の後、工事用重機として発達したものはマッスル・トレーサー（MT）と呼ばれる準人型機械であった。共通パーツによって高い互換性を持ち量産のきくMTは、やがてその高い汎用性から兵器へと転用されだした。人々が地下都市に移住してからは、閉鎖空間における制圧兵器としてその威力を最大限に発揮したのだ。やがて、兵器の主力は戦車や航空機からMTへと移行していった。

それらMTの中でも、圧倒的な戦闘力を誇るものはアーマード・コアと呼ばれた。その名称の由来は、完全なコア思想によるものだったからだ。規格化された各種パーツは、コックピットのあるコアパーツを中心として、簡単に換装することができた。そのため、廉価版のパーツ変更のできないMTと区別するために、これらのコアを有するMTをACと呼んだのだった。

ゆえに、ACの修理とは、パーツそのもの、あるいはパーツ内のブロック化された内部部品そのものを交換することを意味していた。もともと電子部品の多いACは、短時間の修理は不可能だと言ってもさしつかえない。一番信頼性の高い修理方法は、疑わしきは交換せよということになる。おかげで、ACの保守部品というものは相当数必要にはなった。だが、基本構造さえ知っていれば、個人でも簡単にメンテナンスできるほどの高いメンテナンス・フリー能力をも同時に有することとなったのだ。もっとも、それらの部品の需要は、各企業体が自社の部品を流通させるために仕組んだシステムであるというのもまた事実である。

各種パーツを簡単に換装できるというACの特性を知り尽くしたレイヴンは、依頼されたミッションごとに自機の構成を変更するというのが常であった。自分のACの知名度を上げるためにほぼ一定の仕様で戦うアリーナは、ある意味特殊な場所であると言えた。自機のシルエット・フォルムにこだわりを持つ者もいるが、たいていはミッションごとにがらりと機体を変えてしまうのが通例だ。

「ずいぶん、バグに詳しいんですね」

ガレージの隅のベンチにリャノンとならんで座りながら、ファータが訊ねた。

「さあな。レイヴン同士の情報網では、一時期バグのことは話題になったからな。そのせいだろう」

素っ気なく、リャノンは答えた。

そうなのだろうか。ファータの目は、そう語っていた。

一時間後、注文通りに組み立てられた二機のACが、三人の前に引き出された。

人間型の二機のACは、整備用格納台（メンテナンス・ハンガー）によりかかるようにして固定されていた。シルバーグレイのヴィジランティの左肩には、レイヴンズ＝ネストのマークの上に〝Ｖｉｇｉｌａｎｔｅ〟と書かれたエンブレムが描かれている。紫がかった光沢を持つコバルトブルーの機体カラーのカヒライスは、同じ位置に光の中にたたずむ赤い目の美少女が描かれていた。機体名に通じる、死の先触れとなる泣く少女（カヒライス）だ。

「白いACと青いAC……」
ヴィジランティとカヒライスを見上げて、ファータがつぶやいた。
「別に珍しい色じゃない。ACとしては、ありふれたカラーリングだ。それに、青いACと言っても標準的な人間型だしな」
リャノンが答える。だが、彼は少し答えすぎたようだ。
「さてと、出発しようぜ」
ファータがリャノンに何か訊ねようと口を開きかけたとき、ファルコンが相変わらずの陽気さで二人をうながした。
「そうだな、時間がもったいない」
これ幸いと、リャノンはファルコンに合わせた。
その言葉に、ファータが今自分のやらなければいけないことを思い出したようだ。
「案内します。私についてきてください」
言うなり、ガレージの外にむかって歩き出そうとする。
「ちょっと待てよ、歩いていくつもりか？」
慌ててファルコンが彼女を呼び止めた。
「いいえ、ガル・シティを逃げ出すときに、放置されていた装甲車(トーラス)でやってきました。それでお二人を先導します」

答えたファータの言葉を、チーフが聞きつけた。
「ああ。外に止めてあったトーラスはあんたのか。やめとけ、あんなポンコツじゃ、一キロと走らないうちにエンコしちまうぞ。まったく、今さっき戦場をくぐり抜けてきたようなポンコツだ。修理しなくちゃとても走れんさ」
チーフの言葉で、リャノンたちはだいたいの状況を把握した。いくら動きが鈍くなっていたとはいえ、バグの中を突っ切ってきたのだ。無傷のはずがない。
「でも、私には、あのトーラスしかないんです」
「いや、もっといい物がある。それに、ガル・シティまでACで歩いていくのでは効率が悪すぎるからな」
困り果てるファータに、リャノンは意味ありげに微笑(ほほえ)んだ。

4

大破壊と呼ばれる大規模な戦争。それはすべてを破壊した。
それまであった国家という枠組みは崩壊し、疲弊した人類にとって政治的軍事的支配は一時的にせよ拘束力を失った。生態系も破壊され、放射線や酸性雨が降り注ぐ荒廃した地上は、もはや人類の生存圏として適さなくなっていた。

残されたものは、経済による支配と保護。そして、逃げ込んだ地下での新たな生活圏の確保だった。
生産権を手中に収めた企業は企業体連合という組織を作り、地下複合都市(ビーハイヴ)開発計画、すなわち俗に百年計画(センテニアル・プラン)と呼ばれたものをうちだした。
すべては、理想的に再生されるはずであった。
だが、地下に潜った人類は、自ら殻をまとってしまったのだろうか。企業体連合は百年を待たずして分裂瓦解(がかい)し、世界中に建設されていた地下複合都市は、それぞれの支配企業ごとに独立し対立していった。それはまさに過去の国家間戦争の再現であり、自己の利権のみ追求する人類の浅はかな姿の具現でもあった。そのような生き物だからこそ、人類は地上を追われたのかもしれない。
地上は、放棄された旧世代の施設や地下都市用の各種施設がある他は、主にアリーナの戦場として用いられていた。好きこのんで実際の太陽の下に出ていく者は、施設の管理者をのぞけば、いわくありげな者たちだけだ。そう、レイヴンたちのような。
レイヴンズ＝ネストがまだ存在していた時代は、レイヴンたちは活発に活動することができた。クライアントなりレイヴンズ＝ネストなりのＡＣ輸送用大型垂直離着陸機(ＶＴＯＬ)が、他の地下都市や目的地までは簡単に運んでくれたからだ。だが、現在はそのシステムもなくなって久しい。

太陽の光に焼かれた荒野にキャタピラの跡を刻みながら、真っ赤な大型のコンバット・リグが走っていた。後部には大きなコンテナを二両連結している。流線型のボディラインも相まって、その姿はさながら車両と言うよりは列車のようでもあった。
レッド・ブランチ。
リャノン所有のコンバット・リグだ。
「いい物持ってんじゃないか」
車内のシートにどっかと座りながらファルコンが言った。
「俺の家だからな。金はかけてある」
運転しながらリャノンが答えた。
もともとのリグという兵器は、ＡＣに替わる次世代兵器として開発された物だ。いわゆる人型を基準として発達してきたＭＴやＡＣとは違い、非人間型の戦闘機械である。基本的には、車両と航空機の中間的な性能を持ち、ホバリングによる高機動戦闘を得意とする。バリエーションも比較的豊富で、無線コントロールないしはＡＩ制御で自動攻撃を行う小型のエスコート・リグと呼ばれる物から、トーラスに替わる指揮車としての大型のコンバット・リグまで様々だ。ＡＣに相当する物では、パペガイというコンバット・リグが存在する。
リャノンが所有しているコンバット・リグは、ＡＣの運搬機能を持ったかなり大型の物であった。牽引加重(トラクティブ・ロード)を増やすために、主移動方法を無限軌道方式(キャタピラ・トレッド)にし、ホバー推進は単体で

の戦闘移動用にと改造している。そこそこの攻撃力と、移動司令部としての高い情報分析機能を持っているのが特徴だ。荷物室の一部は改造して生活空間となっており、離れた地下都市間の長距離移動にも人間が耐えられるようになっていた。

「どこで手に入れたんだ」

「拾ったのさ」

リグの出所を訊ねるファルコンに、リャノンはとぼけてみせた。

「拾ったねえ。違いない。まあ、あるところにはこんな物も落ちてるだろうさ」

頭の後ろで手を組むと、ファルコンはシートにふんぞり返った。ミッションの途中で敵の装備や物資を奪い取るなんてことは、レイヴンなら当たり前のことだ。敵戦力の減少と、自己戦力の増強。実に正当な戦略だ、恥じることなど一つもない。

「凄い、最新の情報機器が揃っているんですね」

比較的広めのコックピットの中を見回して、ファータが言った。前部にパイロットとコパイロット用のシートが二つ、後部左右に情報管制用のシートが一つずつある。

「へえ。見かけによらず博識だな。何の機械か、ちゃんとわかるってのかい」

ファルコンが、ちょっと意外そうに聞いた。

「ええ。ガル・シティでは、シティ内の交通管制のオペレータになる予定でしたから。まだ、研修中でしたけど」

「トーラスの運転も、そこで習ったのかい」

ファータの技能に興味を持ったのか、ファルコンが続けて訊ねた。

「車両の運転は、指示を出す都合上一通りの種類を習いました。それに、物を動かすのは基本的にパターンは同じですから、後はバリエーションです。個々のスイッチなどの固有名称の意味さえわかれば、たいていの物は動かせますよ。トーラスも、それで動かしたんですから。たぶん、このリグも運転ぐらいならできると思います」

「そいつは、すげーや」

少し皮肉っぽくファルコンが言った。

だが、基本的に彼女の言っていることは正論だ。むしろ、いいセンスを持っていると言えるだろう。それはそれで悪くはないとリャノンは感じた。

各シティは、エリアごとに一つないしいくつかの企業の独占形態となっている。それは、正常な市場論理による競争が起こりにくいという弊害があるものの、寡占状態は仕様の統一性という意味では大きな意味を持っていた。事実ＡＣ同士の操作系はほぼ統一されているし、ファータの言う通りリグの操縦系統は慣れてしまえば他の乗り物と大差はない。それがハンドルによるものか、一スティックか二スティックによるものなのかなどのパターンさえわかれば、やりたいことを機能に変換して考えられる思考パターンを持つ人間には簡単に操縦できた。もともとコンピュータの発達した現在では、細かい調整はすべてコンピュータがやっ

てくれるので、人間は意思決定だけ明確に機械に指示できさえすればいい。そうでなければ、ACのような複雑な機能の機械を操作することなどもとから不可能だ。

「ガル・シティの地上ゲートだ」

前方に見えてきたドーム状の建物とその周辺のビル群を一瞥して、リャノンはファルコンたちをうながした。荒野のドライブも、終わりが近い。何もない不毛の地から、廃墟というさらに不毛の地へと舞台が移る。

目の前には、かつての都市だった場所が広がっていた。廃墟と化したビル群は、半壊や倒壊したままの姿で放置されている。過去の遺産は振り返らないと言えば聞こえはいいが、過去の汚点を認めたくないがために放置しているというのが実状だ。

「気をつけてください。もう、バグの勢力圏内です」

注意を喚起しつつ、ファータがレーダースクリーンに目を走らせた。マニュアル通りの無駄のない操作で、生体センサーのスイッチをオンにする。とたんに、赤い輝点が一つ、八角形のレーダースクリーン上に現れた。

「建物の陰に大型の生体反応が一つ。バグです」

「気の早いお出迎えだな」

ファルコンがシートから立ち上がり、確認するようにファータの後ろからスクリーンをのぞき込んだ。

「他に生体反応は」

リグを止めもせずに、リャノンは訊ねた。

「付近に人はいません」

即座にリャノンの知りたいことを理解してファータが答えた。

「データを回せ」

戦闘モードを起動させてリャノンは命じた。余計な説明がいらないのは小気味いい。

リグのメインモニタにターゲットスコープのロックオンサイトが重なる。直後に、ファータによってレーダーの情報がリンクされ、ターゲットマーカーの十字が現れた。ゲートドーム越しに、レッド・ブランチ（RIG）の機首に装備されたプラズマキャノン（WC XC8000）がロックオンする。

リャノンは、すぐさま武装を切り替えた。直線的な攻撃しかできない射撃兵器では、バグだけでなく射線にある建物まで吹き飛ばしかねない。倒壊したビルなどはそれでもかまわないが、ゲートを壊して進入路を潰してしまっては元も子もない。

ロックオンサイトが広がり、後部ウエポンラックに装備された垂直ミサイル（WM SMSS24）の発射口が開く。幸いにして、バグはゲートドームから少し離れたところにいるようだ。

リャノンはリグの前進を止めずに、きっちりと二発だけミサイルを発射した。バグを殺傷できる、無駄のない必要かつ最低限の火力だ。真上に発射されたミサイルは空に上りつめる

と、くるりとむきを変えてバグめがけて急降下していった。確実にゲートを飛び越えて、ターゲットにむかって襲いかかる。ほぼ同時に、二つの爆炎が一つに混じり合って炸裂した。ゲート越しに、ビルの谷間でオレンジの炎が噴き上がるのが見える。

「バグの生体反応消えました」

ファータが、レーダーで結果を追確認する。

「よし、ACを出すぞ」

ファルコンに聞こえるように言うと、リャノンはコンテナを切り離し、間隔をあけておいた。例外的に複数のコンテナを牽引してきたために、連結したままではACを出しにくい。それに、敵が付近にいる以上、コンテナでリグの機動力をそぐのはマイナスだった。メインパイロットシートから立ち上がると、リャノンはファータを呼びよせて、簡単に機器の説明をした。

「ACを出すまで、周囲を警戒してくれ」

パイロットシートに座ったファータに言うと、リャノンはファルコンをつれてリグの外へと出ていった。

それぞれのコンテナのところにいくと、リャノンたちは連結部脇にあるパネルハッチを開けて、中にあるスイッチを操作した。モーター音とともに、コンテナが身震いする。油圧シリンダーが、なめらかな動きでコンテナを左右に割り開いた。開いた外壁が、安定器（アウトリガー）として

コンテナを固定する。

中からは、カヒライスとヴィジランティの姿が現れた。同時に、隔壁と天井からのびていた可変型AC固定ポールが縮み、壁面の突起状の大きさに戻っていった。四方からのびて、どんな形状のACでも確実に固定保護する機構だ。

リャノンたちがACに乗り込もうとしたとき、突然レッド・ブランチからミサイルが立て続けに発射された。どうやら、ゲートの中から数匹のバグが出てきたらしい。

「さっきので集まってきたか。急げ！」

叫ぶなり、リャノンはACに駆け上がった。開いたままのコックピットハッチに飛び込むと、あおむけになったパイロットシートに身を収める。軽量タイプの胴体コアは、人間一人分ちょっとのスペースしかない。四点固定式のシートベルトを締める間に、ジェネレータを起動させて各機器のメインスイッチを入れる。軽い唸りとともに、操作パネルが目覚めた。続いて、コックピットが後ろにスライドし、コア中央部に収まった。ジョイント部から下がっていた胸部装甲板が跳ね上がり、コックピットブロックを保護する。さらに、上部装甲板がスライドして、完全に外界からパイロットを遮断した。生で聞こえていたミサイルの戦闘音が一瞬途切れる。せり上がってきた前面のメインモニタパネルが光を宿し、どんよりと曇った空を一面に映し出した。すぐに外部音声モニタも活動を始め、外の状況を伝えてくる。

準備が整うと、リャノンはコンテナをリフトアップさせ始めた。床がシリンダーによって

持ち上げられ、九〇度回転してACを立ち上げる。人間タイプのACは、他のタイプと違って横になった場合起き上がるという動作が必要になる。だが、人間ほどに股関節が自由に曲がるわけではないので、基本的には可動式のハンガーラックなどの補助を必要とした。

直立に近づいていくほどに視点が正常化していくリャノンの視界に、ブースターを利用して強行的に発進していくヴィジランティの姿が映った。ブースターによる上昇中に姿勢を制御して強制的に機体の立て起こしを行い、そのまま戦闘に入るつもりらしい。確かに時間はかからないが、ずいぶんと乱暴なやり方だ。

「そこまで慌てる必要もないだろうに」

微かに苦笑しながらリャノンはつぶやいた。背面の固定ポールが縮み、カヒライスが自由になる。

レッド・ブランチの戦闘能力があれば、移動速度の遅いバグが戦闘距離に近づくまでに十分ACを発進できる。それに、その間にファータの実力もわかるというものだ。ガル・シティから脱出できたのが、運であったのかそうでなかったのか。

『ひゃっほー、お待たせ!』

空中からハンドパルスレーザーガンを連射しながら、ヴィジランティが地上に降り立った。ゲートの中から出てきたバグの一群が、掃射されて粉々に飛び散る。

『後は任せな』

レッド・ブランチの前に出ると、ファルコンがこれ見よがしに格好をつけてバグを倒していった。

調子づくファルコンをたしなめるように、彼の後方から強力なレーザーが一撃必殺でバグたちを仕留めていく。

『あまり無駄弾は使うなよ』

レーザーライフルを構えたカヒライスをヴィジランティの横にならぶように前進させて、リャノンが釘を刺した。

『俺たちはこのままシティ内に侵入して、バグを掃討する。ファータは、ここにレッド・ブランチを固定して待っていろ』

這い出てきた分のバグを一掃すると、リャノンはファータに命じた。

『嫌です。私も一緒にいきます』

それを聞いて、ファータは強く逆らった。

『俺たちが信じられないのか』

少し気分を害したように、ファルコンが聞き返す。

『そうじゃありません。けど……、私なら、このリグの装備を使えば、センチュリオン・バグの場所まで誘導できると思うんです。たぶん、効率よくバグを退治する手伝いができると思います』

『どうするんだ、リャノン』
困ったように、ファルコンがリャノンに意見を求めた。
『好きにすればいい。依頼主（クライアント）は、ファータだ。それに、縛りつけでもしない限り、止めたって勝手についてくるだろうからな』
『はい』
無邪気というか、素直にファータがリャノンの言葉を肯定した。
『しゃあねえな。本当は、任せてくれた方が気楽なんだが』
渋りながらも、ファルコンがファータの同行を認めた。ナビゲーション情報を入手できるのはありがたいが、指示されながらの戦闘は彼の性分に合わなかった。
『邪魔はしません』
ファータが安請け合いする。
『……だが、自分の手でバグを倒したいのなら、最初からそう言え。いくぞ！』
少女の本心を見すかして、リャノンは一言言い添えた。ヴィジランティとレッド・ブランチを先導するようにしてカヒライスがゲートに突入する。
下り勾配の通路をバグを倒しながら進み、一行は大型エレベータまでたどり着いた。ＡＣのマニピュレーターを使ってエレベータを作動させる。地下都市への資材搬入にも使われるエレベータやリフトは、基本的にＡＣに乗ったままで操作できるように作られていた。

地下複合都市（ビーハイブ）の基本構造は、縦割りの階級階層そのものの構造となっていた。地上部には発電衛星から電力を受け取るレクテナ・システムや空調施設があり、地下都市の最上層はそれらの関連施設がある。その下には、それらの施設の恩恵を直接受ける高級市街地が広がっていた。階層が下にいくほどに住民は労働階層へとシフトしていき、フロアの構成も住宅地帯から工業地帯へと割合を変えていく。最下層は、鉱物資源の採掘場となっており、採掘後の空洞は新たな住居エリアとして作り替えられていく。そして、さらにその下に新たな採掘場が作られていくという具合にして、地下都市は地の底深く浸食していくのであった。そう、その姿は、発展ではなく浸食と言うのにふさわしい。そんな地下都市が、バグによってむしばまれつつあるというのも、一つの皮肉であるのかもしれない。大破壊以後の世界には、当事者たちだけが気づかない皮肉や滑稽（こっけい）が満ちあふれていた。
さらにパイプのような通路をいくつか抜け、エレベータを乗り継ぎながらリャノンたちは住宅地にたどり着いた。
ガル・シティはそれほど大きな都市ではない。アイザック・シティの一衛星都市といった位置づけだ。それでも、高層ビルを林立できるほどの空間が、ぽっかりとそこに広がっていた。その広い空間に、ウォリアー・バグの大群がひしめきあっている。
『洒落にならないぜ、この数はよお』
虫嫌いの人間が見たら卒倒しかねない光景を前に、ファルコンがうめいた。

『でも、女王蟻にあたるセンチュリオン・バグさえ倒せば、活路はあります。たぶん、突然バグが襲ってきたのは、蟻や蜂の巣分けみたいなものだと思うんです。複数の女王がいる巣は、どちらかの女王が他の場所に移動して新しい巣を作りますから。野生化したバグが、そんな本能みたいなものを身につけたとしても不思議じゃありません。そして、ウォリアー・バグは、それについてきただけですから、センチュリオン・バグを倒せばもとの巣に戻っていくはずです』

『それでいいのか？』

根本的な解決じゃないとファルコンが聞き返した。直後に、バグが生き残れば、また依頼があるかもと、不謹慎な考えを頭によぎらせる。

『いまさら相談する状況じゃないな』

リャノンが、二人の問答を切り上げさせた。バグたちが、彼らに気づいて動き出したのだ。それまでの戦闘でやられたのであろうシティ・ガード専用のMTであるガード・ウォーカーの残骸や、千切れ飛んだ仲間のバグの残骸などを躊躇(ちゅうちょ)なく踏みしだきながら、ぞろぞろと前進を始めている。

『俺たちがこの周辺のバグを退治する間に、センチュリオン・バグの位置を正確に割り出して誘導してくれ。それ以外は、極力戦闘は避けて逃げ回れ。いいな』

ファータに指示すると、リャノンはファルコンをうながして戦闘を開始した。

片膝をついて射撃体勢をとると、肩のレーザー・キャノン(WC01QL)をバグの群れにむかって連射した。ゆっくりと射線を回転させながら、周囲の敵を一掃する。その攻撃の隙間を縫ってファルコンが突進し、リャノンの攻撃をまぬがれはしたもののパニックになって右往左往するバグを、レーザーブレード(LS2001)で次々に仕留めていった。一通りの攻撃を行ったリャノンも、弾がもったいないとばかりに、レーザーブレード(LS3301)を発生させて接近戦を開始する。

大地を埋め尽くすと思われるほどいたバグの群れが、瞬く間に原形をとどめない死体とも残骸ともつかない物に変えられていった。

「この人たち、本当に強いんだ……。本物のレイヴンって、こんなに凄いものなの……」

二人の本格的な戦いを目のあたりにしたファータが、思わずつぶやいていた。ガード・ウォーカーがあれほど苦戦し、最終的には敗北したバグの群れに対して、レイヴンたちは圧倒的戦闘力で凌駕(りょうが)していく。これが、アーマード・コア(AC)の力なのだろうか。今までアリーナなどにはいったことがなかったし、一年前には混乱のさなかにレイヴンと出会ったので彼らにどのように助けられたのかもよく覚えてはいなかった。今、こうして目のあたりに彼らの戦いを見ると、その凄さにあらためて驚嘆せずにはいられない。

思わずリャノンたちの戦いに見入ってしまったファータは、突然の衝撃で我に返った。瓦礫(がれき)に半ば身を隠すようにしていたバグが、攻撃をしかけてきたのだ。幸いにして、バグの放ったスプライト弾は、レッド・ブランチに装備されている実体弾反射スクリーン(SPSSCR)のおかげで

威力をそがれ、ダメージらしいダメージは受けていなかった。

「お前たちは、存在してはいけないのよ！」

ホバー推進に切り替えたレッド・ブランチを素早く回頭させると、ファータは機首に装備されたプラズマキャノンを発射した。気体を高温高圧に凝縮したプラズマを電磁加速したビームが、バグを跡形もなく消滅させた。

「本当に、このリグなら、バグの中を突き進むこともできる……」

あらためて自分が乗っている物の実体を感じて、ファータがつぶやいた。

『大丈夫か』

ファータの戦闘に気づいて、リャノンは一時的に後退して訊ねた。

『ええ。このリグに乗っている限り、私は大丈夫です。それよりも、進みましょう。バグの巣は、このエリアの中央管理施設の中にあります』

何かの自信のようなものを込めて、ファータが答えた。

『聞こえたか、ファルコン』

『ああ。誘導してくれ』

三人は、フォーメーションを組み直すと進撃を始めた。

最後尾に位置するファータが敵の分布を正確に割り出し、それに従ってリャノンが遠距離射撃で先制攻撃をし、討ちもらしたバグはファルコンが個別に仕留めるという作戦だ。

『おい、もう少し残してくれたっていいんだぜ』

残弾数を気にして、白兵戦主体に切り替えたファルコンが言った。ガレージでの言葉通り、継戦能力を重視したリャノンは余裕を持って敵を倒している。理論的には、全弾で五〇匹ほどのバグを倒せる弾薬を持ってきたファルコンに対して、リャノンは二六〇匹ものバグを倒せるだけの装備を持ってきていた。もちろん、レーザーブレードによる白兵戦でエネルギーの続く限り敵を倒すことができるので、飛び道具がなくなっても二人とも無力化するわけではない。それにしても、この差はバグに対する知識の差であるとしか言いようがなかった。

『前方一〇〇メートル先の交差点を右N方向へ。進行N方向に敵六体、後方S方向に敵三体確認』

『了解』

ファータのナビゲーションに従って、二機のACが素早く進路を確保した。ビル間を縫う幹線道路をブースターダッシュで一気に交差点まで進むと、背中合わせにポジションをとり、前後の敵を一気に殲滅する。

リグの到着を待ってN方向に進路をとると、前方に円筒形をした他とは違うデザインのビルが見えた。ビル周辺には、バグがひしめいている。

レーザー光が乱舞し、ほどなく周囲には焼き殺されたバグの死体の山が積み上げられた。

『ここが中央通信ビルです。バグの密度が一番高く、壁に巣の入り口らしい大きな穴が開い

ています。おそらく、ドのエリアとの間の岩盤に、巣を形成しているものと思われます』

『その中に親玉がいるってわけだな』

いよいよだと、ファルコンが意気込んだ。

『ええ。センチュリオン・バグはその最深部にいるはずです。時間的にまだ巣はそれほど広がっていないでしょうから、ほぼ一本道で最深部へとつながっているはずです』

『よし、ここから先はACでなければ無理だ。周辺のバグを一掃した後に、ファータのレッド・ブランチはここに固定。俺たちのレーダーとリンクして、敵情報を逐次報告してくれ。いいな』

リャノンの命令に、ファータが今度は素直に従った。

『バグたちの大きさに比べると、やけにでかいトンネルだな』

人間型のACが楽に直立して進めるだけの大きさのトンネルをのぞき込んでファルコンが言った。

『この大きさが、女王の大きさということだ。なめてかかるなよ』

リャノンは経験からファルコンをうながすと、穴の中に進んでいった。

バグたちの作った曲がりくねった地下トンネルを、出会う敵を順次倒しながらリャノンたちは進んでいった。対センチュリオン・バグ用に必要な残弾を確保しつつ、レーザーブレードで敵を薙ぎ払う。

『前方にやや広い空間。敵三体確認。撃破後は、左E方向の穴に進んでください。右W方向の穴はウォリアー・バグ専用の小型トンネルで、ACでは先に進めません』

相変わらず的確なファータのナビゲーションに助けられながら、やがて二人は最深部へと到達した。

『気をつけてください。その先にターゲットがいます』

今までで一番広い空間には、壁一面に卵らしき物がびっしりと埋め尽くされていた。いくつかの卵からは、孵化したばかりらしいウォリアー・バグが這い出しかけている。卵室の中央には、多くの子供たちを従えたセンチュリオン・バグがその巨体を横たえていた。大きさはゆうにウォリアー・バグの一〇倍近くある。

『一気に叩くぞ!』

ファルコンをうながすと、リャノンは卵室内に右肩のレーザーキャノンの残弾を叩き込んだ。猫が喉を鳴らすようなバグたちの鳴き声が卵室内にこだまし、燃え上がったバグたちによって炎が吹き荒れた。センチュリオン・バグを仕留めはできないものの、ウォリアー・バグの半数は粉砕に成功する。

敵の侵入に気づいたセンチュリオン・バグが、背中の突起状の器官から強力なライン・ビームを連射してきた。リャノンは、肩部キャノン発射時の反動を巧みに利用して、攻撃しつつ曲がったトンネルの奥に後退して敵の射線を回避した。武器と機体の特性を知り抜いた攻

撃方法だ。
　射撃体勢を解くと、キャノンの連射によって低下したジェネレータ（GBG 10000）の出力の復活を待って、レーザーライフルを構える。そして、ブースターを全開にして飛び上がると、一気に卵室の中に躍り込んだ。
　空中からレーザーライフルで狙撃するカヒライスにむかって、センチュリオン・バグが身体を伸び上がるようにしてライン・ビームを発射した。ブースターの断続使用でエネルギーを節約しながら、カヒライスが空中で囮の役目を確実にはたす。
　その間に、ヴィジランティがセンチュリオン・バグの正面まで一気にブースター・ダッシュで接近した。ウォリアー・バグからの攻撃をあえて無視しながら、ヴィジランティはスラッグガンの発射体勢をとった。目の前の頭をもたげたセンチュリオン・バグの腹にむかって、至近距離からスラッグガンを発射する。散弾の全弾直撃を受けて、反動でセンチュリオン・バグの体が大きく浮き上がった。その間に、スラッグガンの次弾のカートリッジがリロードされる。ファルコンが、続けてスラッグガンを叩き込んだ。たまらず、センチュリオン・バグがひっくり返る。ファルコンは発射体勢を解くと、残るウォリアー・バグに標的を移した。
　こうなってしまえば、起き上がるまで敵は無力だ。カヒライスはその腹の上にACの全重量をかけて着地すると、エネルギーの回復率を睨みながら、オーバーヒートを起こさぬように気をつけてレーザーライフルを連射した。センチュリオン・バグの腹部が赤熱化し炎が生

体兵器の全身に広がっていった。
　リャノンは敵の上から飛び降りると、レーザーブレードでウォリアー・バグと戦っていたファルコンをうながしていったん後退した。
　断末魔の叫びを上げて、センチュリオン・バグが爆発を起こして飛び散る。大半のウォリアー・バグが、巻き込まれて運命をともにした。残ったバグたちは、女王を殺されてパニックに陥っている。
『よっしゃあ。いっちょうあがり！』
　ファルコンが勝利の雄叫びを上げる。
『ターゲットの消滅を確認しました。これで、バグたちはシティの外に退却していくはずです。けれども、ここで生まれたバグはそうではありません、引き続き巣の中のバグは殲滅してください』
　センチュリオン・バグの消滅を確認したファータが二人に、残る必要な処理を伝えた。
『しゃあない。最後まで片づけるとするか』
　くさるでもなく、ファルコンが掃討を始めた。リャノンも、左肩のレーザーキャノンで、壁の卵を焼却していく。
　レーダー上の消えていく生体反応でその様子を確認していったファータは、状況が最後の段階に入ったことを確信した。通信機のスイッチを切ると、レッド・ブランチを近くのビル

の方に移動させる。そこは、ファータが住んでいたアパートのあるビルだった。

目につくバグをプラズマキャノンで焼き殺すと、ビルの入り口を守るようにしてリグを横づけする。意を決すると、ファータはリグから外に飛び出していった。

『ようし、これで巣の中のバグはあらかた駆除できたはずだ。多少残っていても、後はシティ・ガードで何とかできるだろう。——ファータ、外部の状況を知らせてくれ。……ファータ、どうした、返事をしろ』

リャノンは何度か呼び出してみたが、ファータからの返事はなかった。空っぽのリグのコックピットの中で、彼の声が空しく響くだけだ。

『何かあったのか』

『わからん、とにかく戻ろう』

問いただすファルコンに合図すると、リャノンはファータのもとへ急いだ。

5

アパートの上層階にバグが侵入していないことを祈りながら、ファータは階段を駆け上っていった。非常時には、エレベータは使用しない方がいい。

やっと自分の部屋の前にたどり着くと、ファータは父が生前隠し持っていた箱を捜した。

身辺整理をしたときに、偶然見つけた物だ。

箱を開けると、中に入っていた実弾型の銃を取り出す。この銃には、彼女の父親の贖罪のすべてが込められているはずだった。それを送り届けなければならない。それが自分の使命だと、ファータは強く思い込んでいた。

急がないと、センチュリオン・バグを失ったバグたちは撤退を始めているはずだ。

転げるように階段を駆け下りると、ファータはコンバット・リグの陰に身を潜めて、バグたちが近くを通り過ぎるのを待った。

やがて、各ビルの地下に巣食っていたウォリアー・バグたちが一斉に這い出してきた。センチュリオン・バグの発する集合信号のようなものが途切れたため、別のセンチュリオン・バグのいる古巣へと帰還を開始したのだ。

基本的に帰巣本能が優先しているため、バグたちはファータには関心がないようだった。

ファータは慎重に狙いを定めると、一匹のバグにむかって発砲した。

特殊な弾丸が命中する。わずかに体液が飛び散り、弾丸はバグの体内深くにめり込んでいった。痛みというものを感じるのだろうか、攻撃されたバグが立ち止まって周りを見回す。

だが、すぐに他のバグに混じって立ち去っていった。

これならいけると感じたファータは、残り五発の弾丸も、それぞれ別のバグに対して次々と撃ち込んでいった。バグたちの群れも、すでに大半が地上にむかう自分たちで掘った穴や

通路に逃げ込んでいた。

「あと一発……」

ファータは、最後尾と思われるバグを追いかけて、リグの陰から走り出た。後ろから、腹にあたる部分めがけて発砲する。見事に命中し、バグが音にならない叫びを上げた。

「済んだわ……」

ファータがほっとした瞬間、バグがくるりと反転した。ファータに対して、明確な敵意が浴びせられた。

バグの巨大な顎（あぎと）がゆっくりと開いていくのを、ファータは放心したように見つめていた。喉の奥に、生成されたスプライト弾の発光が見える。これは報いなのだろうか。生体兵器の開発に関わった一家に対する、死んでいった人々の怨嗟（えんさ）が吐き出されようとしているのだろうか。それとも、勝手に生み出され、勝手に殺されていくバグたちの怒りなのだろうか。あるいは、レイヴンたちを騙したことへの、払うべき代償なのかもしれない……。

ファータは、覚悟を決めて静かに目を閉じた。

甲高い射出音とともに、スプライト弾のものによる爆発がすぐ近くで起こった。だが、爆風と熱を感じながらも、不思議と痛みはない。目を開けたファータは、自分の前に立ちふさがって盾となった青いACの姿を見た。

どこかで見たことがある。記憶がささやいた。

『大丈夫か！』

リャノンの声が響き、カヒライスが敵を倒そうとレーザーライフルを掲げた。

「だめ！　そのバグを殺してはだめ!!」

ファータは、力の限り叫んだ。

外部音声モニタでその声を拾ったリャノンが、反射的にライフルの銃口を下げる。発射されたレーザーは、バグとカヒライスの中間のアスファルトを溶かした。それを感じて、バグが慌てて逃げていく。

『何やってるんだよ』

ブースター出力の違いから、遅れてやってきたファルコンが怒鳴った。リャノンが討ちもらしたと思ったからだ。代わりに狙撃しようとするも、ビーム透過フィルターの耐久限度に達したハンドパルスレーザーガンは、保護装置が働いてトリガーを引いても反応しなかった。

「ちっ」

軽く舌打ちすると、ファルコンがレーザーブレードを発生させて追いかけようとする。それを、リャノンは押しとどめた。

『もうバグを殺してはいけないそうだ』

『それはどういうことだよ、いったい。依頼と違うじゃねえか。それに、だいたい何でファータがリグを降りてうろうろしてたんだ』

リャノンの言葉に、ファルコンが食ってかかる。
『それは、ファータの口から聞かせてもらおう』
リャノンが言った。
巨大な二機のACが、ずいとファータの方に、そのカメラアイをむける。
「さっきのバグには、特殊な細菌を撃ち込んだの」
ファータは、ゆっくりと口を開いた。
その細菌は、ファータの父親が密かに開発した物だった。最初のバグの脱走事件で妻を亡くした彼は、バグに対する恨みをそのときからいだいていた。ファータの前でも、つつみ隠さずその感情をあらわにしたものだ。バグの体組織生成の研究に関わった彼は、バグにとって致命的な細菌を作り出した。バグの細胞だけに感染する細菌。それは、バグの体細胞を餌として増殖し、バグにとってのエネルギージェネレータに相当する器官の細胞隔壁を分解する酵素を放出する細菌だった。それに冒されたバグは、内部から崩壊して燃え上がる。
『そんないいもんがあったんなら、何で最初から使わなかったんだ』
ファルコンが、率直な疑問を口にした。
「潜伏期間が問題だったのよ」
ファータは答えた。細菌の効果は強力であるが、ファータの父親が意図していたものは即効性ではなかった。彼は目の前のバグを殺すことを目的としたのではなく、バグそのものを

全滅させることを目的にこの細菌を開発したのだった。そのため、接触感染してから発症までは一週間という長い期間を必要とした。その間に、キャリアとなったバグからは巣の中の他のバグたちに次々と感染していき、最終的にはすべてのバグが感染して死ぬという仕組みになっていた。
「一週間もかかっては、ガル・シティは全滅してしまうわ。その後にバグが全滅したとしても、それじゃ何にもならないじゃない。それに、バグに襲撃されたとき、私はこの細菌を取りにいくことができない位置にいたのよ。それに、ガル・シティのバグを一掃できたとしても、野生化したバグが全滅するわけじゃないわ。またいつ襲ってくるかもしれない。そのすべてを解決してくれる存在があなたたちレイヴンだったのよ。バグを倒して細菌弾を取りにいくチャンスを作り、センチュリオン・バグを倒してバグたちをもとの住処に追い返してくれる、それができるのはレイヴンであるあなたたちだけだったわ」
『全部計算ずくだったってわけか。見かけによらず、油断できない女だったってわけだ』
してやられたと、ファルコンが言った。利用されたとまでは言わないが、内緒の思惑通りに使われたということにはいくぶん怒っているようだ。
「ごめんなさい……」
ファータは、つぶやくように言った。
『言うべきことは、最初からすべて言っておくべきだな。でなければ、いらないトラブルを

呼び込むもとになる』

　何かを見すかすように言うと、リャノンはまだ周囲にバグが残っていないか確認に動いた。周囲に散らばるバグの死骸や、ガード・ウォーカーの残骸などを丹念に調べる。

『やれやれ、思ったよりまめな奴だなあ。そこまでしたって、報酬は変わらないんだぜ』

　リャノンの行動を見て、ファルコンが少し呆れたように言った。

『まっ、これで四〇〇〇〇コーム、いや、山分けだから二〇〇〇〇コームか。どちらにしろ、いい儲けには違いない。おっと、アヴァロン・バレーに戻ったら、支払いは迅速に頼むぜ。いや、ファータはここの住人だったよな。ここで払ってもらった方が都合がいいか』

　すでに報酬の方に関心が移ったファルコンが、いくぶん機嫌を直してファータに告げた。

「お金なら……ないわ」

　ぽつりと、ファータは答えた。

『ん!? 今、何て言ったんだ?』

　とっさに意味がわからず、ファルコンが聞き返した。

「お金はないの。私は、最初からあなたたちを騙していたのよ。カードの残金はほとんどないわ」

　取り出したカードを地面に投げ捨ててファータは叫んだ。

『何だと!!』

　激怒したファルコンが、ヴィジランティの持つハンドパルスレーザーガンをファータに突きつけた。少女の頭ほどもある銃口が、死の淵の入り口でもあるかのような深淵をぽっかりとのぞかせながら目前に迫った。ACの巨大さが、あらためて圧倒的な威圧感を持ってファータの全身にのしかかってきた。

「いいわ、好きにして。私は、もう終わったから……」

　ファータはささやくと、静かに目を閉じた。

　復讐は、もう終わったのだ。この一年以上の間いだき続けてきた怒りも、恨みも、今となっては誰かの語る昔話のような気がする。すべては終わった。そう、彼女自身のすべても。そう考えると、なぜか心安らかだった。銃口をむけるACは威圧的な存在だったが、なぜか恐怖は感じない。死への恐怖、それよりも今は充実感が勝っていた。

『冗談じゃねえ、誰がそれで済ませると言った。死にたくなかったら、その身を売ってでも俺に対する借金を払うんだ。今ここでそれを誓いな。でなければ、灰も残さず焼き尽くすぜ』

　ファルコンが、凄みのある声で脅した。レイヴンとしての貪欲な一面を、もろに前面に押し出している。

　だが、ファータは動じなかった。

『二人とも、そこらへんにしておけ』

　見かねたように、リャノンが間に割って入った。

『どのみち、その銃はもう撃てないだろうが』

先ほど残弾が尽きているのを見ていたリャノンは、いつまでそんな格好をしているとばかりにファルコンに言った。

『そんなことは大した問題じゃねえ。ちょっとこいつで殴るだけだって、人間なんて簡単にミンチにできるんだぜ』

わめくファルコンに、リャノンは何かを押しつけた。

『ここのガードはいい武器を使ってるな』

『どういう意味だ』

唐突に言うリャノンに、ファルコンがいきなり押しつけられた中型(WM)ミサイルランチャーに戸惑いながら怒鳴り返した。

『ここのシティ・ガードの物だ、シティを守った俺たちが拾い物をもらったとしても、文句を言われる筋合いじゃないさ。こいつをそっくりお前にやろう。それを売れば、報酬分ぐらいにはなるだろう』

『そいつは悪くはないが、お前はどうするんだ。こいつの代金を半分よこせと言うつもりか』

とりあえずはそれで我慢しようと決めたらしいファルコンが、リャノンに問い返した。ただ働きよりは、使い古しのミサイルランチャーの方がまだましではある。

『いや、そいつはお前の好きにすればいい。そっくりくれてやる』

素っ気なくリャノンは答えた。

『お前はそれでいいのかよ。まったくのただ働きになるんだぜ』

『かまわないさ。小娘の嘘を見抜けなかった俺への罰ということにしておく』

本当にそうなのだろうかと、ファルコンとファータはいぶかしんだ。どうも、リャノンは最初から知りすぎていた感がある。ファータの嘘も、最初から見抜いていたというのが本当のところだろう。

『なら、そういうことにしておこう。それがルールだ』

ファルコンが、それで納得する素振りを見せた。しょせんはレイヴン同士、不干渉のルールはきっちりと守る。

「あなたは、それでいいの？」

だが、ファータは納得できなかった。

『いいと言っている』

ため息をつくようにリャノンは答えた。

「嘘。それって、正義漢ぶっているの。それとも、私を哀れんでいる……」

『どちらでもないさ』

「それじゃ納得できない！」

ファータは叫んだ。すべきことがすべて済んで、空っぽになったと思ったのに、リャノン

はファータの中にまた何かを注ぎ込んだのだ。疑問、興味、関心、疑惑……、混沌とする思考は、それをうまく言葉で言い表せない。

激しい感情をほとばしらせるファータを見て、リャノンはコックピットをオープンさせて生身を現した。

「お前が納得しようがしまいが、俺には関係ない。ここでお別れだ」

ちっぽけな少女を見下ろすようにしてぞんざいに告げる。

「帰還するぞ、ファルコン」

ファータへの用件は済んだとばかりに、リャノンはファルコンの方をむいて言った。

「待ってよ、どうしてそう自分一人で何でも決めるのよ。あなたは、何でも知っていると言うの！」

見上げたリャノンの顔を睨みつけながら、ファータが叫んだ。

「自分のことは自分で決める。当たり前のことだ。それに、俺はお前よりは物知りだろう」

「なら、私も自分のことは自分で決める。私はあなたたちについていく」

きっぱりとファータは言い切った。

「おいおい、二人とも何やってるんだよ。これじゃ、まるで痴話喧嘩だぜ」

リャノン同様にコックピットから出てきたファルコンが、呆れたように叫んだ。

「確かに、私はあなたたちレイヴンを利用したわ。でも、利用したままじゃ嫌。それじゃ、

あなたたちが凄くいい人みたいじゃない。私だけが悪者なの？ そんなんじゃ納得できないわ。借りはちゃんと返します。オペレータでもドライバーでも雑用でも、何でもいいから働いて報酬分は絶対返します！」

ファータは、まくしたてた。

「好きにしろ。勝手に働いて金を振り込んでくる分には咎(とが)めるつもりはない」

「違うわよ。私はリャノン、あなたについていくの」

とぼけるリャノンに、ファータはきっぱりと訂正した。

「ついてくる必要はない。迷惑だ」

顔をしかめながらリャノンは言った。いまさらお荷物をかかえ込むのはまっぴらだった。

そんなリャノンの姿を見て、ファルコンが大きな笑い声を立てた。

「ふっ、いいねえ。バグを退治するまでは、おとなしく猫を被ってたみたいだったが、どうやらその気の強いのが本性らしいな。好みだぜ」

フロントパネルに片足をかけてポーズをとりながら、まんざらでもないようにファルコンが言う。

「どうだリャノン、こういうのは。さっきのミサイルはお前に返す。替わりに、この女を俺にくれ。どうだ、悪くない取引だろう」

まるでファータが賞品か何かであるかのように、気安くファルコンが提案した。好色そう

ににやつく彼の顔を見て、さすがにファータは後ずさった。予想外の展開に戸惑いながら、救いを求めるようにしてリャノンを振りあおぐ。

瞬間、リャノンは彼女の目を見てしまった。どこまでも深い黒い瞳……。

「リグに乗れ。どのみち、地上までは運転してもらわないと困る」

しかたなさそうにリャノンは言った。現状では、そう言わざるをえない。あるいは、騙されたふりをしたつもりが、最後にはうまく少女にはめられたかと、リャノンは心の中で静かにため息をついた。

「じゃ、ついていってもいいのね」

ぱっと顔を輝かせて、ファータが聞き返した。

「好きにすればいい。俺はいつもそうしてきた」

リャノンはつぶやいた。

「ちっ。だったら最初からそう言えばいいものを」

軽く舌打ちして、ファルコンがコックピットの中に引っ込んだ。

半分はお前のせいだと言いたげにちらりと視線を走らせると、リャノンは小走りにリグにむかって駆けていく少女の後ろ姿をしばらく見つめていた。

MISSION 2

『調査組織撃退』

1

敵は、クレッセントＩｄ。
くすんだような金色のボディがまばゆい、重装型二足歩行タイプ。武装は、肩の中型ミサイルランチャー（WMMVG802）二基にハンディショットガン（WGHG1）。
ビルの屋上に待機しながら、リャノンはファータとの事前の打ち合わせを思い出していた。
「――敵の有効射程距離は、ミサイルが一〇〇〇〇、散弾銃が六三〇〇。完全な中・近距離攻撃タイプです。ネックなのは、索敵範囲が五九八〇と短いということですね」
　レッド・ブランチの中のコンピュータを操りながら、ファータは少々事務的にリャノンに告げていった。心なしか、今ではいっぱしのオペレータの顔をしている。
「つまり、遠距離からのミサイル攻撃はほぼないということだな」
「ええ。だからといって、油断していると接近されて集中砲火を浴びる可能性があります。見かけは足の遅い機体ですが、高効率のブースター（BT001）をつけているため長時間のブースターダッシュが可能です。急加速ができない代わりに、巡航移動やジャンプを多用した攻撃をしかけてくると思います。接近された場合、敵の火力と命中率は侮れません」

　収集した情報から組み立てた敵ACの予想データを表示しながらファータが言った。

「ショルダーキャノンの再充塡時間（リロード）を考えると、接近戦は不利か」

　敵はエネルギーを消費しない実体弾を使っている。しかも散弾だ。ブースター移動されながらこまめに攻撃されたのでは、こちらも機動力で対応するしかない。だが、接近戦では射撃体勢をとる時間はないだろう。

「こちらの有利な点は、ライフルの射程が一四〇〇〇、キャノンが一五〇〇〇、レーダー索敵範囲は一六三〇〇あるということですね。基本的な戦法としては、長距離からの狙撃です。具体的には、敵レーダー範囲外の六〇〇〇以上の距離、安全策をとるなら、敵の最大有効射程距離の一〇〇〇〇以遠からこちらの最大射程距離の一四〇〇〇の間に位置するようにすれば、一方的に攻撃することができます。ミサイルの防御策はとっておきますので、一〇〇〇〇前後でもたぶん問題はないと思います」

「言うのは簡単だな。敵が機体構成を変えてくる可能性というものもあるだろうに。それに、パイロットは三日月と名乗るランカーだ。敵もこちらの手を読んでくるだろう」

「だから、この戦法が有効だと思うんです。噂では、三日月という人は、冷徹に敵を排除するタイプの人だそうです。だとすれば、自分の腕には絶対の自信を持っているはずです。そういう人が、ころころと戦闘スタイルを変えるでしょうか。たぶん、自分の力量で真っ向からぶつかってくるはずです。それで勝てると信じているでしょうから。だとすれば、そこに

勝機はあると思うんですけど……」

　一所懸命集めてきた情報をならべながら、ファータが独自の見解を述べた。どうしてどうして、大した戦略家だ。

「よくしゃべる口だ」

「皮肉ですか」

　感心して苦笑するリャノンの言葉に、ファータは少し口を尖らせた。

「誉めているんだよ。だが、遠距離を保つのは口で言うほど簡単じゃないからな」

「でも、力量が拮抗しているのなら、不可能ではないでしょう？」

「言ってくれる」

　言い返されて、リャノンは再び苦笑した。

「リャノンなら、できますよ。幸い、戦闘フィールドは放置された旧市街地です。ビル群の屋上をうまく移動すれば、狙撃は可能です。ライフルならおよそ三〇発、キャノンなら一〇発程度で倒せるはずです。オーバーヒートだけには気をつけてください」

　確かに、ファータの戦略は正しかった。それにあわせて、リャノンは火器管制装置（Fire Control System）とレーダーも遠距離の物に換装していた。だが、おかげでロックオンサイトが極端に狭くなってしまっている。そこは、自分の腕で補うしかなかった。

メインモニタには、豆粒のようなクレッセントＩｄの姿が映っている。こちらを捜して移動中のようだ。重装タイプは極端に足が遅いのを、ブースターによる加速移動を基本移動方式とすることによって機動性の不足分を補っている。だが、ブースターが無限に連続使用できる物でない以上、一息つく瞬間がある。その瞬間を狙って、リャノンは数発ずつのビームを叩き込んでは場所を移動するという戦法を繰り返した。一度攻撃すれば、射線から位置が予測されてしまう。一つ場所に長居は無用だった。

一方的に攻撃を受けている三日月は、さぞや苛立っていることだろう。リャノンの予想を裏づけるように、クレッセントＩｄの動きがそれまでと違ってきた。一目散に逃げ出すように、定められた戦闘エリアぎりぎりのビルの屋上へと移動する。

現在のカヒライスの位置では、途中のビルが邪魔で攻撃ができない。

リャノンは、射線が通る位置のビルの上へとジャンプした。そこへ、ミサイルが飛んでくる。機体に装備された自動迎撃システムが作動し、小型の対空砲が弾幕を張ってミサイルを撃墜した。即座に索敵したが、クレッセントＩｄがいるはずのビルの上には、ＡＣの機影は見えなかった。

こちらの動きを読まれた……。いや、誘い込まれたのだ。死角の多い場所に移動し、そこに対する狙撃ポイントを限定させ、敵を思惑通りの場所に移動させる。敵がそこへ移動中に、全速でそこに先回りする作戦だ。

急接近してくる黄色の輝点が、レーダーに映し出された。

「下か!!」

叫ぶリャノンの眼前に、上昇してきたクレッセントＩｄの姿がメインモニタいっぱいに広がった。肩の三日月（クレッセントムーン）を描いたエンブレムが閃光とともにモニタにアップになる。

「くっ!」

叩きつけられるような強力なレーザーブレード（LS-99 MOONLIGHT）の光に機体を焼かれながら、リャノンは機体を高速後退させた。レーザーライフルを撃ちながら背後のビルの屋上までジャンプする。

即座に、容赦なく二基のミサイルが追いかけてきた。さすがはランカーだ。やはり、一筋縄では勝たせてはくれない。

ブースターを使った空中機動で回避運動をとる。ミサイルがカヒライスの上空を通り過ぎていった。ミサイル・ジャマー（SPJAM）が効果を発揮してくれたようだ。

一息つく暇もなく、ビルの上からクレッセントＩｄがショットガンを撃ってくる。リャノンはあえてそれを無視すると、ショルダーキャノンをカヒライスに構えさせた。距離があれば、拡散した弾丸は全弾が命中することはありえない。命中こそすれ、一撃では致命傷となりえないはずだ。短時間なら、耐えきることは容易だ。

降り注ぐ敵弾の中、起死回生の攻撃が放たれる。ビルの端に命中したエネルギー弾は、巨大な爆炎を巻き上げてクレッセントＩｄをつつみ込んだ。直撃ではないにしても、かなりの



ダメージを受けたはずだ。敵が態勢を立て直す前に、可能な限り連続攻撃を浴びせる。
　ぼろぼろにされたクレッセントＩｄが、たまらずビルの裏側に落下した。リャノンは素早くビルを回り込むと、落下してくる敵に至近距離からレーザーライフルを連射した。敵が回頭して攻撃する前に、一気に決めてしまうつもりだ。
　集中攻撃を浴びたクレッセントＩｄは、着地と同時にバランスを崩して横転した。足の関節が破壊され、右腕も原形がなくなっている。
　試合の終了シグナルが、主催者から送られてきた。
　リャノンは勝利したのだ。

2

「お疲れさま」
　リグに帰ってきたリャノンに、ファータが用意しておいた冷たい飲み物を差し出した。
「ずいぶん苦戦したみたいだけど、大丈夫だった？　怪我はないよね」
　見た目だけでなく、一応本人の口から無事を確認する。
　リャノンは、黙ってうなずいた。
　それだけで、ファータは納得する。

「さあてと、じゃ、アリーナの精算を済ませちゃおうっと」

軽く腕まくりする素振りをすると、ファータはオンラインの端末にむかった。今では、いっぱしのマネージャー気取りだ。

バグのミッションから、いつの間にか一月の時間が過ぎていた。

ガレージのメカニックたちも、ファータに対しては甘かった。ただでさえ女の出入りが少ない職場なのに、女レイヴンたちは緊迫感をもたらす存在にしかならないとくる。そんな中に、いわば場違いな少女が出入りし始めたのだから、自然と愛想もよくなるというものだ。つけ払いなどという、本来ありえないことが、たまにまかり通ったりもする。もっとも、メカニックたちも、リャノンが試合に勝って支払いが確実だということはちゃんと確認した上での話だが。

おかげで、ファルコンは一時期しきりにぼやいていたものだ、ミサイルなんかもらうんじゃなかったと。

掃除などの雑務から、経理関係、システムオペレート、戦略アドバイスまでと、まれにみる有能さを発揮したファータだが、リャノンとしては便利だからといって安穏と過ごすわけにもいかなかった。もともと、しっかりはしていても外見は子供っぽさの残るファータに手を出すつもりはリャノンにはさらさらなかったが、生活空間を明確に分けなければならず、いきなりリグの中が手狭になった感は拭えなかった。気ままな一匹狼に、妙な足枷(あしかせ)がついて

しまったわけだ。

しかも、ファータが勝手に算出した給料では、バグ退治の報酬を払い終わるには数年かかるということだった。つまり、しばらくは出ていく気はないということだ。

繰り返し、定期的にリャノンは心の中で冗談じゃないとつぶやいていた。天涯孤独で職場まで破壊された少女を拾ったのはいいが、保護者になると約束した覚えはない。いっそ叩き出してしまえばいいことなのだが、周囲の環境を考えるとそれもできなかった。以前のリャノンなら迷わずそうしていたはずなのだが、一度かけてしまった情けは一生ついてまわるようだ。だが、それも自分で蒔いた種の結果なのだろう。すべては、レイヴンズ＝ネストの手の内で踊っていた自分がいけなかったのだ。

「はい、ファイトマネーの受け取りと、ショップやガレージへの支払いは終わりましたと。ついでだから、ナーブで次の対戦相手の情報を仕入れておきましょうか」

いつもの明るい調子で報告すると、ファータはリャノンのＩＤでナーブに接続した。

「あれ、メイルが届いてるよ。読んでいいかなあ」

シート越しに振り返りながら、ファータが訊ねた。

「ああ、好きにしろ」

細かいことはすべて任せてあるのだから、リャノンは投げ遣りに答えた。それを聞いたファータが、慣れた手つきで電子メイルを開く。

「――レイヴン諸氏へ。ささやかな微睡みは終わった。……って、何かしら、変なメイル。いたずらかなあ。サイトアドレスが添付されてるけど、へたにアクセスしない方が利口よねえ」

ファータが、小首をかしげた。不審なメイルは、むやみに処理しない方が安全だ。だが、リャノンは、そのメイルがひどく気にかかった。

「差出人は？」

ファータのシートの後ろにやってくると、リャノンはモニタをのぞき込みながら訊ねた。

「Rとしか書いてないわ」

彼女の答えに、リャノンは眉根をしかめた。

「……アクセスしてみろ」

短く命令する。

「知らないわよ、クラックプログラムに侵入されても」

「いいから、早くアクセスしろ」

「はいはい、ただいま」

きつい調子で急かされて、ファータは渋々メイルに記載されていたサイトに接続してみた。

レイヴンズ＝ネストのロゴが現れ、ＩＤ入力ボックスが開かれた。

「レイヴンズ＝ネスト……」

リャノンがうめいた。その存在は、すでに過去のものとなっていたはずだ。

「なくなったと聞いてたのに、復活したのかしら」

あっけらかんとファータが言う。何も知らないというのは、幸せなことだ。

だが、リャノンとしては、そんなに簡単に現状を受け入れるわけにはいかなかった。ごく一部のレイヴンしか知らないことであるが、レイヴンズ＝ネストは本当に消滅していたのだ、あるレイヴンの手によって。

実際、表と裏の世界を牛耳っていたクロームとムラクモという二大企業と時期を同じくして、レイヴンズ＝ネストはレイヴンたちの前からその姿を消している。最大の顧客を失って経営破綻したのではないかというのが一般的な推測だが、それならば、メッセージの一つくらい残しても不思議ではないだろう。

クロームとムラクモの企業間戦争は、必要以上の戦果をあげたレイヴンによってバランスを崩され、両社共倒れという形で収束していた。互いに相手の極秘研究などを邪魔するためにレイヴンを雇って破壊活動をさせたのだが、その作戦が予測を上回る形で相手にダメージを与えてしまったのだ。結果、追いつめられたクロームは武装蜂起に失敗して消滅した。ムラクモも、対クローム用に開発していた衛星兵器の存在を暴かれ、新興のバージュ社によって壊滅されている。そのどちらのターニングポイントとなるミッションにも、特定のレイヴンが関わっていたという噂だった。

　仮に連鎖倒産に近い形でなくとも、最大の顧客を失ったレイヴンズ＝ネストが衰退の道をたどったであろうことは事実だろう。その場合、飼い犬に手を噛まれたごとく、一部のレイヴンたちとは確執があったのではないだろうか。結果、敗れたのはレイヴンズ＝ネストの方だったということだ。
　事情通とか情報屋と自称する者たちは、公然の秘密としてそういった情報を売っていた。だが、実際にその噂のレイヴンが誰であったのかは不明のままであったし、自らそれを騙(かた)って売り込みに使う馬鹿者も多かった。
　ともあれ、レイヴンズ＝ネストが実際に消滅したのは事実であった。リャノンは、そのことをよく知っていた。
　では、突然に復活したこのレイヴンズ＝ネストとは何なのだろう。本当にかつてのレイヴンズ＝ネストが復活したのだろうか、それとも、関連する組織などが同様のものを再建したのだろうか、あるいは、単に名前を拝借しただけの別組織なのだろうか。
　真相は、確かめる必要があった。
「ミッションの斡旋リストを表示してくれ」
　言われるままに、ファータがリャノンから聞いたIDとパスワードを入力してメインメニューに入る。そこから階層をたどってミッションの一覧にたどり着いた。
　そこには、現在依頼がきているミッションの件名と、それぞれの報酬が一覧表示されてい

た。通常は、それらのタイトルを選択すると詳細情報が表示され、依頼を受けるかどうかの設問にYESと答えると商談成立ということになる。依頼者が募集している人数に達するか、依頼が取り下げられるまでミッションは表示され続ける。
「ええと、『輸送車両護衛』、『夜間市街地警備』、『行方不明者捜索』、『調査組織撃退』。いろいろあるけれど、どうするの」
　初めて目にするレイヴンズ＝ネストに、少々戸惑いながらもファータが操作を続けていく。
「とりあえず、順に内容を確認して、適当なものを選んでくれ」
「はいはい。仕事する気になったわけね。昔の血が騒ぐのかしら」
　少しぼやきながら、ファータが順に依頼内容を開いていく。
　昔の血……。そう、それは断ち切れない因果かもしれない。
「次はと。ええと……、『調査組織撃退』。旧時代のデータ・プール施設跡と思われる廃墟に、最近正体不明の者たちが出入りしている。過去のデータが残っているとは思えないが、施設跡地を悪用してテロリストの基地でも作られてはやっかいだ、早々に撃退してほしい……ですって。推定敵戦力は、無人MT一個小隊、AC数機、他調査車両若干。報酬は一五〇〇〇コーム。依頼主はアイザック・シティガードということになっているわ」
「こいつにしよう。依頼を受けてくれ」
　目的地の地図を見て、リャノンはその依頼に決めた。

「いいのね」
何か腑に落ちないファータが、リャノンに念押しした。答える代わりに、リャノンはファータの手に自分の手を重ねて、ポインティングデバイスのボタンを押した。そして、契約が成される。
「んもう、乱暴なんだから。この無神経男」
驚いたファータが、慌てて手を引っ込める。
「すぐに出発するぞ。準備をしておけ」
わずかに頬を染めたファータの顔を振り返りもせずに、リャノンはそう言い残してＡＣの整備にむかった。

3

目的地は、アヴァロン・バレーからかなり離れた場所にあった。起伏に富んだ丘陵地帯のさなかに、まるで隠されるようにしてその場所はあった。
直前の丘の陰でリグを停止させると、リャノンはジャイロ型の小型偵察機（クレアボイアンス）を発進させた。まずは情報収集からだ。
いつもよりさらに慎重なリャノンの姿に少々不安を覚えながら、ファータが偵察機からの

映像を解析していった。送られてきた画像が、モニタに表示される。
丘を一つ越えたむこうには、地下施設の名残だったものが広がっていた。正確な表現をすれば、漏斗（ろうと）状に地下深く広がったクレーターというところだろうか。周囲の土砂が流れ込んで半ば埋まったその縦穴は、おそらくは施設そのものが爆発するなりしてできた跡に違いなかった。
そう、そこは確かに爆発ですべてが消え去ったはずの場所であった。それとも、ここにはまだ何かが残っているとでも言うのだろうか。リャノンは、記憶をたどりながら眉根をよせた。
クレーターの周りには、急造の建物がいくつかできていた。クレーンのような物も見え、作業用のＭＴが何台かと、護衛のＭＴやＡＣが一五機近く散開している。
「かなり大規模な部隊だな」
少し予想外だったと、リャノンはつぶやいた。いつものように情報コンソールのある席に座ったファータの斜め後ろに立ちながら、軽く背をかがめてモニタをのぞき込む。
「構成は、自立型小型戦車ナースホルンが一〇機、戦闘用ＡＣスウィフトが三機、戦闘指揮官とみられるＡＣスパイトフルが一機です。他に、装甲輸送車トーラスが三台、作業クレーンＣＷ－２８３が二台、作業用ＭＴであるＷＫ７５０Ｒが二台です。輸送車両は他に見えないため、航空機で運ばれたものと思われます」

ファータが、的確に敵戦力を分析した。ナースホルンは数的にはやっかいだが、脅威というほどの物ではない。だが、四機のＡＣはパイロット次第では強敵となりうる。
さてどうするのかと、ファータがリャノンを振りあおいだ。
「馬鹿っ正直に突っ込むというのも芸がなさ過ぎる。しばらくは、様子を見よう」
リャノンは、そう判断を下した。
「珍しく消極的なのね」
怪訝そうにファータが言った。いつもなら、どうやって敵を倒すかを考えるはずだ。
「できれば、あの部隊の素性を知りたい。だいたい、まだテロリストと決まったわけじゃないしな」
「敵の正体を調べろなんてこと、依頼にはなかったわよ」
何か理由があるのだろうか、それとも、何か変な欲でも出したのだろうか。少し不安になって、ファータが聞き返した。
「依頼がすべて正しいとは限らない。依頼者が俺たちを騙しているということはよくあることだ。覚えがあるだろう」
「いじわる……」
言外の意味に、ファータが軽く目を伏せた。すまないと、リャノンはポンと少女の肩を叩いた。そして、微笑（ほほえ）んでみせる。

「依頼は受ける。だが、言いなりにはならない。それが俺のやり方だ」
きっぱりとリャノンは言い切った。
「わかりました。少し様子を見てみます」
ファータが納得したようだった。リャノンが依頼自体に疑惑をいだいているのなら、それは晴らす必要があるだろう。かつて心ならずもリャノンとファルコンを騙す形になったファータではあったが、だからといって、今ここでリャノンともどもレイヴンズ＝ネストという存在に騙されてもいいということではない。
「できれば、彼らと接触もしてみたい。指揮系統を注意して監視してくれ」
「了解」
偵察機にしかけられたガンマイクと、リグの電波センサーをフル稼動させると、ファータが全力で情報収集を始めた。
その直後のことである。突然の爆発音が、二人の乗るリグそのものを震撼（しんかん）させた。
「爆発か!?」
「敵集団の中央です。戦闘が始まっています」
リャノンに聞かれて、ファータが答えた。偵察機を操作して、攻撃をしかけた者を探査する。
「未確認のＡＣを一機確認。照合します」

ファータが叫んだ。モニタの中央には、豪快に攻撃を続けるACが映し出されていた。
　逆関節型という鳥のような脚をしたそのACは、軽量型のコアに高性能レーダーを装備した頭部（HD-06-RADER）から構成されていた。両腕はレーザーキャノンの特殊腕（AW-XC5300）、両肩には六連装ミサイルランチャー（WX-S800-GF）を装備している。銅色（あかがねいろ）の機体の左肩には、黄色い丸の中にダイナマイトを描いたエンブレムが垣間見えた。
「確認できました。AC名はブロックバスター、パイロットはランカーのダイナマイトブルです。正面から突っ込んでいっています」
「依頼されたのは、俺たちだけじゃなかったというわけか。安く見られたものだ」
　リャノンのつぶやく間にも、戦闘は拡大していった。ブロックバスターの両腕から発射されるレーザーが、クレーン車と作業用MTを薙ぎ倒す。広がる爆発の中、連射されたミサイルが、クレーターの中へと次々に吸い込まれていった。トンネル現象を起こした爆炎が、火柱と化して高々とクレーターから噴き上がった。
　巨大な火柱をバックに、ナースホルンが一斉に動き出した。砲塔を支える四脚の下につけられた球型車輪（ギア）を高速回転させながら、蛇行しつつブロックバスターにむかう。三砲身ガトリングガンが回転しながら、一斉に銃弾を吐き出した。
　ピョンピョンと位置を変えながらナースホルンの群れの横に移動したブロックバスターが、素早く回頭して雨あられとミサイルを連射する。トーラスや逃げ遅れた人間たちを容赦なく

巻き込みながら、周囲は火の海と化した。
　圧倒的火力でもって、すべてが破壊されて炎の中に消えていく。小回りが利くという逆関節の特性を生かし、小物一匹逃がさない。思いの外素早く移動しながら武器を連射するブロックバスターは、まさに破壊魔（デストロイヤー）そのものだった。
　急襲されて後手に回った敵AC部隊が、遅れ馳せにフォーメーションをとってブロックバスターを取り囲んだ。
　激しい銃撃戦でスウィフトを一機破壊するものの、四方から襲いかかるパルスレーザーに、ブロックバスターは窮地に追い込まれていった。調子づいて乱射したミサイルは、すでに残弾がないようだ。じきにレーザーキャノンを撃ち尽くしてしまえば、レーザーブレードを持たないブロックバスターは完全に無力化する。いや、その前にきっと機体が保たないだろう。
「どうするの。このまま戦闘に参加しないと、契約違反になるわよ」
「出るぞ。ミサイルで掩護（えんご）を頼む。レッド・ブランチは、すべてのACの探査範囲の外に待機させておけ」
　言われるまでもないと答えると、リャノンはリグの後部ハッチからトレーラーへとむかった。
　発進したカヒライスが、ブースターダッシュで戦闘領域へと急行する。間隔をあけてついてくるレッド・ブランチが、敵ACに対して垂直ミサイルの雨を降らせた。

突然の攻撃を受けて、敵ACが一斉に振り返るところを、レーザーライフルの一点射撃でスウィフトを一機撃破する。残る二機のACが慌てて散開した。スウィフトがブロックバスターに、スパイトフルがカヒライスにむかってくる。

突進してレーザーブレードを一閃させるスパイトフルを、カヒライスはブースターダッシュで横に振りきった。間髪を入れず、回頭した敵がチェーンガンを連射してきた。凄まじい勢いで、弾丸がカヒライスの装甲を叩く。たまらずジャンプしたリャノンは、空中を左右に泳ぎながら、敵の頭上を飛び越えて背後に回った。着地の直前にブースターを噴かすと、着地と同時に横移動し、さらに敵の横をすり抜ける形で急速後退する。背後に回ったカヒライスに相対そうと回頭したスパイトフルは、完全に裏をかかれる形となった。

無防備な敵の背部にむかって、リャノンはレーザーライフルを連射した。直撃を受けて、スパイトフルのチェーンガンが肩から吹き飛んだ。つんのめるようにして距離を開いたスパイトフルが回頭しようとする。その間に、リャノンはカヒライスにショルダーキャノンの射撃体勢をとらせた。

回頭したスパイトフルが、パルスレーザーガンを構える。そこへ、待ってましたとばかりに、リャノンは強力なエネルギー弾を叩き込んだ。直撃を受けたスパイトフルの装甲が弾け飛び、機体が内側から大きく膨れ上がる。大音響とともに火球が広がった。

『敵全滅しました。残りのスウィフトはブロックバスターが撃破したようです』

スパイトフルの破壊とともに、ファータがリャノンに現状を知らせてきた。

『生存者は？』

『……ありません』

問い返すリャノンに、ファータは少し間をおいてから答えた。

『ブロックバスターはどこにいる』

『クレーター外郭部に停止しています。カヒライスからはN方向、距離八〇〇。攻撃能力はほぼないようです』

『油断はするな。奴のレーダー圏外からミサイルはロックオンしておけ』

ファータに命じると、リャノンはブロックバスターの方に接近していった。

一瞬、ブロックバスターが右腕をむけたが、カヒライスのレーザーライフルの銃口が下にむけられていたため、渋々、そう、渋々銃口を下げた。実際には、ブロックバスターはこれ以上の戦闘は無理という状態なのだが。だいたいにして、すでにミサイルは撃ち尽くし、左腕は破壊され、右腕のレーザーキャノンも残り数発という有様だ。もちろん、パイロットのダイナマイトブルは、索敵範囲のぎりぎり圏外でミサイルの照準をつけているファータのことなど知りもしない。

『おう、助けられちまったみてえだなあ』

外部スピーカーをオンにして、ダイナマイトブルが一応の礼をリャノンに述べた。

『他に、このミッションを受けたレイヴンはいるのか？』

警戒は緩めずにリャノンは聞いた。まだ、味方と決まったわけではない。

『さあな。どっちにしろ、レイヴンズ＝ネストの輸送機は、俺専用みたいなものだったがな。じきに回収にきてくれるだろうぜ。何なら、一緒に送ってもらうか』

『遠慮しておこう』

のんきに言うダイナマイトブルに、リャノンは素っ気なく答えた。

『敵が残っていないか調べてくる。よければ、つきあうか』

『おう、いいぜ』

一つ返事でダイナマイトブルが答えた。実に単純な男だ。

ブースターを噴かすと、リャノンはクレーターの中へと飛び込んだ。遅れずに、ブロックバスターもついてくる。

クレーターの外にブロックバスターを残して上からレーザーで蒸し焼きにされるよりは、近くにおいた方が安全だった。最悪戦闘となっても、レーザーブレードの白兵戦に持ち込めば、狭い空間では一方的に勝つことができるとふんでのことだ。

クレーターの内部は、最初にダイナマイトブルの放ったミサイル群によって新規に破壊し尽くされていた。クレーターのできた当時に破壊された物の残骸と、今さっき破壊された敵部隊の残骸などが入り交じっている。こうなってしまっては、彼らが何を調べようとしていたのかは確認のしようがなかった。

『ふっ、この俺様が攻撃したんだ。何も残っちゃいねえさ』

スピーカーの音が割れるほどの大声で笑いながら、ダイナマイトブルが言った。完全破壊が自慢なのだろう。この男は、やり過ぎという言葉を知らないらしい。

『そうみたいだな。安心したよ。戻るとするか』

リャノンは嘯くと、暗いクレーターの底から脱出した。ここには掘り起こすべきものなど何もない。過去を掘り起こしたとしても、それは意味を持たないはずだ。いわば、ここは遺体のない墓穴のようなものなのだから。

「いや、もしかしたら……」

ここにやってきた者たちは、墓の主の死を確認しにきたのではないのだろうか。自分と同じように……。

暗き穴から飛び出したカヒライスを、外の光が照らした。とはいえ、それはまぶしいほどの陽光ではない。暗雲のフィルターを通された生気のない光だ。

じきにレイヴンズ＝ネストの輸送機がやってくるだろう。リャノンは、それに乗り込むつもりはなかった。

『今度会ったときは、今日の借りは返すぜ。もっとも、そういう状況だった場合の話だがな』

意味深な笑い声を立てながら、ダイナマイトブルはリャノンを見送った。

一時間ほどして、破壊し尽くされた廃墟にただ一機たたずむブロックバスターをレイヴンズ=ネストのAC輸送機（バラクーダ）が迎えにきた。
「残存機は君だけかな」
輸送機の格納庫でブロックバスターを降りたダイナマイトブルに対して、やってきた士官然とした男が訊ねた。がっしりとした体格の怪物めいた風貌のダイナマイトブルとは対照的な、細身の人形然とした無表情な優男だ。
「ああ。もう一人の奴は、さっさと自分で帰っちまったぜ」
リャノンのことをさして、ダイナマイトブルは答えた。
「途中で確認した赤いコンバット・リグがそうか……。それで、その男は、何か調べてはいなかったか」
続けて、男が質問する。
「変なこと聞く奴だぜ。別に何もしてなかったぜ。途中からは俺と一緒に行動していたし、穴の中の敵を調べにいったときも一緒だったからな」
まるで詰問されているような不快感を感じながら、ダイナマイトブルは答えて言った。
「クレーターの中に入ったのか」
「入ったは入ったが、何にもなかったけどな。敵も全員死んでたし。張り合いがなくて、奴もつまらなそうだったぜ」

「そうか。よくわかった。シティに到着するまで、自由に休んでくれたまえ」
皮肉っぽく笑うダイナマイトブルを残して、男はコックピットの方に戻っていった。
「旧レイヴンズ=ネスト本部跡……。知っていたとみるが妥当か」
自らにしか聞き取れない小声で、男はそうつぶやいた。

MISSION 3 『連合会議防衛』

1

時は過ぎていく。
レイヴンズ＝ネストは、かつてと同じように正常に機能していた。
リャノンも、アリーナに出るだけではなく、いくつかのミッションを試すかのようにこなしていった。だが、依頼内容や報酬は、ともにレイヴンにとってはまっとうなものだった。不審なところはどこにもなかった。
やがて、時間とともにレイヴンズ＝ネストは、レイヴンたちの信頼を回復させていった。
再び、レイヴンズ＝ネストのあるのが当たり前の生活が始まっている。
時は戻ったのだろうか。いや、そうではない。時は今まで空回りしていただけなのだ。決して前に進んでいたわけではない。もしそう感じていたのだとしたら、それはリャノンの錯覚だったのだろう。
そして、時の歯車は、再び噛み合って動き出した。そう、確かに午後の微睡み（まどろみ）の時間は終わったのだ。
厭世的な気分になっているリャノンとは違って、ファータはすでにレイヴンズ＝ネストのシステムにすっかり慣れてしまったようだ。仕事がやりやすくなったし、収入も増えたと手

放して喜んでいる。

　こうして、再びこの状況が日常となっていくのだろうか。レイヴンズ＝ネストあってのレイヴンたち。それが当たり前の世界に。

　定時アクセスをしていたファータが、ミッションリストを眺めながら声を上げた。久々に大きい仕事を見つけたらしい。

「凄い、一人あたり報酬五〇〇〇〇コームですって」

「『連合会議防衛』。アンバー・クラウン近郊のグローバル・ドームで行われる会議の護衛を頼みたい。当日は他組織による妨害が予想されるため、ガードだけでは力不足なのはあきらかだ。多くのレイヴンの協力を期待する。推定敵戦力は、およそＡＣ二個中隊と予想される……って、凄い数じゃない。報酬は五〇〇〇〇コーム。依頼主はサラスヴァティー社になっているわ」

　いつものように、ファータがミッションの内容を読み上げた。いくつものミッションの中から、これはというものを選び出して伝えるのはファータの仕事だ。もちろん、それを引き受けるかどうかの決定は、リャノンが行う。

「それだけの警備を必要とする会議とは何なんだ」

「調べてみるね」

　リャノンの素朴な疑問を受けて、ファータが関連資料を検索し始めた。リャノンならずとも、会議の内容は気にかかるというものだ。

　大して苦労することもなく、会議の内容は見つけることができた。経済ニュースとして、サラスヴァティー社から各企業にあてたメッセージが公開されていたからだ。『世界に孤立する指導者たちへ』というタイトルで、そのニュースはナーブ上に広く配信されていた。

　丁寧な口調で長い文章が配信されていたが、その内容は結構辛口のものだ。

『かつて理想を掲げて結成された企業体連合は、百年計画の完成を見ずして分裂してしまった。それは個々の企業が、支配という競争をしたためだ。正常な競争は、生物の新陳代謝にも似て、能力の向上と過剰部分の淘汰という働きをする。だが、人類が行ってきた競争は、過去の二大企業に代表される末端肥大という症状を起こし、世界全体を病んだままにしてしまった。アース・リフォーム計画も、自己の支配都市しか視界に入れない各企業は、いっこうに手をつけようとしてはいない。バンアレン帯の修復も、土壌の浄化も、砂漠の緑地化も、すべてが対症療法しかされてはいないのだ。これでは、やがて地下複合都市（ビーハイヴ）が地下採掘の限界に達してしまえば、人類の発展どころか、人類の生存そのものが袋小路に入ってしまうのを、防ぐことができなくなってしまうのではないだろうか。生態系として異端なものは、生態系そのものを破壊して新たな生態系を構築するか、有害なものとして排除されるかである。結果、クローム社とムラクモ・ミレニアムは自滅への道をたどった。彼らの示した形は、有害であったのだ。それは、我々企業にとっては、愚かさを示す寓話であろう。であるという

のに、各企業は未だに自己だけですべてをまかなおうとし、世界を見ようとしてはいない。そこで、我々サラスヴァティー社は提言する。今一度、企業体連合を復活させようではないかと。個々の企業の特性を生かし、分担を徹底させることによる世界規模での適正な再生を行おうではないか。対立の時代から、再び協調の時代へ。再び理想を掲げよう。掲げるべき理想もない者は、やがて滅び去る運命なのだから』

ご大層なスローガンともとれる文章の後に、会議への招待文が続いている。

「凄い、まだこんなことを考える人たちがいたんだ」

ファータが、感心半分呆れ半分でつぶやいた。

企業体連合が、互いの利権や思惑の違いから空中分解したのは周知の事実だ。そして、現在数多ある企業は、すべてその分裂した企業体連合から生まれたものである。つまりは、過去に一つ理念で一致協力することのできなかった者たちなわけだ。サラスヴァティー社は、それを再び一つにまとめようとしているのだった。

対立の時代から、再び協調の時代へ。言葉の響きは美しいが、簡単にそれに同調するほど現在の各企業が賢い存在であるとは信じ難い。

「面白い考えだが、当然の反発を招く考えでもあるな」

かつてのクロームたらんとしているバージュ社や、さらにバージュ社をも蹴落としてトップに座らんと画策しているいくつかの企業のことを視野に入れて、リャノンは今後起こる紛

争を想像した。それは、クローム社をバージュ社に、ムラクモ・ミレニアムを新企業体連合に置き換えただけのことではないのだろうか。サラスヴァティー社は歴史を半世紀戻してやりなおそうと考えているようだが、それは結果的に数年前の状態に社会情勢を戻すだけのことだ。そして、再びバージュ社・新企業体連合・レイヴンズ＝ネストというトライアングルが確立される。すべては、元通りというわけだ。

「なるほど、本当によくできた田舎芝居だ」

額に手をやって、リャノンは笑い転げた。

「何を笑っているのよ」

気味悪そうに、ファータが訊ねた。

「いや、すまなかった。ちょっとした思い出し笑いだ」

自制心を取り戻して、リャノンは言った。

「変なの」

わけがわからないと、ファータが少しむくれる。

いや、サラスヴァティー社が、本当に無害な理想主義者であるのならば、まだ活路はあるかもしれない。本当にそうならばの話だが……。

「よし、その依頼を受けよう。手続きをしてくれ」

「はいはい、わかりました」

リャノンに言われて、ファータはてきぱきと登録を済ませた。

2

グローバル・ドームは、地下都市フォートガーデンの東方九キロの平原に位置するイベントホールだった。大規模な会議や、兵器産業の新製品展示会のような閉鎖的イベントに使用されている。地上部分は、直径三〇〇メートルの開閉式ドームとなっており、ヘリコプターや垂直離着陸機（VTOL）の発着場や催し物場として使われていた。実際の施設は地下にあり、大会議場の他に大小の展示場が数多くある。AC関連の新製品発表会なども、ここで行われるのが定例だった。

リャノンたちのレッド・ブランチが到着した頃には、同じミッションに契約した他のレイヴンたちもすでに集まっていた。

おなじみのヴィジランティのそばには、ACが二台ならんでいる。

緑色をベースにオレンジのマーキングをしたホバー戦車型ACは、ランカーレイヴン・ヴォルフの乗るフェンリルだ。左腕のオレンジ色のウルフヘッドのエンブレムが、そうであることを示している。両腕は連装機関砲（AM/MG25/2）そのもの、肩には六連装ミサイルランチャー（WXS800GF）という重装備だ。レーダー強化型の頭部（HD06RADER）と、丸みを帯びた重量級のコア（XCH01）が相まって、カヒラ

イスやヴィジランティとはまったく違ったシルエットを見せている。

その横にあるACは、ACのバリエーションを誇示するかのように、さらに違うシルエットを見せていた。四足型のそのACは、両腕がミサイルランチャー（AWS60/2）となっており、右肩にエネルギー弾型のスラッグガン、左肩に実体弾型のスラッグガンという一風変わった構成をしている。緑の迷彩（アウター・プッシュ）に塗装されたその機体は、左腕のピンクキャットのエンブレムがひときわ目立っていた。プリティキトゥンと名づけられたこのACは、ランカーレイヴン・リンクスミンクスの乗機だ。

「さすがに、きている人たちが違うわね」

目の前にならんだ三機のランカーACの壮観な姿を見上げながら、ファータがつぶやいた。

レイヴンズ＝ネストの斡旋する依頼は、各レイヴンのランクによって歴然と異なっている。より難易度の高いミッションは、それなりの実績のある者にしか紹介されないのだ。それによって、レイヴンズ＝ネストの紹介したレイヴンのミッション達成率は常に高く維持されているという仕組みだった。それは、レイヴンズ＝ネストとランカーレイヴンの両方の信頼度を、顧客に対して高める結果となっている。また、高度なミッションほど依頼自体の機密性も高いので、へたなレイヴンにはそのミッションの存在自体を知られないというメリットもあった。

現在ここにいるレイヴンたちは、新しくレイヴンズ＝ネストが定めなおしたランクの上位

に位置する者たちであった。

「よう、ファータちゃんお久しぶり」

リグから降りてきたファータを目ざとく見つけて、ファルコンが気安く声をかけた。そのそばでは、壁にもたれかかった年輩の男が静かに煙草をくゆらせている。

小走りに駆けよってきたファルコンを見て、ファータは慌ててリャノンの後ろに隠れた。そのままだと、いきなりだきしめられかねない勢いだったからだ。読まれたかと、ファルコンが軽く指を打ち鳴らして悔しがった。

「やれやれ、まったく騒がしいねえ、ファルコンの奴は」

ブリティキトゥンの陰から現れた長身の女レイヴンが、少し疎ましそうに言った。赤毛に何色ものカラフルなメッシュを入れた豪奢な髪をゆらしながら、大股で一同の方に歩いてくる。この美丈夫が、リンクスミンクスだ。

「ふっ、相変わらずだ。昔とちっとも変わっていない」

壁にもたれかかっていたヴォルフが苦笑した。

「さてと……」

煙草を下に落として踏み消すと、ヴォルフが動いた。

「これで全員揃ったらしいな」

一同を見回しながら、ヴォルフが言った。ランカーとしては彼が最上位にあたる。ごく自

然に、この場のリーダーシップをとるつもりのようだ。

「今回のミッションは、俺たち四人に任されたと言うことだ。……が、一人だけ戦場に女連れという悠長な奴がいるようだが……」

ヴォルフの視線が、ファータにそそがれる。

「彼女は、奴専属のオペレータだ。俺たちの戦力だよ」

リャノンに代わって、ファルコンが言い返した。くいと親指でリャノンを指差し、俺が保証するという態度をとる。

「ならいいんじゃないのお。それとも何かい、女だからだめだとでも言う気かい、ヴォルフの旦那」

リンクスミンクスが、気まぐれに同性の肩を持って言った。女だからとなめるような奴には、一つ痛い目をみてもらおうかと目をぎらつかせる。

「いいや。そんなことはない」

女レイヴンに苦笑をむけながら、ヴォルフが答えた。

「専属とは豪勢なことだが、味方であるならば大切な戦力だ。非礼は詫びよう。すまなかった」

ごく自然に頭を下げる。引くべきところは知っている男だ。

「それじゃ、みんなの配置を決めるが、いいな」

「ああ、もちろんだ。ばらばらに行動しても意味がない。敵につけ込まれるだけだ」

リャノンは、代表してヴォルフに答えた。不毛なリーダー争いなどするつもりは、リャノンたちにはない。そのためのランクでもあるわけだ。それに、どのみち敵がくれば観客に回る暇などないはずだった。

「ちょうどACは四体。敵がどこからくるかわからない以上、四方位に配置するのがセオリーだ。ところで、あの赤いコンバット・リグ、嬢ちゃんが操作できるのか？」

「ファータよ」

あからさまに子供扱いされて、ファータが口をへの字に曲げた。

「ならファータ、できるのか」

あらためて名指しでヴォルフに問われて、ファータがもちろんだとうなずいた。

戦力が一つ増えたと、ヴォルフがほくそ笑む。

「よし。では、コンバット・リグはドームのゲート前面で待機。各ACのレーダーシステムとリンクした上で、索敵および攻撃指示を担当。もしも防衛線を突破してくる敵があれば、味方ACに連絡の上、独自判断で迎撃すること。特に、航空戦力には注意しろ」

ファータに役割を振った後、地形と各人の索敵能力と攻撃力を考えて配置を決める。集団戦の場数を多く踏んでいるのか、ヴォルフの指示は実にスムーズだった。

「通信回線は、常時オープン。チャンネルはS2を使用し、デジタルデータ圧縮はタイプLN、暗号化（スクランブル）はタイプIHを利用する」

「それで、それからどうするんだ」

これで打ち合わせは終わりかと、ファルコンが訊ねた。

「後か？」

聞かれて、ヴォルフは新しい煙草を取り出しつつ答えた。

「後は、敵さんを待つだけさ」

そう言ってニヤリと笑うと、ヴォルフは煙草に火をつけた。

3

『しかし、敵の出方待ちってのは、面白くねえもんだなあ』

ドームの裏手にヴィジランティを固定したファルコンが、コックピットの中で愚痴をこぼした。緊張感を維持したまま、じっとしているということは考える以上に忍耐を必要とする。特にファルコンのようなタイプの人間には、ちょっとした拷問（ごうもん）のようなものなのだろう。

今頃は、会議もたけなわのはずであった。

いったい、どんな取り決めが地下の穴の中で行われているのか。それは直接彼らの生活に影響を与えるとともに、彼らにとってはどうでもいいことでもあった。何かが決まる、それ

によって世界は適当な方向に動き出す。それだけのことだ。

『もしかすると、みなさんに恐れをなして敵はこないかもしれませんよ』

オープンになっている回線を通じて、ファータがファルコンをなぐさめた。

『そうだと、楽は楽でいいんだけどもねえ。まあ、張り合いがないのは困りもんだけどさぁ』

リンクスミンクスが、間延びした声で二人のやりとりに割って入った。

『そうもいかないようだ。ファータだったな、捉えているか？』

彼女の言葉を否定すると、ヴォルフがファータをうながした。

『確認しました。クローゼットが三機。ドーム正面、NE方向から超低空で侵入してきます』

レーダーとモニタ映像とで敵の正体を確認すると、ファータは大声でレイヴンたちに伝えた。

クローゼットと呼ばれる特殊なAC輸送機が、地面すれすれを接近してきていた。ドームに設置されている対空レーダーには引っかからないが、ここまで接近すればACやリグのレーダーには丸見えだ。

機体左右に可変型回転翼（ティルトローターファン）を持ったクローゼットは、無人輸送機であり、胴体部分に一列にならんだACフックハンガー以外はコックピットのようなものは存在しない。強襲輸送機として、強引に敵地にMTやACを送り込むものだ。敵は、奇襲を予定していたか、強引な力押しでドームを制圧するつもりらしい。

『敵AC降下。ハンター三機、ハリアー一五機の三小隊です』

クローゼットのACフックが外れ、つり下げられていたACたちが次々と降下してきた。指揮官機であるハンターと、量産機であるハリアーは、ともに無人ACだ。かつてのクローム社で実用化された、高性能AIを積んだロボットACである。コックピットのないスリムなコアを有し、大型のロケットブースターを両肩に装備することによって、立体的な高機動戦闘を実現している。ハリアーの主武装は、両腕そのものと化した内装パルスレーザーライフル。ハンターは、両腕が内装プラズマライフルとなっており、右肩にセンサー、左肩にミサイルポッド（WM-MVG802）を装備している。シルエット的には、両ACとも、肩の張ったスリムな手長猿といったところだ。

『カオス（CHAOS）かい、なら遠慮はいらないね』

クローム時代の開発コードを口にしながら、リンクスミンクスが軽く唇を舌でなめた。レイヴン相手に実戦データを収集していたこれらの無人ACは、ランカーの間では結構有名な存在であった。

プリティキトゥンの脚部ロケット推進器が咆哮し、ホバーで浮き上がった機体を力強く前方に押し出した。四足型のACが誇る高速性をいかんなく発揮して、リンクスミンクスが敵に突進していく。

ハリアーの群れにむかってミサイルを連続して叩き込みながら、プリティキトゥンはなめ

らかな動きで敵部隊の側面に回り込んだ。大きな弧を描くようにして、素早く移動していく。常に敵をロックオンサイトに捉えながら、側面を通り過ぎる刹那にスラッグガンを近距離から叩き込む。全身にエネルギー散弾の直撃を受けたハリアーが、ぼろぼろになって吹き飛んだ。そして、次の瞬間には、プリティキトゥンは近距離から中距離へと即座に移動している。

『はははははは。そらそら、動きが止まって見えるよ!』

スピードで翻弄しながら、リンクスミンクスが豪快に敵を笑い飛ばした。闘争本能を隠そうともせず、生き生きと戦闘を楽しんでいる。

高機動攻撃をしかけるプリティキトゥンに対して、ハンターが状況分析の上、配下のハリアーに三次元的散開攻撃を指示した。集中攻撃をされにくいように敵予想進路にむかって散らばりながら、一部がジャンプして上からの狙撃を試みようとする。

だが、ジャンプしたハリアーに対して、狙いすましたかのようにマシンガンの銃弾が襲いかかった。直撃を受けたハリアーが、ロケット推進器を誘爆させて火球と化す。周囲のハリアーも、その爆風を受けてバランスを崩しながら落下した。

『教科書通りの動きだな。授業料だ、受け取れ』

敵を撃ち落として大地に釘づけにしたヴォルフが、ミサイルランチャーの照準を敵の集団に定めてトリガーを引く。フェンリルから放たれたミサイル群が、四方から雨あられと敵に降り注いだ。たちまち、数機のハリアーが鉄屑と化す。

僚機の損失を計算し、態勢を立て直そうとめまぐるしくフォーメーション変更を命じるハンターに、ハリアーたちが混乱を起こしている。人間の指揮官ならば、各個人の独自の判断で乱戦に対応させつつ流動的に態勢を立て直させるところだが、なまじ小隊の規模を揃えてしまったために、無意味な団体行動を指示してしまうところが機械の悲しさであった。状況の変化に、一々対応しすぎるのだ。

『敵の指揮系統は無能だ。ハンターは残しておいて、好きに慌てさせておけ』

即座に、敵の作戦の不備を見抜いたヴォルフが、リンクスミンクスに指示を飛ばした。

『見分けがついたらね。はん、勢いあまってついでに壊しちまったらごめんよ』

お構いなしだと言いながら、リンクスミンクスは敵にスラッグガンを叩き込んだ。

接近したプリティキトゥンに標的を定めた無人ＡＣたちが、背後からフェンリルのマシンガンによって薙ぎ払われていく。逆にフェンリルに銃口をむけると、プリティキトゥンのミサイルが襲いかかってくる。反撃のビームは、フェンリルのコアの重装甲を貫くことができず、俊敏なプリティキトゥンを捉えることもできなかった。

完全に前後を押さえた二機のＡＣは、周回移動で敵を翻弄しながら一機ずつ確実に撃破していく。そのめまぐるしい動きに、敵はフォーメーションを組むこともできず、得意の立体攻撃も封じられて右往左往するだけであった。

これが、並みのＡＣが応戦したのであれば立場は完全に逆になっていたことだろう。あっ

という間にハンターたちに取り囲まれて、ビームで蜂の巣にされていたはずだ。だが、上位のランカー二人が相手では、しょせん操り人形は操り人形でしかない。フォーメーションを組む暇など与えてくれるはずもなかった。格が違いすぎるのだ。

『始まったな。俺たちもいこうぜ』

銃声に血が騒いだのか、いてもたってもいられないとばかりにファルコンがリャノンをあおった。

『待て。俺たちは、ここを動かない方がいい』

落ち着き払った声で、リャノンはファルコンを制した。

『どういうことだ。このままじゃ、おいしいところはみんな奴らに持ってかれちまうぜ』

『いいや、奴らは本命じゃない』

いいところを二人に持っていかれてしまうと焦るファルコンに、リャノンはそう言って聞かせた。

『馬鹿な、三個小隊規模のACが攻めてきてるんだぜ』

『だから、誰もが本命と思わされる。ファータ、小型偵察機（クレアボイアンス）はどうだ』

それはないだろうと反論するファルコンをさとすと、リャノンはファータを呼び出した。

『今のところは……。いえ、SW方向に飛行物体群発見。確認します。少し待ってください。——出ました。スーパーシミター三機、パペガイ一〇機、ファイアフライ二〇機です』

ファータが、分析結果を報告する。スーパーシミターは、航空機に二足歩行の脚部をつけたようなMTだ。チェーンガンとプラズマキャノンを装備している。パペガイは純粋なコンバット・リグであり、ずんぐりとした卵のような機体にレーザーキャノンとロケットランチャーを装備している。どちらも、高機動高火力が売り物だ。ファイアフライは花弁型の浮遊砲塔で、おそらくはこちらの足止めに使うつもりなのだろう。数を頼りにこられたら、ファイアフライの機銃も、そうそう馬鹿にすることはできない。

『きたぞ、本命だ』

リャノンがカヒライスを発進させた。

『どうしてわかったんだ』

すぐに後を追ってきたファルコンが、不思議そうに訊ねる。

『簡単だ。敵の狙いが設備ではなく会議に参加する人間である以上、個人識別のできない無人機にすべてを任せるはずがないからな。それよりも、俺たちで本命を殲滅（せんめつ）するぞ。いいな』

『おうよ、任せとけ』

合流したところで、二人はACに射撃体勢をとらせた。距離があるうちになるべく数を減らしておくつもりだった。

リャノンが、敵集団にむかってショルダーキャノンを叩き込む。爆炎が広がり、巻き込まれたファイアフライが誘爆を起こした。ファルコンも、スラッグガンの散弾の特性を生かし

て、ばたばたとファイアフライを撃ち落としている。

敵の対応も早く、即座に散開して攻撃を避け始めた。正面からはファイアフライ、左右からはパペガイ、上空からはスーパーシミターというフォーメーションだ。

飛び回る残りのファイアフライを先行させたヴィジランティに任せると、リャノンはドームへむかおうとするパペガイを狙撃することに集中した。

ジェットホバー特有の排気音を響かせながら、地面すれすれの低空をパペガイが疾走してくる。五機ずつの二グループに左右に分かれる。リャノンは、まず右側の一群に狙いを定めた。敵は、三機が強行突破のコースをとり、残り二機がそれをサポートする形にフォーメーションを変える。おそらく、ファルコンの方にも、同様に突撃隊を掩護する二機のパペガイがむかったことだろう。恐ろしく統制のとれた敵部隊だ。

レーザービームが放たれ、パペガイの装甲表面で閃光が巻き起こった。その輝きも消えやらぬ間に、一点集中で追加攻撃を与える。二発のレーザーの直撃を受けて、パペガイが爆発した。攻撃に回ったパペガイのロケット弾を回避しながら、同様にして強行突破をしようとするもう一機を仕留める。

だが、回避に使った時間だけ敵に接近する余裕を与えてしまった。すれ違う敵にあわせて回頭しながら、レーザーライフルを連射する。側面を射抜かれ、横転したパペガイが炎を噴きながら大地の上を転がり、爆発四散した。これで、右の敵の突破は防いだわけだ。

ほっとする間もなく、回り込んだ次の敵がレーザーを撃ってくる。一発被弾しながらも、ジャンプで後続の攻撃を避け、接近戦へと持ち込んだ。着地と同時にレーザーブレードを一閃させる。パペガイの後部タンクが一刀両断され、引火した燃料が敵を炎でつつみ込んだ。

巻き添えを避けて後退したカヒライスにむかって、残る一機が攻撃をしかけてくる。その俊敏な動きに手こずりながらも、リャノンは一瞬にして詰めた間合いから、○距離でレーザーを機首センサー部から内部に叩き込んで敵を仕留めた。

ヴィジランティの方も、苦戦しているようだった。先行させてファイアフライを押しつけたのだから無理もないが。だが、今は自力で割り当て分を撃破してもらうしかない。

リャノンはカヒライスを回頭させると、ショルダーキャノンの発射体勢をとった。左側から防衛線を突破していった三機のパペガイにむかって、後方からエネルギー弾を放つ。爆炎が一機のパペガイを消滅させた。さらに、射程ぎりぎりでもう一機を破壊する。後一機……。

その瞬間、上空から強力なビームがカヒライスを襲った。たまらず、リャノンは回避運動をとる。その後を追うようにして、大地が次々に蒸発していった。ひとまずは、ブースターダッシュで逃げるのが精一杯だ。被弾して止まったところにプラズマキャノンの集中砲火でも浴びれば、カヒライスとてあっという間に破壊されてしまうだろう。

一撃離脱（ヒット・アンド・アウェイ）戦法をとったスーパーシミターの編隊が上空を通り過ぎていく。敵の目的は、あくまでもドームだ。途中の戦闘は最小限で済ませるつもりらしい。

『まずい。ファータ！』
　突破されたことを大声で告げながら、リャノンは敵の後を追いかけた。一度に三機のスーパーシミターが相手では、戦闘には素人のファータが操るレッド・ブランチだけでは勝ち目がない。
　ブースターの最大加速を叩き出しながら、リャノンはレーザーライフルでスーパーシミターを狙撃した。何とか一機を撃墜するものの、残り二機のスーパーシミターと一機のパペガイがドームへと肉薄する。
『かまわない、逃げろ!!』
　リャノンは叫んだ。ミッションの失敗よりも、彼女の命の方が大切だった。
　ドーム越しに垂直ミサイルの火線があがり、接近したスーパーシミターに襲いかかる。レッド・ブランチが迎撃を始めたのだ。さらに、それとは違うミサイルが地上から敵めがけて発射された。上下から複数のミサイルに挟撃され、二機のスーパーシミターが白煙を引きながら空中で飛散した。
『リャノンは、ファルコンの掩護に回ってください』
　ファータからの通信が入る。
『そういうことだよ。こいつらは、あたいに任しな』
　残るパペガイのロケット弾を軽快に避けながら、リンクスミンクスが答えた。ファータの

指示で、残るハンターをヴォルフに任せてドームに戻ってきたのだ。高速を誇るプリティキトゥンだからこそ可能な移動であり、的確な指示だったと言えるだろう。
『さっさと済まして戻ってこないと、割り当てはないからな』
　ヴォルフがリンクスミンクスに告げる。彼の方は、最後に残った三機のハンターを余裕をもって各個撃破にかかっていた。
『了解した』
　リャノンは、仲間たちの言葉を信じて反転した。
　ヴィジランティはといえば、何とかファイアフライを全滅させたものの、一機のパペガイに周囲をぐるぐると旋回されて苦境に立たされていた。内側をむいたレーザー砲が、前後左右からヴィジランティに襲いかかる。
『跳べ！』
　リャノンは、ファルコンにむかって叫んだ。そして、一呼吸後にショルダーキャノンからエネルギー弾を放つ。ブースターの続く限りジャンプしたヴィジランティの真下で、爆炎が広がった。追撃しようとしたパペガイが爆風にあおられて、バランスを崩しながら宙を泳ぐ。
　そのうちの一機の真上から、まるで蹴落とすかのようにヴィジランティが降下してくる。
　ACの全重量をかけて、ファルコンはパペガイを地面に叩きつけた。
　ただ一機空中に取り残される形になったパペガイに、リャノンは寸分の狂いなくエネルギ

ー弾を撃ち込んだ。広がる火球の中に、敵が消えていく。その照り返しを受けたヴィジランティが、めり込んだ大地から必死に機体の立て直しをしようとしているパペガイにパルスレーザーを立て続けに浴びせかけた。被弾の衝撃で、転がるようにして側面から底面を撃ち抜かれたパペガイが沈黙する。

『ふう、ヤバかったぜ』

ファルコンが、ほっと息をついた。

『敵勢力、全滅しました。今のところ、第三波の攻撃は認められません。各自、いったん戻って弾薬を補給してください』

ファータからの指示が入る。彼女も無事のようだ。

『了解』

各ACはその指示に従った。

「ずいぶんとやられたじゃないか。もっと早く助けにいった方がよかったかい」

すでにプリティキトゥンから降りて、補給の指示をサラスヴァティー社から派遣されたサポートに指示していたリンクスミンクスが、地上からヴィジランティを見上げながら叫んだ。

「いらねえよ。ちょっと手こずっただけでえ。なにせ、こっちは人形じゃなく、人間相手にどんぱちやったんだからなあ」

左胸部装甲ごと前方にせり出したコックピットブロックから立ち上がったファルコンが言い返した。標準型（XCA00）の胴体コアは中央部に大型の機関砲を持っているため、コックピットは左胸に収納されている。乗り降りは、コックピットブロックごとスライドさせる方式だ。

ファルコンの言葉に、リンクスミンクスのそばでリャノンを待っていたファータが、はっとしたように自分の両手を見つめた。唐突に、さっき自分が撃ち落としたスーパーシミターには人間が乗っていたのだということを認識させられたのだ。

「……ファータ。どうした、ファータ」

リャノンに声をかけられて、少女は我に返った。

「どうした。ぼうっとして。まさか。さっき怪我でもしたんじゃないだろうな」

「ううん、大丈夫。何でもない」

珍しくリャノンに心配されて、ファータはにっこりと笑ってみせた。

「ならいいが。交換用の透過フィルターはどこにある」

ひとまず安心すると、リャノンはレーザーライフル用の消耗部品の在処（ありか）を訊ねた。

「うん、今案内する。こっちよ」

小走りに駆け出すファータの後を、リャノンはゆっくりと追いかけていった。

レイヴンズ＝ネストの物らしい輸送機が運んできた物資の場所に移動すると、二人は目的の物を捜し始めた。

「何かお探しですかな」

「ええ、レーザーライフルの保守部品を……」

ふいに声をかけられて、ファータが答えながら振り返った。

「でしたら、そこのコンテナですね」

ジャケットの肩にレイヴンズ＝ネストの記章をつけたその男は、丁寧な口調ですぐそばのボックスを指差した。身なりからすると、作業員ではなく、この場の監督官か何かだろう。にしても、何か場違いのような風貌の男だった。白金(プラチナブロンド)色の髪は長いストレートヘアーで、色白の端整な顔立ちと相まって、まるで人形のようだ。

「それにしても、ずいぶんとお若い。ちょっと見では、レイヴンに見えませんね」

「いえ、私はレイヴンではありませんから」

「レイヴンではない？」

ファータの返事に、男が怪訝(けげん)そうに聞き返した。

「俺のパートナーだが、何か不都合でもあるのか」

助け船を出すように、リャノンは二人の間に入った。この忙しいときに、余分なトラブルは困る。

「いえいえ、少し場違いな方だと勘違いいたしまして。よろしければ、お名前を教えてはいただけませんでしょうか」

「ファータ＝アマイと言います」

リャノンが止める間もなく、反射的にファータは本名を名乗っていた。

「ファータさんですか。ほう……。いや、覚えておきましょう。ランカーレイヴン、シードル氏のパートナーとして。私は、ラルフ＝レイエスと申します」

何やら聞き覚えがあるような素振りを一瞬のぞかせて、男はあらためて自己を紹介した。

「ところで、あのコンバット・リグもあなたたちの物ですか」

ええと、ファータがうなずいた。

「でしたら、ミサイルの補充も必要ですね。作業の者に手配しておきましょう」

「ありがとうございます」

ファータがぺこりと頭を下げる間に、ラルフは素早く作業の者に指示を与えた。弾薬を積んだフォークリフトが、数人の作業員とともにすぐさまレッド・ブランチにむかった。

「では、こちらで、補給品の精算を済ませていただけますでしょうか。すぐに済みますので」

部下を見送ると、ラルフは必要な手続きだと言わんばかりにリャノンとファータを手招きした。

「あまり悠長なことはしていたくないんだがな」

微かな胡散(うさん)臭さを感じて、リャノンはすぐにはそれに応じなかった。

「なあに、敵も戦力の逐次投入をするほど馬鹿ではないでしょう。もう一度しかけてくるとすれば、会議の終了時などですね。私ならそうします。もっとも、それだけの戦力が残って

いればの話ですが」
　肩越しに振り返りながら、さも当然のようにラルフが言った。いかにも、敵の手の内はすべてわかっているとでも言いたげな口ぶりだ。
「少なくとも、支払いと、一杯の飲み物を飲み干すぐらいの時間は与えてくれるでしょう。さあ、どうぞこちらへ」
　レイヴンズ＝ネストの男は、そう言って再び二人を手招いた。

4

　結局、敵の攻撃は第二波以降はなく、会議自体は無事に終了した。
　新企業体連合の誕生だ。
　仕事を終えたレイヴンたちは、やってきたのと同様の方法で帰途についた。依頼された共通のミッションが終わってしまえば、即席のチームはいつも解散ということになる。しょせん、レイヴンたちは個人であり、それ以上の存在になろうとはしない。
「これで、混乱の少ない、もっと平和な世界が始まるのかしら」
　レッド・ブランチのコパイロットシートに座ったファータは、誰にともなくつぶやいた。
　新企業連合の目指すところのものが実現すれば、企業間の武力衝突も起こらなくなるはずだ。

「さあな。安定を望まない者も少なくはない。争いはなくならないだろう」
　リグを運転しながらリャノンが答えた。戦いに寄生して生きている者は、この世界に数え切れないほどいる。彼を含めたレイヴンこそ、その最たる者だとも言えた。そんな者たちが、黙っているとは考えられなかった。
「おそらくは、連合の活動を妨害する依頼が増えるだろう」
「じゃあ、また今日みたいな戦闘が起こるの？」
「そういうことだ。もっともらしい大義名分をつけて、馬鹿らしいパワーバランスを保つために。これからは、レイヴン同士、敵味方に分かれて戦うことも増えるだろう」
「そんなの、嫌だわ」
　うつむきながらファータはつぶやいた。
　アリーナでの戦いは、限りなく実戦に近いと言っても、しょせんはゲームだった。意図的に事故という名の殺人が行われない限り、人を殺めることはない。それに、ファータはオペレータであって、純粋なパイロットではないのだ。今までこなしてきたミッションにしたところで、実際に戦ってきたのはリャノンであって、彼女は破壊と殺戮を済ませてきた彼をねぎらえばよかった。
　感覚の麻痺。
　ファータは、ぶるんと身震いした。日常だと思っていたことの真の姿が、大きな矛盾と負

い目として彼女を苦しめた。もし、今日一緒に戦ったレイヴンたちが敵として現れたら、彼女はどういう判断を下せばいいのだろうか。

　アヴァロン・バレーの住宅街に着いたところで、ふいにリャノンがリグを止めた。

「降りるか?」

　唐突ともとれる言葉を、リャノンがファータに投げかけた。

「どうしたの、まだいつもの場所じゃないわよ」

　恐ろしいほどの不安を肌で感じて、ファータはリャノンに訊ねた。いつもならば、ねぐらにしている建設途中で放棄されたビルにレッド・ブランチをおくはずだ。こんなところで止まるのはおかしいし、それにリャノンの顔は今まで見たこともない厳しさに満ちていた。

「もう、十分に報酬分は働いてもらった。契約は、終わりだ」

「私に、出ていけと言うの……」

　こくりと、リャノンがうなずいた。

「私は、ここにいてはいけないと言うの。リャノンに、私は必要ないの」

　突然のことに、ファータは狼狽(ろうばい)してしまった。今日の戦闘でのできごとよりも、今のリャノンの言葉の方がショックだった。終わりは、唐突にきていいものではない。少なくとも、終わりは自分で決めるものだ。そして、別れも……。

「俺は好きにしろと言ったはずだ。俺につきまとおうが、俺から離れようが好きにしろと。

決して、お前の保護者になったわけじゃない」

「なら、何で今頃出ていけなんて言うのよ」

　ファータは食い下がった。

　今日、世界の情勢は変わった。だからといって、なぜリャノンまで心変わりしなければならないのだ。理不尽だと、ファータは心の中で叫び続けた。

「それは、お前自身が一番よくわかっているだろう。お前は、レイヴンにはむいていない」

「私は、レイヴンになるなんて言った覚えはないわ」

　痛いところをつかれて、思わずファータは少し口ごもった。リャノンは、彼女の心を見すかしていたのだ。

「一緒の行動をしていれば、同じことだ」

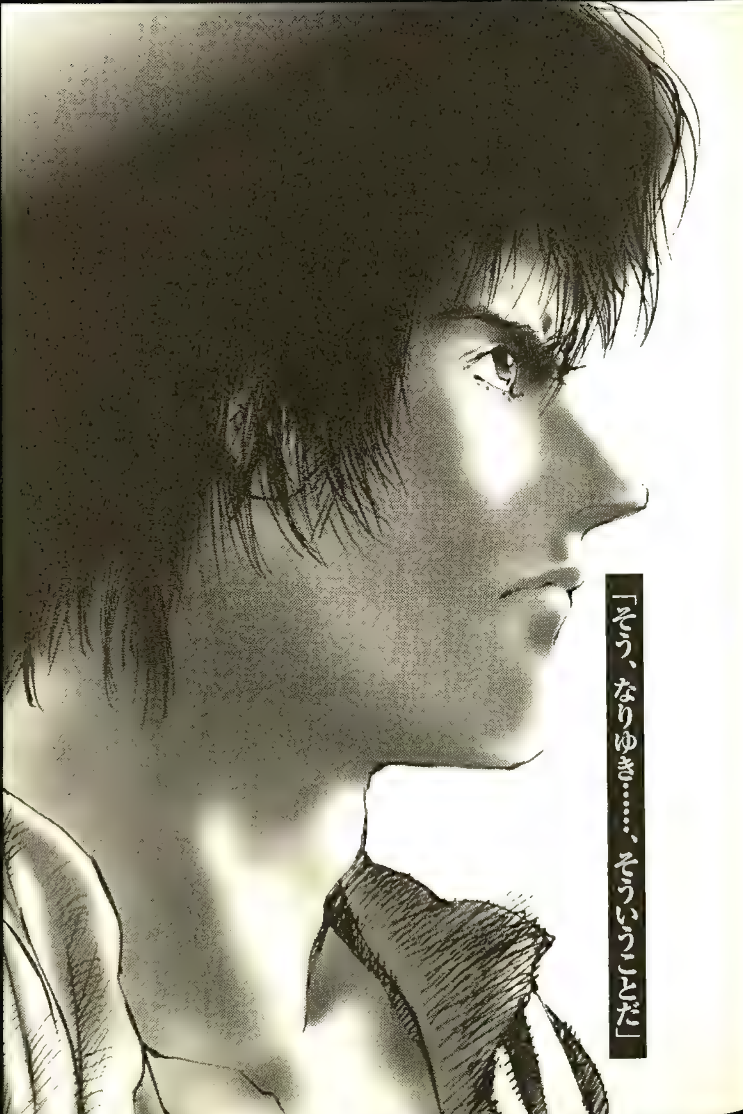
　リャノンは冷たかった。無理にでもファータを突き放そうとしている。まるで、それが唯一残された道であるかのように。

「でも、あなたは私を守ってくれたじゃない」

　だから、気になったのだ。なぜという言葉は、リャノンに出会ってからずっとファータの喉の奥に引っかかり続けていた。なぜ、自分を助けてくれたのだ。

「なりゆきだ」

「なりゆきで、二度もバグから助けてくれたと言うの!」



あくまでも素っ気ないリャノンの言葉に、ファータは大声で怒鳴り返していた。

リャノンのパートナーになって以来、ファータはずっと彼のことを調べ続けていた。そして、ある一時期だけ四足の機体に乗っていたことも、カヒライスからとった過去の戦闘データのバックアップから突き止めている。紛れもなく、かつてガル・シティでファータをバグから救ってくれたACはリャノンの物だったのだ。

「そう、なりゆき……、そういうことだ」

悪びれることもなく、リャノンは繰り返した。どちらかといえば、彼女よりも自分を納得させるかのように。

どのみち、ファータが過去の記録にアクセスしていたことは、アクセス履歴から明白だった。隠してきたことも、すべて知られてしまったと見ていいだろう。いや、別にリャノンは隠してきたわけではないはずだった。ただ、言わなかっただけだ。だが、本当にそうだったのだろうか。言わなかったのではなく、言えなかったのではないだろうか。だとすれば、彼はいったい何を恐れたというのだろう。

「嘘！」

ファータは、リャノンの言葉のほとんどを信じなかった。いや、信じたくはなかった。

「今の時代、たとえ守ってくれているように見えても、本当に守ってくれているわけではないことも多いということだ。個人の勝手な思い込み、幻想でしかない。企業体連合にしろ、

レイヴンズ＝ネストにしろ、すべて偽りの幻想にしか過ぎない」
つぶやくようにリャノンは言った。そう、すべてが幻想であるならば、すべてはいつか消えるのが運命（さだめ）なのかもしれない。
「確かに、偽りのない時代なんてないのかもしれないわ。でも、だからって、全部が全部嘘だってことはないでしょう」
「本当にそう思っているのか。たとえば、リャノン＝シードルという名前も、幻想にすぎない。俺が勝手につけた名だ。真実の名前に意味がないのと同様に、この名にも意味するものはない。お前が知る俺の姿も、本当の俺じゃないということだ」
「それでも、あなたは私が知っているリャノン＝シードルだわ」
ファータは言い切った。リャノンは、確かに目の前にいるのだ。過去の彼が何であれ、今ここにいるリャノンは、ファータの知るリャノン以外の何者でもない。それで、それでいいのではないだろうか。なぜ、それでいけないと言うのだろう。
「お前は何も知らないだけだ」
「なら、私は出ていかない。本当のあなたを見せてくれるまでどこにもいかない」
言い切ると、ファータはリグの奥の私室に、逃げるようにして駆け込んでいった。
「俺には、守るべきものなどはなかった。なのに、いまさらそれを作れと言うのか……。かつて秩序を破壊した男を、かつてレイヴンだった男を、お前は許せると言うのか……」

ファータが聞いていないことを承知で、リャノンはつぶやいた。
かつてガル・シティで少女を助けたからといって、それが贖罪となりえるのだろうか。ケミカルダインを襲い、実験中のバグを施設内に放したのは、レイヴンとして他人に利用されていた頃の彼だ。仮に彼が直接手を下したのでなくとも、ファータの父親の死にリャノンは責任を感じていた。
自らの過去に関わるファータという少女に手をさしのべた瞬間から、リャノンは己の過去を再びつかんでしまったのかもしれない。それを投げ捨てる勇気もない自分が、リャノンはたまらなく悔しかった。
かつて世界のすべてを敵に回し、偽りの秩序を保っていた二大企業とレイヴンズ＝ネストを破滅へと導いた男。だが、すべてを振り捨ててきたつもりでも、過去の亡霊は再び彼に追いつきしがみついてくる。名前を捨て過去を捨てたとしても、結局は何一つ変わらないと言うのだろうか。
リャノンは、そんな自分にファータを巻き込みたくはなかった。だが、時はすでに彼の思惑をはるかに超えて進み始めていた……。

MISSION 4 『衛星落下阻止』

1

そして、悪夢は、一通のメイルから始まった。

リャノン個人宛のメイルのタイトルには『衛星落下阻止』と記され、発信者はバージュ社となっていた。

「仕事を依頼したい。それも早急にだ。廃棄されている宇宙ステーションの《カエデ》において、不穏な動きがある。新企業連合から打ち上げられたシャトルが頻繁(かんぱん)に物資を運んでいるようなのだ。極秘情報によると、《カエデ》を落下させてアヴァロン・バレーを壊滅させるつもりらしい。目的は、移転を予定しているバージュ社の新本社ビル破壊であろう。それを阻止してもらいたい。このメイルはレイヴン諸氏の中でも特に有能なランカーのみに送信している。時間がない。衛星軌道間大質量物輸送艇(MLLV)の発射時刻は明朝〇五〇〇。それまでにアイザック・シティ第二宇宙港に集合してほしい。報酬は一人六〇〇〇〇C(コーム)を用意する」

宣言通り居座り続けているファータが、いつもと変わらぬ調子を装ってメイルを読み上げた。

二人の間は、しばらくは多少ぎごちなかったものの、喉元を過ぎてしまえば日常は日常の

ままに戻っていた。少なくとも、表面的にはそうだった。

「名指しの依頼か……」

つぶやいたきり、リャノンは黙り込んだ。

レイヴンズ＝ネストが機能している現在、直接の依頼というものはかなり珍しい。すなわち、それだけで、このミッションがかなりヤバいものだということを物語っている。それに、リャノンは、昔同じような個別の依頼で罠にかけられた経験があった。この手の依頼には、警戒して当然だ。

「ねえ、もし問題がないのなら、引き受けましょうよ。だって、ステーションが落ちてきたら、この街がなくなっちゃうのよ」

「問題は大ありだ。依頼自体がいかにも胡散臭い。本当に衛星を落とす計画があるのかも疑わしいものだ」

ファータの言葉に、リャノンは否定的に答えた。

文面通りに受け止めるならば、リャノン以外のレイヴンにもこのメイルがいっているはずだ。絶対に彼が参加しなければならない理由などない。

「なら、調べてみる。本当だったら大変だもの」

ファータが端末を操って、宇宙港の裏情報のチェックを始めた。

結果、いくつかの情報屋から、確かにバージュ社が翌朝のＨＬＬＶの発射予約をしている

ことがわかった。表むきは、通信衛星の回収修理ということになっているが、時間と規模からみてこのミッション用のものであることは間違いないだろう。

「嘘じゃないみたい。ちゃんとＨＬＬＶは用意されてるわ」

「だからといって、俺がいかなくてはならない理由にはならない」

リャノンは、頑なだった。今は、リスクをおかさなければいけない時ではない。

「それでも、私たちが何もしなくていいということにはならないじゃない。街を守ろうよ」

シートを回転させてリャノンと正面からむかい合うと、まるで頼むかのようにファータが言った。

「作戦が失敗すると決まったわけじゃない。それに、俺以外にも、腕の立つレイヴンならいくらでもいる。そんなに心配なら、この街を離れればいいことだ」

そう、リャノンには、アヴァロン・バレーにいなければならない理由などこれっぽっちもない。もしも街がなくなってしまうのならば、別の場所に移ればいい。ただそれだけのことだ。代わりの場所などいくらでもあるはずだ。

「私たちのことを心配しているんじゃないわ。ステーションが落ちてきたら、この街の人々はどうなるの。みんな死んじゃうんだよ。ねえ、街を救おうよ」

アリーナやガレージの人々、日々生活用品を買っている店の人々などのことを思って、ファータがリャノンに繰り返し呼びかけた。

「どうしたんだ。やけにこの街にこだわるじゃないか」
ファータの思いが理解できず、リャノンは不思議そうに訊ねた。一つのものに固執するのは、あまりいい傾向ではない。
「だって、私たちはここで暮らしているんだもの。ここには、守りたいものがたくさんあるんだよ」
「そんなものは、また見つければいい」
素っ気なくリャノンは答えた。アヴァロン・バレーにあるものなら、他のシティでも手に入れることはできる。ファータとは違って、リャノンには、この街が二人でともに暮らしてきた街だなどという思い入れは皆無だった。
「どうしてそんなふうに言えるのよ。あなたにとって、私も、また代わりのある存在なの」
リャノンは答えなかった。代わりも何も、そんなことを考えたことなど今までなかったのだ。ファータは、ファータだ。リャノンにとって、彼女は一緒にいるか、それともまったくいないかのどちらかの存在であった。いったい、誰を代替にできると言うのだろう。
「あなたは、本当に昔しか見ていないのね」
ファータがため息をついた。
潮時かもしれない。あるいは節目か。リャノンは唐突にそう感じた。
「過去は、無視できるほどに優しくはない」

言いながら、リャノンは少女に背をむけた。
「そんなことはないわ」
「そうだろうか。俺のようなレイヴンは、決して正義の味方じゃない。時には人々の味方となり、時には人々の敵となる。俺は、憎まれこそすれ、人に感謝されるような存在じゃない」
「だから、もういいと言うのね」
「そうだ。もう憎んでくれてもいいんだ。なぜなら、昔ケミカルダインのバグを……」
「言わなくてもいい！」
ファータが叫んだ。
「……言わなくてもいいの。もう、知ってしまったから。知ってしまったけれど、でも、それで何も変わらなかった。だって、私の目に映るリャノンは、少しも変わらなかったから。だから、私は、自分が見た今のリャノンを信じる」
きっぱりとファータが言い切った。それが、リャノンの過去のデータを知ってから、ずっと彼女が悩み続けてきたことへの解答だった。
「好きにすればいい。だが、俺の過去も変わることはない」
「そんなもの捨てちゃえばいいじゃない！」
ファータが叫んだ。
「何よ、いくじなし。あなたは、何も決めてくれないじゃない。いいわ、私は私の好きにす

る。あなたこそ、好きにすればいいんだわ！」

言うなり、彼女はリグの外に飛び出していった。

しばらく、リャノンは彼女の後を追わなかった。追う理由を見失っていた。

リグの中から、音と時間が消えてしまったようだ。何かがなくなり、凍りついて止まってしまったように感じる。

好きにすればいい。それは、リャノンがファータにずっと言い続けてきたことだ。

自己に関する決定は、自分自身で行う。そして、人は他人のことを決定する権利など、持ち合わせてはいない。それがリャノンの持論だった。だからこそ、リャノンは他人との不干渉を守り続けてきたのだ。唯一の、ファータという例外をのぞいて。

そして、彼は好き勝手を通してきた。そのつもりだった。自由に、人に束縛されない自由を維持するために。そのためには、人を束縛しないことだ。他人に意見することや、他人を束縛することや、他人を利用すること、それらはかつてのレイヴンズ＝ネストや企業の姿を見て、悪しきことと認識してきていた。だから、そのようなことをしない、そのためには、必要以上に他人と関わらない。

それが、一番簡単だったからだ。そうすることが、一番楽なことなのだ。

他人に関わらなければ、余計なトラブルに巻き込まれることもない。そして、自分が傷つく恐れもないのだ。

そう、恐れ……。恐怖は避けるものだと、いつしか無意識のうちに考えていた。

だが、ファータはどうだっただろう。

彼女は、なぜ自分のもとに飛び込んできたのだろうか。安全を求めるのならば、レイヴンと一緒に暮らすなどもってのほかのはずだ。リスクの方が高すぎる。

けれども、彼女はあえてリスクの高い方を選んだ。自分の自由意志で。

好きにすればいい。

そう言って、リャノンは自由を手に入れたつもりだった。

だが、彼の思う自由とは何なのだろう。漠然とした自由というイメージをあらためて考えてみて、リャノンはそれを思い描けない自分に愕然とした。リャノンが今まで思い描いていたと信じ込んでいた自由というものこそ、彼が作り上げた偽りの幻想ではなかったのだろうか。

ファータは、何もごまかさずに現実とともに生きていた。それに対して、リャノンはどうだったと言えるのだろう。何事も決めようとはせず、すべてをごまかしてきていたのではないだろうか。リャノンは世界のすべてを捨てて自由になったつもりでいたが、世界から捨てられて孤独に泣いていたのは彼自身だったのだ。

そのことを自覚するのが恐ろしいがために、リャノンはファータを手放そうともがいていたのではないだろうか。そして、そこから救い出してくれる温かい手を求めて、彼女をそば

におき続けてきたのかもしれない。

「好きになどさせるものか。俺は、彼女の指針とならなければならない存在のはずだ……」

それこそが、贖罪ではなく、過去への決別なのだろう。そして、リャノンが見つめるべきものは現在のファータであり、守るべきものは未来の彼女だ。

そう、確かに今が節目なのかもしれない。

そんなことに気づくのにも時間がかかりすぎる自分を罵倒しながら、リャノンはファータの後を追いかけるべくリグを飛び出していった。

2

衝動的にリグを飛び出したまではいいが、ファータにはいくあてなどなかった。

レイヴンではない彼女は、自分のACという物を持ってはいない。だいいち、リャノン宛にきた依頼を、彼女が引き受けることはできない相談だった。

だが、いまさらリャノンのもとに戻る勇気はわいてこなかった。互いに、言う必要のないこと、いや、いつかは言わなければならなかったことをついに口にしてしまったのだ。嫌でも、二人の関係は変わらざるをえないだろう。だが、今のファータには、それを自分の望む方向に変化させる自信など微塵もありはしなかった。

わけのわからない無力感にさいなまれて、ファータは走り続けた。すでに、レッド・ブランチの姿ははるか後方に遠ざかっている。

やみくもに街路を走り続けたファータは、突然誰かにぶつかって止まった。反動で倒れようとするところを、いきなりだきとめられて何とか踏みとどまる。

「大丈夫ですか、ミス・ファータ＝アマイ」

突然自分の名前を呼ばれて、ファータは驚きながら声の主に顔をむけた。泣きべそをかいていた目を指で拭うと、やがて視界がはっきりとした。グローバル・ドームで出会った、レイヴンズ＝ネストのラルフという男だ。しかし、なぜ、彼がこんなところにいるのだろう。

「ええ、大丈夫です」

ファータは手短に答えると、ラルフの腕を振り解こうとした。だが、彼は少女の腕を痛いくらいに強くつかんだまま放してはくれなかった。

「痛い、放して！」

ファータは叫んだ。

「もうしわけないが、それはできませんね。あなたには、これからいろいろと役に立ってもらわねばなりませんから」

薄笑いを浮かべながら、ラルフが答えた。いつの間にか、数人の男が二人の周りに集まってきている。

「どういうことよ」
気丈にも、ファータがラルフたちを睨みつけながら訊ねた。
「そうですね、まずはあなたの父上の残した細菌のことからでもお聞きしましょうか。あの細菌のおかげで、私たちが実験場としてのガル・シティに放したバグたちが手痛い目に遭いましたから」
「どういうことなの、それは！」
思わず、ファータは大声を上げて怒鳴った。
ガル・シティは、彼らの実験場だったとでも言うのだろうか。野生のバグが、自然にやってきたものではなかったとしたら……。もしあれが、誰かが誘導してきたものであるならば、それがどういうことかわかっていてこの男は言っているのだろうか。
「まったく、あのとき細菌を見つけだせなかったことが、ここまでひびくとは思いませんでしたよ。おかげで、ガル・シティは用済みの存在になってしまった」
ラルフが、言い知れぬ恨みを込めてファータを睨みつけた。
ファータは激しく身体をよじると、何とか彼の手から逃れようと暴れまくった。
手こずったラルフが、片手を振り上げてファータの頬を手の甲で殴り飛ばした。勢いで倒れかかる少女の腕を引いて、ラルフがその身体を乱暴に引き戻す。
「まったく、父親同様、我々の手を焼かせてくれますな。冷たくなってもらってから、どこ

かの戦場なり、テロ現場に死体を置き去りにしてもいいのですよ。いかにも、その場で事件に巻き込まれたように見せかけてね。あなたは、父親ほど馬鹿ではありますまい？」
言外に凶悪な意味を含めて、ラルフが言った。それは、ファータの父親の死が、バグの脱走による事故死ではないということなのだろうか。
「あなたは、何をしてきたと言うの。あなたは!!」
口の中を切ったファータが、唇の端に血を滲ませながら叫んだ。
リャノンは悪くなかったのだ。その思いが、くすぶっていたファータの怒りを爆発させた。
憎むべきは、目の前のこの男であり、彼の属する組織だったのだ。
ファータは、渾身の力を込めて、ラルフに殴りかかった。それを軽くいなすと、ラルフは膝を蹴り上げた。鈍い音とともに、ファータが腹を押さえてうめき苦しむ。
「それについては、後でゆっくりと話してさしあげましょう。なあに、無駄な抵抗さえしなければ、時間はこれから無限にあるのですから」
ラルフはそばの男にファータの身体を投げ渡すと、待機させていた装甲護送車を呼びよせた。
「とりあえず、今は人質として活用させてもらいましょうか。ほら、パートナーのお出ましですよ」
ラルフの言葉と同時に、部下の男たちが前に進み出て警告もなしに発砲した。

ファータを追いかけてきたリャノンは、突然彼女が殴られるのを見て、怒りに燃えて駆けてくる途中だった。数人の男たちが胸や腰に手をやるのを見て、本能的に横っ飛びに並木の陰に身体を飛び込ませる。風を切る音が通り過ぎ、歩道のアスファルトで細かい破片が飛び散った。

身体を一回転させる間に護身用の拳銃を抜いたリャノンは、すぐさま反撃に移った。

男たちの一人が、正確に肩を撃ち抜かれて倒れる。

時ならぬ銃撃戦が始まり、リャノンは並木の陰に釘づけにされてしまった。ファータが敵の最中にいるため、迂闊(うかつ)に攻撃することができない。迷いが、照準を狂わす恐れがある。その間に、ラルフたちはファータとともにトーラスの中に逃げ込んでいた。間断なく銃を撃ちながら、そのまま逃走していく。

必死にリャノンはその後を追った。だが、用意周到な敵は、準備していた地上への大型エレベータにトーラスごと乗り込むと、そのままリャノンの前から姿を消した。

「くそ！」

ドンと、リャノンはエレベータの扉を思い切り叩いた。だが、その音は空しく地下都市に響くだけであった。

「ファータは、必ず取り返してやる」

リャノンは、急ぎレッド・ブランチの中へと戻った。カヒライスを出せるところまで移動

して、ACで後を追うつもりだった。ACのブースターでエレベータのトンネルを上昇すれば、まだ追いつける可能性もある。わずかでも可能性が残っているなら、今はそれに賭けるしかなかった。

『聞こえるかな、リャノン＝シードル』

まさにリグを発進させようとした瞬間、コックピットの中に聞き覚えのある声が響いた。

「貴様はあのときの……」

姿の見えない相手に対して、リャノンは大声で答えた。先ほどは気がつかなかったが、声からグローバル・ドームで出会ったレイヴンズ＝ネストの男だということがわかった。だとすれば、補給のときに、リグ内に盗聴器をしかけられたのだ。迂闊だった。

『おそらくはACで追いかけてこようと思っているのだろうが、無駄なことはやめたまえ。君のACの発進を確認した場合、君のパートナーにはすぐに死んでもらうことになる』

「何が目的だ！」

盗聴器を探しながら、リャノンは怒鳴り返した。

『簡単なことだよ。例の依頼を受けてもらいたい』

単刀直入にラルフが言った。やはり、先のメイルは、彼らのからんだ罠だったというわけだ。

おそらく、彼らはリャノンが依頼を断ることを想定して、ファータの誘拐を準備していた

のに違いない。盗聴器からの情報で、予想通りリャノンが依頼を断ったことを知った彼らは、すかさず誘拐の準備に入ったというわけだ。運悪く飛び出していったファータは、その網の中に飛び込んでいってしまったのだろう。

「まどろっこしいことを。罠だと知っていて、のこのこと出かける馬鹿がどこにいる。俺の命が狙いなら、こそくな嘘をめぐらさないで、堂々と攻撃してきたらどうだ」

　敵の声を頼りに、コンソールや椅子の下などを探しながら、リャノンは言い返した。後部シートの下に手をさし伸ばしたときに、その指先が異物にぶつかる。のぞき込むと、小型の通信機が貼りつけてあった。

『これは心外だな。依頼自体は、嘘ではないのだよ。だから、我々は君にこのミッションを成功させてほしいのだ。……おっと、我々のプレゼントを見つけたようだな』

　いけしゃあしゃあとラルフが答えた。いったい、どこまでが本当で、どこまでが嘘なのか。

「だったら、ファータを返してもらおう。そうでなければ、依頼などは受けない」

　取り外した通信機を手に持つと、リャノンは強気で対応に出た。

『これはこれは、まだ自分の立場がよくわかっていないとみえるな。君には、条件をつける権利など、もはや存在しないのだよ。彼女は、君が逃げ出さないための担保みたいなものだ。もちろん、我が身かわいさにパートナーを見捨てて逃げ出すのならば、無価値な存在としてこちらで処分させてもらうがね』

「俺がミッションを成功させたとして、彼女をこちらに引き渡してくれる保証は？」

『ない』

　きっぱりと、ラルフは言い切った。

「ずいぶんと、そちらにばかり都合のいい話だな」

『しかたないさ、そういうシナリオに君は出演してしまったのだからな。だが、少なくとも君がミッションを成功させて戻ってきたならば、彼女を取り戻すチャンスぐらいはあるかもしれないな。それまでは、私が彼女の命は保証しよう』

「誰がそれを信じられる」

　吐き捨てるように、リャノンは言った。

『信じてもらうしかない……としか言いようはないな。それに、殺すとばかり決めつけるのも芸がないと思うが、どうだろうか。殺してしまうよりは、辺境に慰み者として売り飛ばす方がいくばくかの金になるというものだよ。なにしろ、まだうら若い少女だ、ほしがる輩も多いだろう』

　雑音混じりにラルフが答えた。きっと、通信機のむこうでは笑っているのだろう。リャノンは相手を殴り飛ばせない悔しさに、拳をふるわせて歯がみした。

「いいだろう、依頼は受けてやる。だが、報酬は、ファータの身柄と——貴様の命だ。いいな、しっかりと覚えておけ」

ついに、リャノンは依頼を受けた。もとから、道はそれしか残されてはいなかった。
『了解した。一応、覚えてはおこう。では、作戦の成功を祈っている』
ラルフのその言葉が終わると同時に、リャノンは通信機を床に叩きつけた。そして、そのままばらばらになるまで踏みにじった。

3

「よう、不景気そうな顔をして、何かあったのかい」
ガレージのチーフが、やってきたリャノンを見るなり言った。
「宇宙戦用の、バリアブル・スラスターをセットしてくれ」
「そりゃまた、珍しい物を……」
チーフが、少し驚いた顔をする。宇宙港を有するアイザック・シティの圏内に属するシティではまったく需要のない装備ではないが、それでもショップの一般の品揃えからは外されているほどの特殊な装備だ。
「ないのか？」
「いや、秘蔵品があるぞ」
うちの在庫はそこらのショップ以上だと、チーフが顔の端で笑う。

「急いでいる。すぐに取りつけてくれ」
わかったと答えると、チーフがさっそく作業を指示し始めた。カヒライスの腕（AN23）のショルダーアーマーに差し込むようにして、球形の全方位型小型推進装置（バリアブル・スラスター）が取りつけられていく。
無重力状態の宇宙では、動輪や腕部脚部の接地面に装備された電磁石を使って施設の床や壁にACを固定させる。機動時の姿勢などは、ブースターやスラスター、あるいは手足を振ったときの回転力量（モーメント）でコントロールするしかない。
「……それより、珍しくファータちゃんの姿が見えないようだが、喧嘩（けんか）でもしたのか？」
ふいに核心をつかれ、リャノンはガレージ内の人目につかない場所にチーフを呼びよせた。
「さらわれただって！」
「しっ、声が大きい」
顛末（てんまつ）を聞かされて大声を上げたチーフを、リャノンは慌ててたしなめた。
「そこで、一つ頼みがある。ファータの捜索を頼める奴はいないか。金は一〇万コーム預けよう」
声を潜めながら、リャノンは続けた。
「レイヴンであるあんたが、レイヴンを雇おうって言うのか」
本末転倒な話だとチーフが呆れた。
「背に腹は替えられない。最低条件は、ファータの位置と彼女の安全の確保だ。期限は、俺

が戻ってくるまで。おそらくは、明後日の夕方だ。もしそれまでに戻らなかったら、救出も頼みたい」
「なら、適任の奴が一人だけいるがな。インヴィジブルQという、隠密作戦にはうってつけの男だ」
少し考え込んだ後、チーフがあるレイヴンの名をあげた。
「信用できるのか。レイヴンズ＝ネストを敵に回すんだぞ」
「信用はできんさ。なにしろレイヴンだからな」
当たり前のことをいまさら聞くなと、チーフがリャノンを諌めた。
「だが、奴もいろいろわけありでな、首に賞金をかけられてる。そのせいで、ネストとも疎遠でな。少なくとも、あんたの敵に通じているということはないだろう。それに、ビジネスに割り切った男だからな、依頼の是非は問わない主義だそうだ」
「アウトローということか」
リャノンは少しだけ納得した。レイヴンズ＝ネストとのつながりが薄ければ薄いほど、こちらの動きを察知される危険は減る。
「まあ、そんなところだ。救出まで受けてくれるかはわからんが、間違いなく居場所は見つけてくれるだろうさ」
「わかった。すまないが頼む」

留守中の手配を済ませると、リャノンはレッド・ブランチをガレージに預け、換装が終わったカヒライスで宇宙港へとむかった。

4

かつて、人類の版図は月や火星までをも含める広大なものであった。
だが、大破壊以後、火星のテラ・フォーミングは机上から一歩も進まず、火星や月の基地は放棄されて孤立したままであった。
衛星軌道上のステーションや各種人工衛星も、稼動しているものの数は最盛期の数分の一にまで減少している。今や、そのほとんどは真空中を漂うゴミでしかない。
けれども、エネルギー資源のほとんどを発電衛星からのマイクロウェーブに頼っていたり、シティ間の長距離連絡には通信衛星を使用するなど、現在も稼動している宇宙施設は重要な意味を持っていた。その価値は、大破壊以前よりも高まったと言えるだろう。
それら施設のメンテナンスや所有権の確保のために、宇宙港からは定期的に宇宙船が打ち上げられていた。
第一宇宙港は、軌道間往復機（SSTO）用の発射基地となっていた。山の斜面を利用して、数キロに渡るガイドレールが空へとむかってのびている。これを使って発射されたスペースシャトル

は、大気圏を航行後に軌道上へとあがっていく。帰還時は、通常の航空機と同じように降下し、宇宙港の滑走路に着陸する仕組みだ。

第二宇宙港は、衛星軌道間大質量物輸送艇（HLLV）の発射基地となっている。SSTOと違って垂直発射される巨大ロケットは、大量の物資などを一度に軌道上にあげる能力を有している。複数の補助ロケットで段階的に加速されたHLLVは、軌道上で物資の放出ないし受け渡しを行った後、バリュートを展開して大気圏へと再突入を行う。逆噴射とパラシュートで減速した後は、宇宙港のあるクレーター跡の巨大湖に着水して回収される仕組みだ。

これだけの施設を有しているのは、近郊でもアイザック・シティだけだった。特にHLLVの発射場を持っていることは、他のシティに抜きんでて発展した要因ともなっている。

深夜に第二宇宙港にたどり着いたリャノンは、磨かれた黒曜石のように黒く輝く湖面と、そのほとりにスタンバイされたずんぐりとした巨大なロケットを丘の上から見下ろした。六機の打ち上げ用ロケットに取り囲まれたHLLVの機体は、細い方を上にした卵を横半分に割ったような姿をしている。その周辺では、あわただしくライトが瞬いて、急ピッチで作業が行われていることを示していた。

宇宙港のゲートで身分を証明すると、リャノンはHLLVに搭載すべくカヒライスを作業員に引き渡した。

HLLVの荷物室（カーゴ）には、見覚えのあるACが次々に積み込まれていく途中であった。ヴィジランティ、クレッセントId、ブロックバスター、フェンリル、プリティキトゥン……。そうそうたるメンバーだ。

その中に深紅と黒に塗り分けられたACを見て、リャノンは驚きに目を見張った。

「ナインボール……!!」

それは、ハスラー・ワンと名乗るレイヴンの乗るACだった。かつて、レイヴンズ＝ネストにおける、ランカーのトップに君臨していた男が彼だ。いや、男かどうかもわからない。なにしろ、彼の姿を見た者は誰もいないのだから。戦場で敵としてナインボールの姿を見た者は、ほぼすべてがその命を落としていた。例外は数えるほどだ。彼が死神と呼ばれるゆえんである。味方であっても、彼は他人との接触のいっさいを嫌った。過去や素性を秘密にするレイヴンは多いが、彼はそれを極限まで徹底していた。

神出鬼没の彼は、どんな過酷な戦場でも生還してきた。たとえ乗機であるナインボールを破壊されたとしても、次の戦場では同じ機体を新規に作り直して何事もなかったようにミッションをこなしていた。まさに不死身だ。終始スタイルを一貫した血のように赤いACは、すべてのレイヴンたちの憧れと恐怖の象徴だった。

そして、彼ほどレイヴンズ＝ネストと深いつながりを持つレイヴンもいなかった。

リャノンは、かつてレイヴンズ＝ネストの本部でナインボールと戦ったことがあったのだ。

二大企業を破滅に追い込んだリャノンを、レイヴンズ＝ネストは過剰因子として排除しにかかった。そして、レイヴンズ＝ネスト本部に誘い込んで抹殺を企てたのだ。

そこで、リャノンは刺客であるハスラー・ワンと戦った。一度ACを破壊したと思っても、予備の物と思われるナインボールを使って再度戦いを挑んできたハスラー・ワンは、まさに獲物を逃がさない不死身の野獣そのものだった。だが、彼は不死身ではなかった。辛くも勝利したリャノンは、レイヴンズ＝ネストのデータバンクを破壊してすべての過去を消し去った。以前、ダイナマイトブルと出会ったクレーターが、レイヴンズ＝ネスト本部の爆発した跡地だ。ハスラー・ワンともども、すべては閃光に消えたはずだった。

「生きていたのか……」

リャノンはつぶやいた。信じられないことだが、奴はレイヴンズ＝ネスト本部の爆発からも生還したらしい。確かに死体を確認するようなことはしていないが、信じられないことだった。まさに、化け物だ。

もっとも、レイヴンズ＝ネストが復活しているのだ、まったくありえない話ではないのかもしれない。正直な話、ハスラー・ワンという名と、ACナインボールを受け継いだ二代目のレイヴンということもありえるはずだ。ならば、納得もできよう。

「おい、あのACの、そのレイヴンを見てはいないか」

リャノンは、手近な人間を捕まえると、今まさにHLVに収納されていくナインボールをさして訊ねた。

「さあ、パイロットでしたら、すでにブリーフィング・ルームに集まっているはずですが」

作業員が、言葉をにごした。

ならば、この目で確かめるしかない。

リャノンは、作戦指示室（ブリーフィング・ルーム）へと急いだ。

5

「よう、やっぱりあんたもきたのか」

ブリーフィング・ルームでは、ファルコンがいつもながらの陽気さで出迎えてくれた。ついでに、なぜかリャノンの後ろをのぞき込むような仕草をする。

「さすがに、リャノンも今回はパートナーをおいてきたようだな」

ファルコンの下心を見すかしたヴォルフが、短くなった煙草をもみ消しながらリャノンに言った。つまらんとばかりに軽く舌を鳴らしながら、ファルコンが折り畳みの椅子に戻ってふんぞり返る。

「少しは落ち着きなよ、そんなんじゃ上にあがるまでに疲れちまうよ」

ファルコンをたしなめるリンクスミンクスの言葉に、窮屈（きゅうくつ）そうに椅子に座っていた大男

が豪快な笑い声を立てた。その声に、リャノンは聞き覚えがあった。ブロックバスターのパイロット、ダイナマイトブルだ。

「いつぞやは世話になったな。あんたが、あの青いＡＣのパイロットかい」

気さくというよりは無遠慮といった態度で、ダイナマイトブルがリャノンに声をかけてきた。

「ああ。リャノン＝シードルだ」

「俺は、ダイナマイトブルって名乗ってんだ。まあ今回もよろしくたのまあ」

挨拶を済ますと、そのやりとりを聞いていたもう一人の男がおやという顔になった。

「あなたが、あのときの……」

すらりとした長身で、オールバックにした長い直毛を後ろで一つに束ねている。顔立ちは東洋系で、ラフな服装の多いレイヴンたちの中では珍しく品のいい小綺麗なスーツを身につけていた。

「三日月と聞けば、覚えがあるでしょう。アリーナで一度だけお手合わせを。あのときはやられました。いつか再戦で決着をつけたかったのですが、どうやら手を結ぶ方が先だったようですね。人生のシナリオとは面白いものです」

丁寧な口調で淡々としゃべる男だ。人当たりは柔らかいが、気の抜けないタイプでもある。

それにしても、当然のごとくランカーが集まってきたとはいえ、よくもまあリャノンと関

わりのあった者たちだけを集めたものだ。かつて仲間やライバルであったという存在であるとともに、リャノンの戦い方をよく知っている強敵たちであるとも言える。

はたして、このレイヴンたちの中で、いったい誰が味方で誰が敵なのであろうか。

リャノンの味方を一掃しようという意図で集められたともとれるし、逆にリャノンの油断を誘う刺客たちにも思える。最悪、全員が敵ということもありえるわけだ。いや、その可能性はかなり高いだろう。レイヴンとは、日によって敵と味方をそっくり交換するような奴らなのだから。

それにしても、ここにはハスラー・ワンの姿はないようだ。

「みなさん、聞いていただきたい」

会議用スクリーンの前にあるテーブルに近づくと、三日月が一同の注意を引いた。

「全員が集まったようですから、作戦の概要を説明したいと思います」

「あんたがリーダーになるつもりかい？」

ご大層な身分だと、リンクスミンクスが相好を崩したままで訊ねた。

「いいえ、ランクでは私はヴォルフ氏よりも下ですから、そのつもりはありません。リーダーには、最もランクの高い人物がすでについています」

そう告げると、三日月はテーブルの上にあった内線電話のボタンを押した。オンフックとなり、スピーカーからある人物の声が流れ出した。

『音声だけで失礼する。基地指令とミーティングの途中なのでな。私が、ハスラー・ワンだ』
質の悪いスピーカーから聞こえるやや割れた音声に、一同がざわめいた。
「本当に生きていたのか。一時期死んだと噂されていたのに……」
ダイナマイトブルが、驚きを隠さずに言った。ここ一年近く、ハスラー・ワンが仕事をしたという話は聞いていない。まことしやかに、死亡したという話が、レイヴンたちの間では信じられていた。
『そんな噂もあったようだな。だが、私はこうして健在だ。そのようなことよりも、今回のミッションについての説明をしよう。スクリーンを見てくれ』
余計な話題にはふれようとせず、ハスラー・ワンが言った。声からすると男のようだが、声だけではやはりその正体はうかがいしることはできない。
スクリーンには、宇宙ステーション《カエデ》の姿が映し出された。
『目的地は、衛星軌道上に存在する宇宙ステーション《カエデ》だ。ここは、かつてムラクモ・ミレニアムが宇宙軍事活動の拠点として使用していたものだが、現在は戦闘によってその機能の大半を失い、自動防御システムが作動している以外には、生命維持装置などはすべて停止している』
スクリーンの図表が、地球とそれを回るステーションの模式図となった。
『敵は、能力を失った《カエデ》を質量兵器として再利用しようとしている。アヴァロン・

バレー、ないしはアイザック・シティに《カエデ》を落下させるつもりのようだ。その場合の被害は、ゆうに大型の地下複合都市を完全消滅させてあまりあるものとなる』
シミュレーションが表示される。落下時に運動エネルギーと化した大質量物の位置エネルギーは、衝突時に核をも上回る熱エネルギーへと変換され強大な衝撃波で周囲の物を破壊する。直撃を受けたアヴァロン・バレーが、巨大なクレーターと化して消滅した。地下の居住部でさえ、ひとたまりもない。
『敵は、反目するバージュ社を即時殲滅（せんめつ）しようと焦る新企業連合の一部過激派と思われる。だが、そんなことはどうでもいいことだ。次に、作戦を説明する』
スクリーンが、《カエデ》の三面図に切り替わった。
《カエデ》は左右対称（シンメトリカル）構造をしており、上下二段に配置された細長いブロック構造の各施設を、細いチューブ状の通路で結ぶという構造をしている。
下層中央にはベイ・ブロックがあり、HLLVドッキングポート一、SSTOドッキングポート二を備えている。続くブロックは、物資の一時保管庫であり、必要に応じてカタパルトへの物資の搬出口として用いられていた。だが、機能が停止している現在、ゲートのすべてが開くわけではない。その他に、下層には大小二つの実験施設があった。
上層部は、大型の居住ブロックを二つ有していた。中心には巨大な物資貯蔵ブロックがあり、そこからは物資射出用のカタパルトが二本設置されていた。このカタパルトによって、

昔は他のステーションや月面基地に物資を送り届けていたわけだ。

『ターゲットは、《カエデ》の中央部にあるカタパルト基部に設置された核パルスエンジンだ。敵はカタパルトそのものを改造し、《カエデ》を移動させる推進器としたのだ。このエンジンに点火されたら、落下を止めることは事実上不可能となる。我々の乗ったHLVがベイ・ブロックにドッキング後、各ACは内部を移動してターゲットにむかい、これを破壊する』

「何で直接エンジンを攻撃しないんだい」

その方が楽だろうにと、リンクスミンクスが口をはさんだ。

『かつて《カエデ》を一時的に占拠した企業がステーション内外に設置した無人砲台が、未だに相当数生きているのだ。特に外装に装備された物は、対スペースプレーン用の強力なもので、迂闊に近づいた場合HLVでも一撃で撃破される危険性がある。当然、遠距離ミサイルでも結果は同じだ。だが、この砲台もすべての方向をカバーしているわけではない。唯一の死角をつけば、ベイ・ブロックにならドッキングすることができる。逆に、その場所以外は、侵入は不可能ということだ。侵入後は、二手に分かれて敵の設置した二基のジェネレータを破壊する。それによって、エネルギーを絶たれた敵砲台は無力化するはずだ。さらには、敵の作業を遅らせることもできよう。ジェネレータ破壊後には中央ブロックで合流し、その先に設置された核パルスエンジンに私の携行する爆薬をセットして脱出する』

「それで、敵戦力は、どのぐらいだ」

独自の戦略プランを練りながら、ヴォルフが訊ねた。各人は宇宙戦仕様に各ACをアセンブルしてきているが、敵の規模によっては再度武装の構成を変える必要があるかもしれない。

『推定では、AC一個中隊クラスがいるようだ。何度もシャトルが往復するのが確認されている。だが、こちらの先発隊もすでに到着して戦闘を開始している。敵を突破するまでには至ってないが、多少は敵戦力を減らしてくれているだろう』

「俺たちが着いたら、すでに片はついてたなんてこたあ、ないんだろうなあ」

空出撃は冗談じゃないと、ダイナマイトブルが確認を求めた。

『先発隊にそこまでの力はない。我々のためにシャトルベイを確保するのが彼らの目的だ』

「そいつらと敵は、どうやって見分けるんだよ」

間違って倒してしまって、後で文句を言われたらたまらないと、ファルコンが訊ねた。

『赤く塗装したシュトルヒが、こちらの味方だ。識別信号も出しているので、十分見分けはつくだろう』

「シュトルヒねえ、心強い味方だこと」

リンクスミンクスが、皮肉っぽくつぶやいた。

シュトルヒは、自動制御の戦闘ロボットだ。あらかじめプログラムされた指令パターン通りに戦闘を行う。逆関節の脚部と二基のロケットブースターは軽快な機動性を発揮してはい

るが、武装は連装ビーム砲と爆雷散布器だけで、大した戦闘力はない。安価に大量投入できるというのがメリットの、完全な捨て駒だ。

『さて、まだ質問もあるだろうが、そろそろ時間だ。HLLVに乗り込んでくれたまえ。私もすぐにそちらへむかう』

一方的にブリーフィングを打ち切ると、それきりハスラー・ワンは沈黙した。

「では、移動しましょう。宇宙用のACパイロットスーツが用意されているそうです」

三日月が一同をうながした。

6

「それにしても、この気密服というのは、どうにも着心地の悪いもんだねえ」

HLLV内部の乗員用シートについたリンクスミンクスは、いかにも動きにくいと不満を述べた。アンダーウエアの上に直接着ているのだが、戦闘も服装も動きやすさを重視する彼女にとっては、全身を被う耐G仕様の気密服はいかにも窮屈な代物らしい。

「仕方ねえさ。宇宙には空気がねえからな。戦闘になれば、コックピットの機密性だって絶対とはいかねえんだぜ」

訳知り顔で、隣に座ったファルコンが言った。すでに、発射準備は整い、ハスラー・ワン

をのぞく全員がシートに座って安全ベルトを締めている。

「ずいぶんと慣れてるみたいじゃないか」

「これでも、シャトルパイロットのライセンスは持ってるんだぜ」

リンクスミンクスに聞かれて、ファルコンが意外な言葉を返した。

「はあん。まさに人は見かけによらないだね」

一応感心した素振りを見せてから、リンクスミンクスはシートにもたれかかった。

「にしても、さっさと出発しないのかねえ」

「まだ、ハスラー・ワンがきてねえぜ。そいつを待ってるんじゃねえのか」

「いや、彼はここにはこないようです」

おしゃべりなファルコンとリンクスミンクスの会話に割り込んで、三日月が一言説明した。

「ここでもVIP待遇かい。さすがにナンバーワン・ランカーは違うときてるね。顔を見せて挨拶の一つもしないつもりかい」

「しかたないでしょう。彼はそういう主義だそうですから」

ふてくされるリンクスミンクスに三日月が答えたとき、HLLVの船長からカウントダウン開始のアナウンスが室内に響いた。一瞬、一同の間に緊張が走る。巨体を持て余し気味のダイナマイトブルなどは、初めての体験にそわそわと落ち着きがない。

「出発か……。俺は、俺はすぐに戻ってくる。待っていろ……」

リャノンは、独りつぶやいた。
〇（ゼロ）のコールが響いた。

HLLVを支える六基のロケットが一斉に咆哮（ほうこう）した。ロケット表面に貼りついた氷片が振動で剥（は）がれ落ち、ロケットの噴射に巻き込まれて一瞬にして白い水蒸気へと化していく。広がる白い煙が発射場を覆い尽くし、湖面へと流れていった。七機ものACを積んだHLLVの巨体がゆっくりと上昇を始める。それは徐々に加速を増し、咆哮を上げて天空へと駆け上っていった。

明け始めた空へ、白い尾を引きながら一条の光が上っていく。

明確な目的地を目指して地上を移動していた一機の漆黒のACが、ふと立ち止まってそれを見上げた。

「作戦予定時間、残り三七時間。ミッションは継続……」

リャノンたちの乗ったHLLVを見送ると、インヴィジブルQは小さくつぶやいた。やがて彼の乗るACバウンティは、つかんだ情報の場所にむかって薄闇の中へと発進していった。

7

——俺は、なぜここにいるのだろうか……。

激しいGに耐えた後、外に広がっているのであろう虚無の空間を想像してリャノンは心の中でつぶやいた。

時間が惜しい。だが、もう後戻りすることはできない。焦燥と怒りを何とか自制しながら、リャノンは周りを見回した。

さすがに日常の戦闘で急激な加速には慣れているレイヴンたちは、大気圏離脱時のGにも泣き言一つ言わずに耐え抜いていた。ぱっと見は同じ気密服とヘルメットだが、おおよその体格で誰が誰だかは見分けがつく。はたして、この中で何人が生きて戻れるのだろうか。表面上は味方であっても、リャノンと敵対する者が混じっている以上、全員無事で戻れるとはとても思えない。

特にハスラー・ワンは、かつての経緯から言って間違いなく敵と見た方がいいだろう。問題は、どの瞬間で牙をむいてくるかだ。少なくとも、このミッション自体が額面通りであるならば、核パルスエンジンを破壊するまでは大丈夫ということになるが、それさえ絶対ではありえない。用心しすぎていけないということはないのだ。

やがて、HLLVは《カエデ》とのランデブーコースに入った。到着までは、AC内で待機という指示がくる。もちろん、ハスラー・ワンは現れなかった。

リャノンたちがカーゴに移動すると、すでにハスラー・ワンはナインボールに乗り込んでいた。スリムな軽量二足型ACが、ウエポンラックから取り出したレーザーライフル（WG-1-KARASAWA）の調整

をしている。両肩にはグレネードランチャー、左前腕部には最強のレーザーブレード発振器という、軽量型とはとうてい思えないほどの重装備だ。肩には、〝9〟と描かれたビリヤードの黒いボールがエンブレムとして描かれている。軌道修正用には小型のスラスターが機体各所に取りつけられており、腰に取りつけられた推進剤タンクとスラスターをつなぐ推進剤移送パイプが、あたかも浮き出た血管のようで不気味だ。

他のACも宇宙戦用に機体構成を若干変更し、それぞれの機体にあった異なる形態のスラスターなどを装備してきている。

ブロックバスターは肩のミサイルを外し、両肩にリャノンと同じショルダーキャノンを装備するという、さらに大火力機へと変貌していた。

大きく変わったのは、フェンリルだ。脚部をホバー推進装置からキャタピラ・トレッド方式の重戦車タイプに変え、まさにモンスターマシンと化していた。武装も総交換し、両腕はより威力のあるガトリングガンに、右肩は中型ロケット弾ランチャーに、左肩は予備弾倉ユニットに変更されていた。

『ドッキング六〇秒前。ベイ・ブロックは味方が制圧しているとのことだが、各機戦闘態勢の上、敵を警戒しつつ順次突入せよ。なお、ベイ・ブロック右側部分は損傷が激しいので、宇宙空間に飛び出さないように注意しろ』

ACに搭乗してから、何分が経っただろうか。ハスラー・ワンから指示が出た。

外では、敵砲台からの攻撃も始まっているのかもしれないが、窓もないカーゴ内ではそれを確かめる術はなかった。しかも、宇宙では音は伝わらない。HLVのジェネレータの細かな振動以外は、静寂があたりをつつんでいると言ってもいいだろう。

軽い衝撃の後、カーゴ内のドッキングチューブ・ゲートのセーフティランプが赤から青に変わった。《カエデ》に到着したのだ。我先にとゲート前にはせ参じたブロックバスターとヴィジランティとプリティキトゥンの前でゲートが開く。なだれ込んでいく二機を尻目に、残る四機は機動力の順に慎重にドッキングチューブに侵入した。

ベイ・ブロックでは思った以上の戦闘が行われたらしく、様々な破片が慣性のままに空間を漂っていた。右外壁には大きな穴が開いており、シャトル・ベイが完全に破壊されていた。そこから強行突入したらしいスペースシャトルが、ベイ・ブロック中央を横切って、左のシャトルベイにまで突っ込んでいる。外壁の裂け目から外に漂い出るまで、破片たちはこの中をさまよい続けるのだろう。動く物といえば、他には守備隊の四機の赤いシュトルヒだけだ。敵部隊は、すでにここを見捨てて守りを固めているのだろうか。

『作戦通り、ここから二手に分かれる。ファースト・ターゲットは、敵ジェネレータシステムだ。では、生きていたらセカンド・ターゲットで再会しよう』

ハスラー・ワンが指示する。すかさず、ブロックバスターとプリティキトゥンが左へ、ヴィジランティとカヒライスが右へと分かれて、奥へと続くゲートをくぐっていった。

『俺は、若い二人についていく。少しは顔なじみだからな。後の二人は任せる』

ヴォルフはさっさとグループ分けを決定事項にしてしまうと、リャノンたちの後を追っていった。先手をとられた形の三日月とハスラー・ワンは、しかたなくダイナマイトブルたちの後を追っていった。

ベイ・ブロックに続くブロックも、内部は残骸が散らばっているだけであった。天井に設置されていたらしい無人砲台の破壊された基部が、まだスパークを散らしている。

この先は、AC一機がやっと通れるほどの連絡通路（バイパス・チューブ）を通ってしか、別のブロックへは移動できない。

『俺が先行するぜ』

若さに任せて先を急ぐヴィジランティを先頭にして、カヒライスが続き、足の遅いフェンリルが殿（しんがり）を務めた。

『タイミングは合わせろよ』

連絡チューブの終点で、リャノンがファルコンに釘を刺した。レーダーには、隔壁のむこうの機影が複数映っている。

『わかってるって。俺は右にいくぜ』

言うなり、ヴィジランティが扉を開けて中へと飛び込んでいく。間をおかず飛び込んだカヒライスは、打ち合わせ通り左をむいてレーザーライフルからレーザーを放った。

挟み撃ちにしようと待ちかまえていた敵MTが、逆にふいをつかれて倒れる。ミミーと呼ばれる、二足歩行型のMTだ。逆関節の脚をし、腕の代わりに強力なビーム砲を左右に装備している。

右側のミミーを撃破したヴィジランティが素早く回頭する。右はすぐに行き止まりで、ブロックは左にむかってまっすぐにのびていた。

背後のヴィジランティの動きを察知して、カヒライスが素早く横移動を行う。まるでそれを予期していたかのように、ヴィジランティが間髪入れずにパルスレーザーライフルを発射した。後続のミミーが脚を撃ち抜かれて横転する。絶妙のタイミングと言えばそうだが、まかり間違えばカヒライスの背中を撃ち抜いているところだ。

敵と同時に味方にも注意を払うという神経のすり減ることをしながら、リャノンはショルダーキャノンを構えた。エネルギー弾を二射して、ブロック内のミミーを一掃する。

戦闘をかぎつけて、ブロック奥の通路から三機のオーガが現れた。V字型の胴部を持つ変則的な形の人型MTだ。

『いっくぜぇ！』

勢いに乗ったファルコンが、左前腕部のユニットからレーザーブレードを発生させて飛び出していった。

『おっちょこちょいが！』

慌てて、ヴォルフが掩護射撃をする。フェンリルの両腕の五砲身ガトリングガンが高速で回転しながら多量の弾丸を吐き出した。蜂の巣にされたオーガが後ろへ吹き飛ばされる。

足裏のマグネットを切ってブースターで一気に接近したヴィジランティは、レーザーブレードを一閃させた。同時に逆噴射をかけて機体を安定させる。右腕を切り落とされた敵が、そこをめがけておよぐようにして左腕を突き出した。オーガの左腕先端がヴィジランティの左腕に触れた瞬間、小規模の爆発が起こってヴィジランティが吹き飛ばされた。オーガの左腕に仕込まれた、接近戦用のペレット・ボムだ。衝撃で、レーザーブレード発振器が左腕からもげ落ちる。

壁まで吹き飛ばされたヴィジランティが、反動でオーガの方に戻ってきた。再びオーガの左手が繰り出されようとしたとき、敵の機体が閃光とともに砕け散った。

レーザーライフルを撃ちながら、カヒライスが突っ込んでくる。そのままの勢いで、すれ違い様にすぐそばまで迫っていた三機目のオーガの機体をレーザーブレードで薙いだ。敵がダメージでバランスを崩したところに、フェンリルの攻撃が止めをさす。

『馬鹿が、調子に乗るからだ。ターゲットは奥の連絡通路の先だ、気を抜くなよ』

ヴォルフに叱られてファルコンがしゅんとなっていると、ブロック中央部の連絡通路から新たなオーガたちが現れた。

『お前たちは先にいけ、ここは俺がくい止める』

フェンリルを固定すると、ヴォルフが叫んだ。肩のロケットランチャーを連射しながら、次々と現れるオーガに攻撃を集中する。

『いくぞ』

リャノンは先行して連絡通路に飛び込んだ。機体を立て直したファルコンが、慌てて後をついてくる。

実験ブロックに突入すると、二人は天井近くに飛び上がりながら素早く左右に分かれた。うむも言わさず、待機していたパペガイが一斉攻撃を開始する。もし中央部で立ち止まっていたら、両側から集中砲火を受けていたところだ。

足裏のマグネットで天井にも機体を固定できることを利用して、パペガイたちから見れば逆さぶら下がりのような体勢から、リャノンたちはショルダーキャノンとスラッグガンを可能な限り敵に撃ち込んだ。敵は、狭い縦長の空間では思うようにパペガイの機動力を生かすことができず、自らの射界の外から一方的に最初の攻撃をくらうこととなってしまった。この最初の戦闘で、敵の持つ数の有利は一気に崩れ去った。

残る敵を各個撃破し終えると、二人はファースト・ターゲットの前にならんで立った。

中央部のややくびれた円筒形のジェネレータが、ブロックの端の方に設置されている。コンソールのついた基部からは、いかにも後から急造して設置しましたと言わんばかりに蛸足のケーブルが八方にのびて壁の中に消えていた。

『こいつを破壊すれば、ステーション内の無人砲台は役に立たなくなるってことだな』
ジェネレータを詳細に調べながら、リャノンはそのファルコンの言葉にうなずいた。だが、ムラクモが放棄した直後に設置されたにしては、やけに真新しいジェネレータだ。
『ああ。だが、なぜかすでに俺たちが通ってきた道の無人砲台は破壊されていたがな』
『先発隊のシュトルヒが破壊したんだろ』
疑問を口にするリャノンに、ファルコンが大して考えもせずに答えた。
『そのわりには、そのシュトルヒがいないし、残骸も存在しない』
『なら、敵さんが壊してくれたということだ。奴らだって、昔にどこかの企業が設置したセキュリティシステムは邪魔だったんだろうさ』
『そう考えるしかないな。だとすれば、一つだけはっきりしたことがある』
そう言うと、リャノンはヴィジランティの機体にレーザーライフルを突きつけた。

8

『どうした、ターゲットの破壊には成功したのか……！』
遅れてやってきたヴォルフは、その場の光景を見てコックピットの中で顔をしかめた。
破壊されたジェネレータのそばに、ヴィジランティが力無く倒れていた。

『やられたのか』
『ああ、無防備に敵軍の中に突っ込みすぎた』
ヴォルフの問いに、リャノンは淡々と答えた。
『だから、あれほど言ったんだ……。だが、奴もレイヴンだ、戦いで死んだのなら本望だろう。さあ、合流ポイントに急ぐぞ。味方がやられたからといって、いつまでもここにとどまるわけにはいかん』
ヴォルフにうながされて、リャノンはヴィジランティをその場に残して目的地へと移動を開始した。
一つ前の戦闘で、オーガの第二陣が現れた通路に進み、上層ブロックを目指す。途中で出会った敵の小隊を撃破すると、二人は中央ブロックに突入した。
そこでは、すでに敵のスウィフト部隊とハスラー・ワンたちが戦闘中であった。ヴィジランティを失って戦力的に弱体化したリャノンたちは、遅れて合流ポイントにたどり着いたわけだ。
敵も残存戦力をすべて集結させていたらしく、ミミー六機、スウィフト八機という戦力だった。だが、敵も相手が悪かった。リンクスミンクスやダイナマイトブルに手を出す暇も与えないほどに、鬼神のごときナインボールが次々に敵を破壊していく。
怯えた敵がほとんど戦意を喪失しかけたとき、背後からカヒライスとフェンリルが増援と

して現れたのだ。敵はひとたまりもなかった。
『そちらは無事だったようだな。残念ながら、こちらはファルコンがやられた』
ヴォルフの言葉に、リンクスミンクスは「そう」とだけ短く答えた。他の者はとりたてた感慨もないのか、大したリアクションも返さない。しょせん、レイヴンの死というものは、その程度のものでしかないのだ。
『核パルスエンジンはすぐそこのはずだ。先行して確認する。掩護してくれ』
ハスラー・ワンはそう言い残すと、単機でカタパルトへの搬出口へ近づいていった。爆薬のセットは、彼が自分で決めた分担だ。
分厚いシャッターのむこうには、核パルスエンジンのシステムが設置されているはずだった。それに爆弾をセットして脱出すればすべてが終わる。ほとんどの者は、そのときまでそう考えていたに違いない。
ナインボールは慎重に壁際に機体をよせると、シャッターのスイッチを入れた。
ゆっくりとあがっていくシャッターのむこうに、何かがゆっくりと現れる。だが、それは核パルスエンジンの一部というような物ではなかった。
『何だ、レッド・ブランチタイプのコンバット・リグか!?』
思わず、ヴォルフがつぶやいた。だが、横幅のあるその機体は、大きさではるかにレッド・ブランチを超えていた。三角形の平たい機体の左右には、閉じたハサミのようなラック

が突き出ている。機首にはプラズマキャノン（WGXC4）、後部には大型ミサイル（WML201）を備えたその漆黒の機体は、紛れもなくコンバット・リグに分類される物ではあるだろう。だがその異様なシルエットは、それがただのコンバット・リグではないことを示していた。
ゆっくりと謎のリグが前進を始める。そして、その上部装甲板の一部が起き上がり始めた。
『散開しろ！』
ヴォルフが叫んだ。カヒライスとブロックバスターが左に、後のACたちが右に素早く分かれる。
ナインボールが、黒いリグの上に飛び乗った。起き上がった装甲を防御盾（ディフェンスシールド）とし、足をハードポイントにめり込ませてエネルギー接続を行った深紅のACは、リグと一体化して一同の前に敢然と立ちふさがった。かつて味わったことのない威圧感が、全員の神経を圧迫する。
『ミッションは最終段階に入った。時間は残り少ないが、それほど慌てることもない。少なくとも、シナリオを聞いてから死んでも遅くはないだろう』
『ついに、正体を現わしたというわけか。聞こうじゃないか、このミッションの真の目的を』
不気味につぶやくハスラー・ワンにむかって、リャノンは叫んだ。状況をつかみきれないヴォルフたちは、狙いをナインボールと謎のリグに定めたまま彼らのやりとりに耳をかたむけた。
『じきにこの《カエデ》は、我々にとって利用価値のなくなったガル・シティに落下する。

すべては、新企業体連合の起こしたテロの結果ということにしてな。バージュ社が新企業体連合の保有するシティのどれかに《カエデ》を落とすという情報にまんまと騙されて、彼らは部隊を派遣してくれた。これで、この《カエデ》がバージュ社のテリトリーに落下すれば、事件は彼らが犯人としてしくんだものに見えるというわけだ。その敵部隊を殲滅するために、君たちは利用されたわけだ。皮肉だな、一応、双方の部隊の目的は同じだったのだから』

『自分たちのシティに、この《カエデ》を落とすつもりなのか……』

ヴォルフがうめいた。

『生け贄だよ、ささやかな。たかが、価値のなくなったシティ一つだ。安い投資ではないか。誰も、味方のシティを破壊するとは思うまい。首謀者は、破壊されたシティの敵対組織と思うのが普通だ。そして、阻止部隊を送ったが間に合わなかったとするバージュ社は、衛星都市の一つを失った報復として、大義名分を掲げて新企業体連合と公の抗争に入ることができるというわけだ。バランスのとれた、永遠に続く消費と利益をもたらす戦争にな』

『ふん、ちんけなシナリオだこと。それで、あたいたちをどうしようって言うのさ』

リンクスミンクスが、ハスラー・ワンにかみついた。

『君たちは有能すぎる。ミッションを一〇〇パーセントで達成するのならいいが、一二〇パーセントで達成されては困るのだよ。だから、消えてほしい。それが我々の望みだ。特に、リャノン＝シードル。私は会いたかったぞ。私を倒したという貴様に……。そのために、わざわざこのステージを用意してやったのだ。貴様に関わるすべての者を、一緒に灰燼と帰すために。このダグザとナインボールの前には、何者も無力であることを証明するために。そして、すべての過剰因子が消え去ったとき、我々の手による均衡のとれた安定が再び実現されるのだ。すでに、このＡＣサポート・リグ、ダグザの起動によって、核パルスエンジンのタイマーがカウントダウンを始めている。後九〇〇秒ほどで、核パルスエンジンは点火する。君たちには、ここで《カエデ》と運命をともにするか、私に倒されるかを選んでもらおう』

自己に陶酔するかのように、ハスラー・ワンが全員に伝えた。すでに、逃げ場はない。

『黙れ。俺は、貴様らなどに操られはしない。俺に、いや、俺たちに手を出すと言うのなら、逆に全力で叩き潰してやる！』

リャノンは叫んだ。

『いいだろう。始まりだ』

ハスラー・ワンが宣言した。ナインボールの両肩のグレネードランチャーが起き上がり、発射体勢をとった。

すべてのＡＣの砲門が一斉に開かれると思われた瞬間、誰よりも早くクレッセントＩｄが動いた。くるりと回頭してナインボールとは逆の方向をむくと、斜め後ろにいたフェンリルにむかって至近距離から散弾銃を連射しまくった。

『三日月、貴様あ……!!』

ヴォルフの声が途中で途切れた。重装甲のフェンリルの機体が、右肩口から頭部にかけてをごっそりと銃弾に削り取られる。腕のガトリングガンがもげ落ち、肩のロケットランチャーが後ろの壁まで飛ばされて誘爆を起こした。

広がる爆炎を背に受けながら、死力を振り絞ったヴォルフが、残る左腕のガトリングガンからクレッセントＩｄにむかってありったけの銃弾を放った。物凄い勢いで排出される薬莢が、天井にむかって一本の列を作る。

さすがに、相打ちを恐れて三日月が機体を引いた。後退しながらも放つ散弾が再びフェンリルを襲い、右半身をほとんど破壊されたフェンリルが沈黙した。

『このお、裏切り者!!』

リンクスミンクスが吼えた。怒濤のように、左右のスラッグガンを連射する。

高耐久力で力押しにその攻撃を耐えながら、三日月はジグザクに後退して態勢を立て直した。

『それは心外な。私は、最初から自分に依頼された仕事をこなしているだけです。リャノンの仲間と思われるレイヴンを始末しろという依頼をね。だから、クライアントを裏切ってなどはいないんですよ』

冷静な声で、三日月が答えた。すでに始まっているハスラー・ワンとリャノンたちの戦いに巻き込まれないように注意しながら、次のターゲットであるリンクスミンクスに攻撃を集

中させてくる。

『だから……、あなたも死ぬんですよ、リンクスミンクス。私の敵となる者はすべて!!』

『ほざきな!!』

スラッグガンの弾幕を張りながら、リンクスミンクスは三日月を追い立てていった。だが、多少の被弾ぐらいでは、重装甲のクレッセントＩｄには致命傷にならない。逆に、装甲の薄いプリティキトゥンにとっては、一度の油断が命取りになりかねなかった。

『どうしました。逃げ回るだけでは、私は倒せませんよ!』

三日月が挑発する。リンクスミンクスの激情に火をつけることができれば、そこにつけ込んで一気に決着をつけることができる。冷徹な三日月の、冷ややかな計算だった。

大きな爆発が、リャノンたちの方で立て続けに起きた。閃光が、プリティキトゥンとクレッセントＩｄのシルエットを浮かび上がらせる。

「ちっ、まずいよ……」

リンクスミンクスは、めまぐるしくプリティキトゥンを動かしながらつぶやいた。三日月の挑発にこれ以上のらないために、通信装置は切ってある。だが、もし彼女が三日月にこれ以上手こずれば、最悪リャノンたちがやられてしまう可能性があった。そうすれば、ナインボールとクレッセントＩｄ相手では、万に一つの勝ち目もなくなってしまう。逆に、彼女がやられてしまえば、リャノンたちの命運も間違いなく尽きるだろう。

どちらの状態になっても、リンクスミンクスにとっては身の破滅だった。それは、彼女にとって恐怖だ。

恐怖……。そう、リンクスミンクスは自分でも知らないうちに恐怖にとらわれていたのだ。それは、ダグザに乗るナインボールを見たせいなのだろうか。

「はは。馬鹿だね、このあたいが怖がってるだなんて。……だから、敵の一人も倒せないんだよ。あたいは、いったい誰だい、リンクスミンクスだろ!!」

自分自身を叱咤すると、リンクスミンクスは怒濤の攻撃で三日月を押していった。ハンドガンの反撃を多少受けたものの、リンクスミンクスは引かなかった。

『力押しで、どうなるほど……』

機体を安定させた三日月が、レーザーブレードを構える。接近戦に持ち込めば、白兵戦能力を持たないプリティキトゥンはクレッセントＩｄの敵ではない。

突進してくるプリティキトゥンにクレッセントＩｄがまさにレーザーブレードを振り下ろそうとしたとき、突然激しい衝撃が襲いかかってきて、三日月は機体のバランスを崩した。

『まだ、生きていたのか……!!』

残弾を撃ち尽くしてガトリングガンの砲身を空回りさせているフェンリルを見て、三日月が驚きの声を上げた。そこへ、プリティキトゥンが体当たりをしてくる。激しい衝撃に、クレッセントＩｄの脇腹にプリティキトゥンの左のスラッグガンが突き刺さる。

『くそお!』

クレッセントＩｄがレーザーブレードをプリティキトゥンの右肩に突き入れて、上へと切り上げた。左腕のミサイルランチャーと肩のスラッグガンが、一撃で切り落とされる。

「うおおおおおお……!!」

それでも、プリティキトゥンの勢いは止まらなかった。そのまま、壁に激突してクレッセントＩｄを叩きつける。全開にしたブースターによって壁に押さえつけられたクレッセントＩｄが、左腕のレーザーブレードを振り回してもがいた。

『往生際が悪いんだよ。消えちまいな!!』

オンにした通信機にむかって叫ぶと、リンクスミンクスは連射できる限りのスラッグガンをクレッセントＩｄにむかって叩き込んだ。みるみるうちにクレッセントＩｄの胴体が内部を破壊されて穴だらけになっていく。同時に、無理な射撃を続けるスラッグガンの砲身が変形して膨れ上がる。次の瞬間、クレッセントＩｄとスラッグガンがともに大爆発を起こして、粉々に砕け散った。

爆風をもろに受けたプリティキトゥンは、ぼろぼろになって弾き飛ばされていった。

一瞬気を失ったリンクスミンクスは、何かにぶつかったドンという衝撃で息を吹き返した。そばにフェンリルの機体が見える。どうやら、フェンリルに衝突して止まったらしい。

何度か頭を振って意識をはっきりさせると、リンクスミンクスはコックピットハッチを開

けようとした。だが、装甲が変形していて開かない。何度も開閉レバーを操作していると、突然凄まじい閃光がプリティキトゥンの機体を激しく打った。メインカメラが、何かの破片を受けて機能しなくなる。

「リャノンたちがやったの!? それともやられた……?」

リンクスミンクスはプリティキトゥンの頭部を強制排除すると、コックピットの外へと這い出した。愛機は脚部は健在だったが、頭部を捨てた胴体はすでにぼろぼろで、両腕は跡形もなくなっていた。まさに満身創痍という状態だ。

『ヴォルフの旦那、生きてるのかい！』

半分開きかけているフェンリルの胸部装甲を叩きながら、リンクスミンクスは叫んだ。どうやら、コックピットを開きかけて途中で止まっているらしい。

周囲では、カヒライスとナインボールの戦いが激しく繰り広げられている。銃声こそ聞こえないが、閃光が舞い、床や壁が衝撃に震える様が伝わってくる。どうやら、リャノンの足を引っ張ることだけは避けられたらしい。ハスラー・ワンも、戦闘能力を失った二人を今のところはお目こぼししてくれているようだ。後は、自力でリャノンがナインボールを倒してくれることを祈るだけだ。

『生きてるんなら、返事ぐらいしなよ』

フェンリルのコックピットハッチを手でむりやりこじ開けながら、リンクスミンクスは叫

んだ。ミシミシと装甲が音を立てるのが、手から伝わってくる。ぼろぼろになっていた胸部装甲は、さほど労することもなく外れて宙を流れていった。胸部第二装甲を開くと、ぐったりとしたヴォルフの姿が現れる。

『旦那、生きているのか死んでいるのか、はっきりしな！』

『うるさいぞ。……耳元でキンキンしやがる』

顔をしかめながら、ヴォルフが答えた。

『へっ、悪運はさすがだねえ』

少しほっとしながら、リンクスミンクスは手をのばした。

『気をつけてくれ、右腕が折れてるんだ』

言われて、リンクスミンクスは気密服の応急修理テープを腰のボックスから取り出すと、ヴォルフの腕を彼の気密服に貼りつけて固定した。

『お前は怪我はないのか』

コックピットから引っぱり出されながら、ヴォルフがリンクスミンクスに訊ねた。

『ああ。ACは移動以外できないポンコツになっちまったけどね』

プリティキトゥン越しに、リャノンとハスラー・ワンの戦闘を睨みながらリンクスミンクスは答えた。

『動けるのなら頼みがある。フェンリルの左肩の予備弾倉を開けてくれ』

『いまさら、どうするのさ』

何を言い出すのかと、リンクスミンクスは聞き返した。プリティキトゥンとの接触の際に、フェンリルのガトリングガンはへし折れてしまっていたが、腕自体はまだくっついてはいる。肩の予備弾倉（MTD）も健在だった。だが、弾薬があっても、使える武器がないのでは何の役にも立たないはずだ。

『中には核パルスエンジンを爆破するための爆薬が入ってる。ハスラー・ワンがどうにも胡散臭かったのと、もしもの備えとして用意してきたものだ。そいつをこのフェンリルに積んで、核パルスエンジンに突っ込ませて爆発させる』

ヴォルフが、密かに用意していた作戦を説明した。

『そんなことをしたら、ここまで吹っ飛んじまわないかい』

さすがに、それは無謀だとリンクスミンクスは言った。

『どっちにしろ、エンジンに点火しちまったら、すべて終わりだ。それに、奴らの思い通りにシナリオを進ませてやるってことには反吐が出る』

一矢報いずにはいられないと、傷ついたヴォルフが闘志をむき出しにして言った。

『よし、あたいはのったよ。あたいたちを選んだことを後悔させてやるさ』

そう答えると、リンクスミンクスはフェンリルの機体を駆け上がった。空間を飛び交うレーザーや飛んでくる細かな破片をものともせずに予備弾倉のユニットを開く。慣性で飛んで

くる破片は、どんな小さな物でも拳銃の弾丸ほどの威力を持っている。だが、今はそんな物を気にしてはいられなかった。

高性能爆薬の束とリモコン式の爆破装置を取り出すと、リンクスミンクスはフェンリルのコックピットに爆薬を収める作業をこなしていった。

もう時間はほとんどない。

そして、カヒライスとナインボールの激戦は続いていた……。

9

『始まりだ』

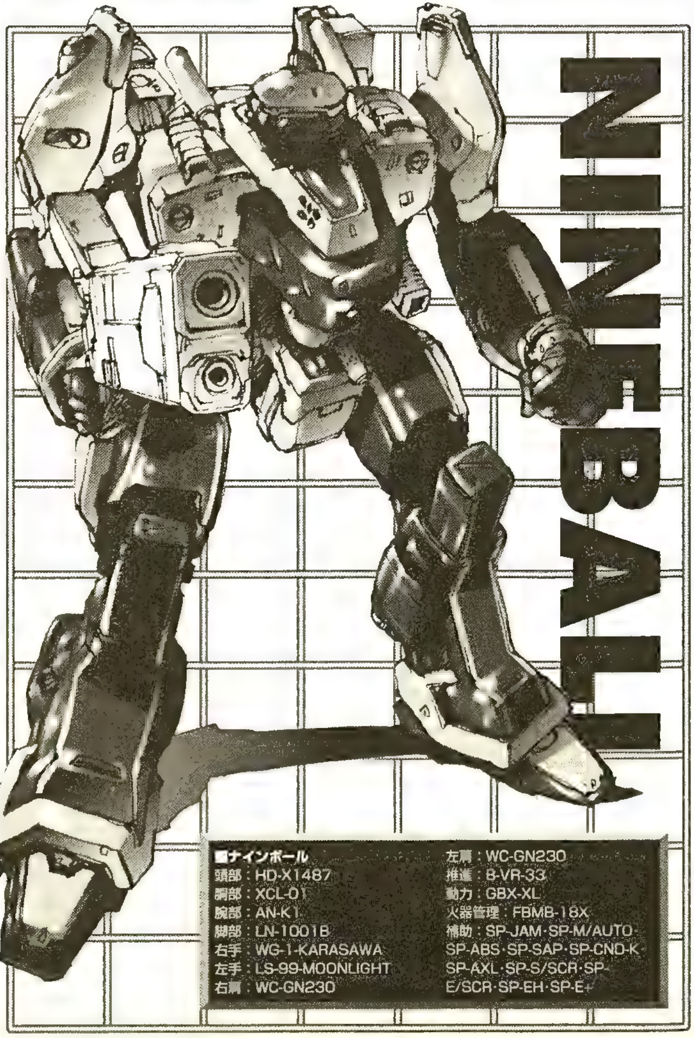
ハスラー・ワンの言葉とともに、突然クレッセントIdがフェンリルを破壊してプリティキトゥンと戦闘に入った。

助けにいく間もなく、カヒライスとブロックバスターにプラズマキャノンが襲いかかってきた。ハスラー・ワンが攻撃を開始したのだ。

『しゃらくせえぜ！』

敵の攻撃をものともせず、ダイナマイトブルが反撃を開始する。

これで、リャノンにもすべてがわかった。倒すべきはハスラー・ワンと三日月。奴らが真



の敵だ。

レーザーライフルを構えると、リャノンはジャンプして防御盾の死角からナインボールを狙撃する攻撃に出た。ブロックバスターが正面から攻撃しているため、まったく異なる方向からの攻撃には対処しにくいはずだ。少なくとも、パイロットが一人の人間なら、注意力は散漫になる。

二方向から、攻撃がダグザに集中した。だが、恐るべき重装甲は、装備されているエネルギー弾中和スクリーン（SP E/SCR）の効果もあって、余裕さえ見せて二人の猛攻を耐え抜いている。

リャノンの作戦を見て取ると、ハスラー・ワンは移動を始めた。ブロックバスターを回り込みながら、リャノンとは距離をあけて防御盾を有効にしようとする。そして、移動しながら、ダグザの左右のハサミが開いていった。中から、計八機の独楽（コマ）状の小型物体が飛び出して散開する。エスコート・リグと呼ばれる自動攻撃機だ。

ミサイルの一種かと思ったリャノンが回避運動をとるところへ、エスコート・リグの機首からパルスレーザーが発射された。思いがけない方向からの予想外の攻撃に、直撃を受けたカヒライスがバランスを崩した。ひとまず床へと降下して体勢を立て直す。それを見越していたかのように、ナインボールがダグザのプラズマキャノンを放った。

『しまった……！』

リャノンがミスを悟ったとき、横合いから飛び出した何者かがカヒライスの盾となった。

『下がってな、いつぞやの借りを、これから返してやる』

言うなり、リャノンの前に立ったダイナマイトブルが、ダグザに対して猛攻撃をしかけていった。

自らの被害はまったく気にせず、ブロックバスターが全火力をダグザの一点に集中していく。

『とりあえず、雑魚(ざこ)は任せたからな』

『よせ、無謀すぎる！』

レーザーライフルでエスコート・リグを狙撃しながら、リャノンは叫んだ。いくらブロックバスターの攻撃力が高くとも、真っ向から撃ち合ったのでは耐久力の差で勝ち目はない。

『俺様の力の前で、壊れない物などこの世にはねえんだよ！』

叫んだダイナマイトブルに、ハスラー・ワンがプラズマキャノンを集中させる。数発の直撃をくらったブロックバスターが、頭部と片足を吹き飛ばされて横転した。だが、それでもダイナマイトブルは攻撃をやめなかった。

『目ざわりだ。消えろ』

ナインボールが、両肩のグレネードランチャーの照準をブロックバスターに定めた。

『リャノン、借りは返したからな。後はきっちりと片をつけてやれ！』

リャノンに呼びかけながら、ブロックバスターが両腕のレーザーキャノンと両肩のショル

ダーキャノンから、ダグザの機体右側にむかって一斉に攻撃を放った。さしもの重装甲にも、ついに亀裂が入る。

だが、その返礼として、同じようにダグザとナインボールからの一斉射撃がブロックバスターに襲いかかった。ブロックバスターのいた場所が、いくつもの火球につつまれる。何かの破片が火球から飛び散りながらさらに誘爆していった。

すべての光が収まったとき、ブロックバスターの姿はどこにも残ってはいなかった。

『次はお前の番だ、リャノン＝シードル』

『ハスラー・ワン!!』

リャノンは叫ぶなり、ナインボールに突進していった。接近してしまえば、いかに大火力を誇る射撃兵器でも効果は発揮できないはずだ。それに、ダグザと一体化している今、ナインボール自体の機動力はかなり落ちている。

『甘いな』

斬りかかろうとしたカヒライスを、いきなり側面からパルスレーザーが襲った。先にエスコート・リグに回り込まれていたのだ。壁に叩きつけられたカヒライスにむかって、ナインボールのレーザーライフル(WG-1 KARASAWA)がむけられる。リャノンはブースターとスラスターを全開にして回避行動に移った。カヒライスは壁面に機体をこすりつけて火花をあげながらも、追いかけるようにして壁を焦がしながら迫りくるレーザー光から逃げ回った。

ゆっくりと回頭するダグザの機体に、ダイナマイトブルが刻んだ装甲の亀裂からわずかに内部機構が見える。狙うのならばあのポイントだが、命中させたにしても、かなりの攻撃を集中させなければ効果は期待できそうにない。

決め手のないリャノンは、逃げ回りながら仲間の戦いを確認してみた。フリティキトゥンがクレッセントＩｄに体当たりをしていく。そのまま槍の穂先のようにスラッグガンを敵に突き刺すと、内部に直接弾丸を叩き込んで敵を粉砕した。

「その手があるか」

リャノンはチャンスをうかがって、展開したショルダーキャノンにエネルギーをチャージしていった。

『そんな状態では、キャノンは撃てないだろう』

攻撃の手を休めずに、ハスラー・ワンが言った。

ダグザからエネルギー供給を受けているナインボールにとっては、レーザーをいくら連射してもエネルギー的にはまったく問題はない。まさに、ダグザという名の通り、サポート・リグという新世代兵器はＡＣにとって無限の食糧（エネルギー）を供給してくれる魔法の釜であった。

すでに数発のレーザーをくらっているカヒライスが沈黙するのも、時間の問題だろう。ハスラー・ワンにとっての問題は、カヒライスが倒れるのが先か、核パルスエンジンが点火するのが先かということだけだ。本当は、それさえもハスラー・ワンにとってはどうでもよいことなのではあるが。

ハスラー・ワンが計算をめぐらせていると、ナインボールの前に大きなゴミが流れてきた。破壊されたクレッセントＩｄの頭部だ。

『邪魔だ』

躊躇（ちゅうちょ）なく、ハスラー・ワンがエスコート・リグの集中射撃でそれを粉砕する。

その一瞬を、リャノンは逃さなかった。

カヒライスはブースターを全開にすると、ショルダーキャノンを左手でつかんだまま一直線に突っ込んでいった。加速がついたところで、リャノンは右肩のレーダーユニットを強制排除してわずかに機体に制動をかけた。慣性のついたレーダーユニットが、ミサイルのようにダグザにむかっていく。リャノンは、左肩のショルダーキャノンをもぎ取るようにして外すと、腰だめに構えて再びカヒライスを加速した。

そのカヒライスの様子に気がついたナインボールは、即座に迎撃行動をとった。先行するレーダーユニットが、グレネードの直撃を受けて大爆発を起こす。その爆炎を強行突破して、カヒライスがダグザに肉薄した。さらにブースターの出力を上げ、カヒライスが体当たりするようにしてショルダーキャノンをダグザの装甲の亀裂に槍のように突き込んだ。そして、即座にスラスターを全力噴射して後退する。

『何のつもりだ』

ダグザに軽微な損傷を受けただけのハスラー・ワンが、瞬間リャノンの行動が理解できずに言った。自暴自棄の行動なのかと戸惑う。

それに答える代わりに、リャノンは自分のショルダーキャノンにむかってレーザーを放った。臨界を越えてエネルギーチャージされていたショルダーキャノンが、むりやり保持されていたエネルギー弾体にレーザーのエネルギーを受けて大爆発を起こす。

装甲の内部で高エネルギー体の爆発を受けたダグザが、全体に亀裂を生じながら奇妙な形に膨れ上がった。底部ブースターが誤動作し、急加速して天井に近づく。

天井の間に挟まれかかったナインボールが、潰される前に慌ててダグザから離脱した。

直後に、天井に激突したダグザがついに爆発する。凄まじい光球が広がった。ダグザの持つ弾薬やエネルギージェネレータが誘爆したのだ。耐えきれなかった天井隔壁が吹き飛ばされ、爆発のエネルギーが外の宇宙空間にむかって噴き出す。

光がおさまったとき、カタパルト搬入路前の天井には、大穴があいていた。もしそうなっていなかったら、この倉庫内の物すべてを爆発は呑み込んでいたかもしれない。

そして、少なからずダメージを受けはしたようだが、まだナインボールは健在だった。

『これで、AC同士、互角になったな』

『はたして、そうかな』

リャノンの挑発に、ハスラー・ワンはレーザーの閃光で応えた。予測してすでに回避運動に入っていたカヒライスが、軽快なフットワークでその攻撃を回避する。

『勝負はこれからだ』

リャノンは叫んだ。先ほどの攻撃は捨て身でも何でもない。ナインボールとの戦いとなるとふんで、必要のないレーダーと撃つチャンスのないショルダーキャノンを捨てて身軽になるということまで計算した上での行動だ。

互いにブースターとスラスターをフル稼動させて、カヒライスとナインボールが銃撃戦を繰り広げる。

壁や天井をキックすることで慣性を上手に使いながら、リャノンはエネルギーを節約して機動戦を維持した。

めまぐるしく立体的に接近しては離れ、そして交差し、二機のACが戦いを繰り広げる。

光条が乱舞し、熱と、力と、意志が激しくぶつかりあった。互いに敵の攻撃を受けて少しも怯まず、さらに闘志をかき立ててぶつかりあう。両者は、一歩も譲らず、まさに互角の戦いを繰り広げていった。

その戦いの陰では、ヴォルフとリンクスミンクスが、核パルスエンジンの爆破準備を完成させていた。

『もう時間がない、早く押し出せ』

リンクスミンクスに折り重なるようにして狭いプリティキトゥンのコックピットに割り込

んだヴォルフが叫んだ。

『わあってるわよ。それよりも、コース調整と爆破をしっかりとやんな！』

パイロットシートに座ったリンクスミンクスが、足下から膝にかけて上半身をのしかけているヴォルフを怒鳴りながら、コントロールスティックを前に倒した。瞬間フリティキトゥンが加速して、爆薬を積んだフェンリルを前に押し出す。慣性でそのスピードを保ったフェンリルの機体が、ヴォルフのリモートコントロールするスラスターでコースを修正しながらカタパルトへとむかっていった。

一方のリャノンたちの戦いも、終焉（しゅうえん）を迎えつつあった。

レーザーライフルを撃ち尽くしたナインボールは、さっさとそれを投げ捨てるとレーザーブレードを発生させた。強く輝く光の刃が、深紅の機体の左腕から長くのびる。

『いい加減に沈め!!!』

ぎりぎりで敵の太刀筋を見切ると、リャノンは後退しながらレーザーを敵に撃ち込んだ。

『さすがだ。その力、まさにレイヴンだと認めてやろう。だが、私はレイヴンを越える存在だ！』

そう答えると、ナインボールはレーザーブレードを振った。刃を構成すべきエネルギーが凝縮され、次の瞬間放たれたそれは光波となってカヒライスの機体に襲いかかった。

『何だと!!』

直撃を受けたカヒライスが、爆発につつまれながら背後の壁に叩きつけられる。

『くそ、もう機体が限界か……』

壁に叩きつけられたまま身動きできなくなったカヒライスを、必死に動かそうとしながらリャノンが叫んだ。機体の各部が動かそうとするたびに、ガラスをこすり合わせるような奇妙な音を立てて泣き叫ぶ。

『動けないのか。では、これで終わりだ』

リャノンの前に立ちふさがったナインボールが、肩のグレネードランチャーの砲口をカヒライスのコックピットにむけた。

リャノンは必死にレーザーライフルをナインボールにむけようとしたが、カヒライスはなかなか動いてはくれなかった。

『リャノン！』

それを見て、爆発の余波から必死にプリティキトゥンの機体を立て直したリンクスミンクスとヴォルフが叫んだ。

その声に、ナインボールが彼女たちの乗るプリティキトゥンに頭部のカメラアイをむける。

そのまま頭部が回転し、カタパルトへと移動していくフェンリルを捉えた。

『こざかしいことを』

瞬時にその意図を理解したハスラー・ワンが、動けないカヒライスは後回しにして砲身を

フェンリルの方にむけた。ヴォルフたちがしまったと思う間もなく、照準が定められた。だが、ハスラー・ワンの注意が一瞬それたその瞬間を、リャノンは逃さなかった。これが、正真正銘、最後のチャンスだ。

『後少しだけでいい、動いてくれ』

全身で甲高く泣き叫ぶ愛機を、リャノンは叱咤した。

『カヒライス、貴様が泣くのは俺のためにじゃない。奴のためにだ!!』

偉大な者の死を嘆き悲しむ伝説の妖精カヒライス。バンシーとも呼ばれるその妖精の泣き声は、リャノンのためのものであってはならなかった。なぜなら、彼は自ら他人の死を糧として生きていくレイヴンであることを選んだからだ。嘆きは人のためにだけあればいい、彼自身には嘆き悲しんでくれる人は必要ではなかった。そう、昨日までは。だが、今は、あの子を悲しませたくない。そして、生きて帰って守るのだ。

『動け、カヒライス!!』

リャノンは叫んだ。カヒライスの右手が持ち上がる。トリガーを引いた。グレネードランチャーを発射する瞬間のナインボールに、一条のレーザーが吸い込まれていった。爆発が、ナインボールの機体をゆるがす。

弾道のそれたグレネードが、爆風でフェンリルを吹き飛ばす。バランスを崩したフェンリルが、横転して宙に浮いた。

慌てて、ナインボールがカヒライスの方に回頭しようとする。それにむかって、リャノンはトリガーを引き続けた。カヒライスの腕は、今の角度を維持したまま動かせない。レーザーライフルから、残り少ないありったけのエネルギーを込めてレーザーが連射された。みるみるうちに、ナインボールの機体にいくつもの弾痕が刻まれていく。それでも、まだナインボールは動いていた。回頭を終え、砲口をピタリとカヒライスに固定する。

ここまでなのかとリャノンが無念さを噛みしめたとき、ナインボールの機体がぐらりとかたむいた。ふわりと浮き上がって、あおむけに宙を漂い出す。

『もう……遅い。賽は……投げられた……』

ハスラー・ワンの言葉が、途切れ途切れに聞こえる。そのままナインボールの機体は、フェンリルの横を通り過ぎると、ダグザの開けた穴から漆黒の宇宙空間へと流れ出していった。

リャノンは、全身の力が抜けて、ぐったりとシートに身を沈み込ませた。解けた緊張の糸がもとに戻りかけた瞬間、ドンという衝撃が起こってカヒライスの機体が宙に浮いた。

『ちくしょう、タイムアウトだ、核パルスエンジンに点火しやがった』

ヴォルフの悔しげな声が聞こえてきた。

『まだ間に合うだろ、リモコンで爆発させなよ。ここがぶっ壊れれば、カタパルトだって一蓮托生だろ』

プリティキトゥンをカヒライスのそばによせながら、リンクスミンクスが言った。

『それが、横転したときに、受信機がいかれたらしい』
ヴォルフが、何度も左手に持った起爆スイッチを押した後、あきらめてそれを投げ捨てた。
『何だよ、肝心なときに役に立たないじゃないか』
リンクスミンクスが文句を言う間にも、徐々にステーションが加速を始める。だが、まだエンジンが臨界に達するまでは数分の時間があるはずだ。
『こうなったら、フェンリルのところまでいって、手動で……』
『却下だ。俺はここで自爆するつもりなどない。脱出するぞ』
リャノンが、リンクスミンクスの言葉を冷静に退けた。
『脱出できればの話だがな。HLLVがまだいる可能性は低い』
あきらめたようにヴォルフが言う。
『あんたらしくないな。とにかく議論は後だ。移動する』
『あいよ。今はリャノンに従うよ。それで、カヒライスは動けるのかい』
余計なことは考えずにリャノンに賛成すると、リンクスミンクスはカヒライスにプリティキトゥンを隣接させた。
『少しなら動けるが、歩行は無理だ』
『なら、あたいのプリティキトゥンにつかまりな。機体を固定したら、かっ飛ばすよ』
カヒライスがプリティキトゥンの機体に手足の電磁石でつかまると、リンクスミンクスは

後部ブースターを現状の最大出力まで上げて走り出した。
『もう少し丁寧な操縦はできないのか。こっちは腕が折れてるんだぞ』
『これでも、通常出力の半分だよ。それだって間に合うかどうか怪しいんだ。それに、久しぶりに両手にいい男だいてんだ、少しぐらいはしゃぎたくもなるさって』
リンクスミンクスは大声で笑うと、猛スピードでステーションの中を走り抜け、二分と経たずしてベイ・ブロックまで戻り着いてみせた。だが、そこで彼らが見た物は、破壊されたシュトルヒとドッキングチューブ・ゲートの姿であった。大きな穴が開いたゲートの外には漆黒の宇宙が広がるだけで、HLLVの姿はどこにもない。
ヴォルフとリンクスミンクスが失望にかられかけたとき、懐かしい声が聞こえてきた。
『遅いぜ。もう少しでおいてくところだったぞ』
『どこにいるんだ、ファルコン』
リャノンが訊ねる。
『放置されてた敵のシャトルを確保してる。早く後部ハッチからACを乗り込ませな。もう時間がないぜ』
『話は後だ、すぐあいつに飛び込め』
リャノンが、カヒライスでベイ・ブロックの端にあるシャトルをさし示した。言われるまでもないと、リンクスミンクスが全速でそこに飛び込む。損傷の激しいヴィジランティにぶ

つけるようにしてプリティキトゥンを止めると、ヴォルフに肩を貸したリンクスミンクスがドアにむかって宙を飛んだ。

『ハッチは閉めなくてもいい、ヴォルフたちがキャビンにいったら発進させろ』

『了解』

リャノンの指示通り、二人がカーゴのドアをロックするのを待って、ファルコンは逆噴射ロケットを点火した。シャトルがじりじりと後退を始め、ベイ・ブロックにあいていた大穴から外へと滑り出た。

「こいつ、死んだって聞いたのに。リャノンと何か企んでたね」

リンクスミンクスが、騙されて悔しいとばかりにファルコンをこづいた。

「いてえな。操縦してるんだから、おとなしくシートについてベルトを締めろよ」

ファルコンがわめいた。

「ただでさえ、HLLVを確保しに戻ったら、シュトルヒは攻撃してくるわ、HLLVは離脱していっちまうわで大変だったんだからな。このシャトルがなかったらどうなってたことやら。感謝しろよな」

「でも、何であんただけが、リャノンとつるんだのさ」

「あたり前だろ。俺が、リャノンならまだしも、ファータちゃんの敵に回るか？」

ごちそうさまと、リンクスミンクスが呆れた。

『長話は後にしろ。ファルコン』

リャノンが、彼らののんきな会話に割って入った。まだ、気を抜くには早い。

「了解。後部ハッチ閉めるぜ。そろそろ、熱くなってくる」

『まだだ。このままで、シャトル後部をステーションにむけろ。早く』

「おい、どういうつもりだ」

ファルコンが聞き返した。もう大気圏に突入しかけているのに、それは無謀だ。

『言う通りにしてやれ。俺たちは奴に助けられた。それは、まだ続いてるんだ』

ヴォルフが、リャノンの指示には従えとファルコンをうながした。

「ああ、わかってるよ」

不満げに答えながら、ファルコンがシャトルの姿勢を変える。

カーゴでレーザーライフルをカヒライスに構えさせたリャノンは、ステーションの一点を見つめていた。カタパルトに設置された核パルスエンジンが、膨大な炎を吹きだして巨大なステーションを推し進めている。そのエンジンのそばを、黒い小さな点が速いスピードで通り過ぎようとしていた。

「あたれよ……」

レーザーライフルの残弾は後一発。失敗は許されない。

オートロックオン機能を止めたリャノンは、狙いを定めて一気にトリガーを振り絞った。

漆黒の空間を一条のレーザーが走り抜ける。正確にコックピットの爆薬を撃ち抜かれたフェンリルが、核パルスエンジンの真横で大爆発を起こした。エンジンの側壁が破損し、亀裂がみるみるうちに全体へと広がっていく。次の瞬間、核パルスエンジンは大爆発を起こした。
「核パルスエンジンが爆発した⁉　《カエデ》の侵入角が変わっていく。あれじゃ、目標には落ちないね」
リンクスミンクスが歓声を上げた。
「リャノンの奴め、やってくれるぜ」
ヴォルフがつぶやく。
「そいつはいいけどよ……。だめだ、爆発の影響で姿勢が定まらねえ」
スラスターコントロールを握りしめたままファルコンが叫んだ。
「馬鹿野郎、何とかしろ。カーゴには、まだリャノンがいるんだぞ」
「んなこと言ったって、ハッチを閉めるのもままならないんだよ！」
ファルコンがヴォルフに怒鳴り返す間にも、機体下部で断熱圧縮が始まり高熱がシャトルをつつみ始めた。ハッチが開けられたままのカーゴ内の温度も、一気に上昇する。
そのまま、炎につつまれたシャトルは、落下する《カエデ》の後を追うようにして地表に墜ちていった。

エピローグ

「救出」

起伏の多い丘陵地帯の一本道を、小隊が進んでいた。

一台のトーラスを中心に、四足歩行戦車であるイーゲルが一機先導し、二機のパペガイが後方左右を固めている。

「《カエデ》は、一五時間前にアイザック・シティ南方一五〇キロの山間部に落下したそうだ」

ラルフは、目の前の少女に話しかけていた。トーラスの室内には、簡素なソファーが急ごしらえといった感じで左右に対面でおかれている。

膝下まである白いロングシャツだけを着せられたファータは、ぼんやりとしながら彼の言葉を聞き流していた。

「シティへの直接の被害はなかったようだね。どうもステーションは途中で進路を変えたらしい。リャノン君は、またもやりすぎたようだ」

ラルフの発したリャノンという言葉に、ファータがピクリと反応を示した。

「でも、軌道計算の結果から、当初の目標はアイザック・シティだという発表がなされたよ。バージュ社は、これをサラスヴァティー社の明確なる敵対行動だと非難した。なにしろ、先に彼らのシャトルが《カエデ》にむけて発進したという記録が残っているのだからね。後から出かけたバージュ社の部隊は、テロの阻止に出かけたことになるわけだ。結果、武力による対立も辞さないと公言することができた。少々過程は狂ったが、結果はシナリオ通りだ。

これもみな、リャノン君たちがサラスヴァティー社の部隊を全滅させてくれたおかげだよ。そうそう、彼らの部隊も含めて、生存者はゼロだそうだ。これも予定通りではあるがね」
ラルフは、言い終えてからファータの反応をうかがったが、彼女は虚ろな表情のまま何も答えなかった。
「まだ薬が効いているらしい。まあ、次の施設までおとなしくしてくれているのだから、よしということにしておくか。最初のときのように暴れられても、扱いに困るからな」
ラルフは独りごつと、つまらなそうに腕を組んで横をむいた。ファータの頬に一筋涙が伝うのに、彼は気づきもしなかった。
そのとき、ふいにトーラスが急停車した。
「何事だ！」
ラルフが叫んだ。運転席へのドアを開けて、フロントガラスから前方を見る。
イーゲル越しに、白いACの足が見えた。
『おっと、ここから先は通さないぜ』
外部スピーカーを通して、ファルコンが啖呵を切った。同時に、イーゲルの強力なガトリングガンが火を噴く直前に、ヴィジランティをジャンプさせて攻撃を避ける。上空へのイーゲルの攻撃能力は極端に落ちるからだ。パルスレーザーガンを連射すると、ファルコンはあっという間にイーゲルを仕留めた。

一呼吸遅れて、パペガイが迎撃のために前進しようといったん上空にあがる。そこへ、ミサイルの雨が降り注いだ。空から叩き落とされて、二機のパペガイがトーラスの左右で炎上する。
「たわいないねえ」
丘の上からの狙撃を成功させたリンクスミンクスが、プリティキトゥンのコックピットの中で笑った。
一瞬にして護衛を全滅させられ、ラルフはトーラスの中で青ざめた。窓のすぐ外にはヴィジランティ、そしてはるか丘の上にはプリティキトゥンらしきACの影が見える。
「奴ら……、生きていたのか」
つぶやいてから、ラルフは慌ててあたりを見回した。リャノンもきっとそばにいるはずだと直感したのだ。
それは正しかった。すでにそのときには、高々度にジャンプして一気に接近したカヒライスが、トーラスの真上に迫っていた。オープンにしたコックピットには、HD－ONEに換装した頭部の生体センサーと連動したゴーグルをつけたリャノンの姿があった。
落下の突風が、彼の髪を乱暴にはためかせる。
ゴーグルに映る人間の位置を正確に把握しながら、リャノンは着地と同時に低出力におさえたレーザーブレードを一閃させた。トーラスの背面のドアが焼かれて変形する。リャノン

は、そこにできた裂け目にカヒライスの手を突っ込むと、力任せにトーラスの屋根と後部ドアを引きちぎった。
衝撃に足下をふらつかせたラルフが目を見張る。
だが、すぐに拳銃を抜き放つと、ファータの頭にあてて人質に取ろうと動いた。
銃声が一つ鳴り響いた。
頭部を撃ち抜かれたラルフが、どさりとトーラスの床に転がる。
「約束した俺の報酬だ」
カヒライスのコックピットに立ち上がったリャノンが、硝煙のたなびく拳銃を静かに下ろした。
直後に、トーラスの運転席がヴィジランティの手によって文字通り叩き潰される。
「ファータ!!」
膝をついて低い姿勢となったカヒライスから身軽に飛び降りると、リャノンは少女のもとに駆けよっていった。
未だ虚ろな顔の少女の肩をつかんで、左右にゆする。ファータの目の焦点が、すうっとリャノンの顔に合っていった。深い黒の瞳に、リャノンの姿が映り込んでいく。
「……リャノン!?」
少女が小さくつぶやいた。リャノンがそれにうなずく。ファータの顔に一瞬にして表情が

戻った。大きく目を見開いて、彼の顔を見つめる。
「リャノン!!」
大きく叫ぶと、ファータはリャノンの腕の中に飛び込んでいった。何度も何度も彼の名を呼んで、その胸に顔を埋める。
「インヴィジブルQの情報は、正確だったようだな」
ファータの居場所と護送時間の情報を伝えたらさっさと姿を消してしまったレイヴンのことを思って、ヴォルフは微かに苦笑した。報酬を要求してファータの救出作戦に加わらなかったのは、いかにも一匹狼のレイヴンらしい。
ヴォルフはレッド・ブランチを左手だけで動かすと、リャノンたちのところへ移動した。
彼がつくと、みんなはファータを中心として集まっていた。
「感動の再会はいいが、あまりここに長居もできんぞ」
「ああ、すぐに移動しよう」
ファータを片手でだいたまま、リャノンがヴォルフに答えた。
「アヴァロン・バレーには、もう戻らないつもりなのか」
「そのつもりだ。レイヴンズ＝ネストは、俺を捜し続けるだろうからな」
ファルコンの質問に、リャノンはそう答えた。
「逃亡者ってことかい？」

「そうとは限らないが。少なくとも、俺たちレイヴンは自由な存在のはずだ。だから、俺は自由に生きてみるつもりだ」

確固たる自信を持って、リャノンはリンクスミンクスに言った。

「違いない」

ヴォルフたちがニヤリと笑う。

「すまないな、あんたたちも巻き込んでしまって」

「かまわないさ。俺たちは俺たちの借りを今返しただけのことだ。それに、俺たちなら、お前よりよっぽどうまく立ち回っていけるしな。何、この世界、裏稼業はいくらでも転がってる」

レイヴンを代表して、ヴォルフが答えた。言葉ほど簡単なことではないが、彼らならしっかりと生き抜いていけることだろう。

「ただ、一つ頼みがあるんだが……」

ファータの身体に回していた手を解いて、リャノンが言いかけた。その様子に、少女が慌ててまたリャノンの身体にしがみつく。

「私をおいていこうって言うのなら、それはだめよ。私はあなたについていくんだから」

「だが……」

「私にだって、自由な意志はあります」

口ごもるリャノンに、ファータはきっぱりと言った。

「あきらめろ」

笑いながらヴォルフが言う。リンクスミンクスがそれにならい、ファルコンがしかたなく苦笑いした。

つられて、リャノンもつい微笑んでしまう。今この瞬間、ここにあるものはすべて偽りなどではなかった。目に見えるものも、そして、目に見えないものも、すべて真実だ。

「好きにしろ」

リャノンはファータに言った。一瞬、また投げ遣りになったのかとファータはいぶかしんだが、彼の顔が笑っているのを見て、不安はすべて吹き飛んでしまった。

「好きにすればいい。二人も、それほど悪いものじゃない」

リャノンの言葉に、ファータは、素直じゃないんだからと、いつまでも笑い転げた。

あとがき

おー、またロボット物だ。今年は、本当にロボット物一色になってしまった。しかも、今回は巨大ロボットだ。さらに、渋い野郎が主人公だ。さらにい、松田さんのヒロインは、予想以上にかわいい。いいぞお。だから、も少し喋ってくれい、リャノン君。

今回はいつもと後書きののりが違うような……。ああ、ページ数が足りないので切れてるかもしれない、わし。後一〇〇ページぐらいほしいのよお。

だから今回は、後書きも短くすますのだ。その分のパワーは、すべて本文に回す。とにかく、余剰と思えるパワーや、そそぎ込める物や力はすべて本文や設定へと回すのだ。そのためには、実際にACを作ってゲーム上で機動性をチェックしたり、バグはパルスビーム何発で殺せるかとかもちゃんと指折り数えて実データを取ってチェックするのもいとわんのだあ。

しかし、今回のキャラは当たりが多いような気がする。リャノン・ファータ・リンクスミンクス他、お気に入りてんこ盛り。とりあえず、リャノンとファータには、このお話の後、疾風怒濤の展開をどどーんと作っておいてあげよう。ああ、もうページがない。読みたい人は、感想込みでお手紙くださいませ。待ってます。

一九九八年八月　篠崎　砂美

MAIL to : Lyanon Cidre

We bless your return.
Let's meet again while near.

MAIL from : Hustler1

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先

〒154-0023 東京都世田谷区若林1-18-10 みかみビル

株式会社アスキー第六書籍編集部

篠崎砂美　先生

松田大秀　先生

ファミ通文庫

アーマード・コア　～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

一九九八年一〇月三日　初版発行

著者　篠崎砂美

発行人　浜村弘一

編集人　浜村弘一

発行　株式会社アスキー

〒一五一-八〇二四　東京都渋谷区代々木四-三三-一〇

電話　〇三(五三五一)八一一一代

発売　株式会社アスペクト

〒一五四-〇〇二三　東京都世田谷区若林一-一八-一〇

みかみビル六F　営業部

電話　〇三(五四三三)七八五〇代

編集　第六書籍編集部

デザイン　リックデザイン事務所

写植・製版　株式会社パンアート

印刷　凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-7572-0215-6

篠崎砂美
Sami Shinosaki

1960年7月22日生まれ。埼玉県出身。ファンタジーから近未来アクションまで幅広く手がける。裏設定満載の緻密な作風が好評。著書に『ブレイク・エイジ　戦士たちの夏』(アスペクト)など多数。『マッチメーカー』というパソコン用ロボットバトルシミュレーターのデザイナーでもある。
http://hp.vector.co.jp/authors/VA000787/

松田大秀
Taishu Matsuda

1961年生まれ。新潟県出身のマンガ家。いろいろあって現在にいたる。家族は妻と息子が一人。生家はお寺でお念仏をあげさせていただく毎日。著書に『フロントミッションシリーズ　ガンハザード』(アスキーコミックス)ほか。戦争マンガなどでも活躍中。

篠崎砂美の著作リスト

アーマード・コア
～ザ・フェイク・イリュージョンズ～



FB Famitsu Bunko
012

アーマード・コア
～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

篠崎砂美

ファミ通文庫

9784757202153
1920193006407

ISBN4-7572-0215-6
C0193 ¥640E
定価 本体640円 +税

発行○アスキー
発売○アスペクト

FB Famitsu Bunko

〝大破壊〟から半世紀。〝国家〟という概念はすでになく、人々は数々の〝企業〟に導かれ、支配されていた。たったひとつの例外――報酬によって依頼を遂行し、何にも組みしない傭兵たち――を除いて。アーマード・コアと呼ばれる鋼鉄のロボットを駆る彼らを、人は、〝レイヴン〟と呼んだ……。人気戦闘メカシミュレーター『アーマード・コア』の世界を舞台に贈る、公式アフターストーリー!



FB
Famitsu Bunko
012

アーマード・コア
~ザ・フェイク・イリュージョンズ~

篠崎砂美

ファミ通文庫

ISBN4-7572-0215-6
C0193 ¥640E
9784757202153
1920193006407
定価 本体640円＋税
発行○アスキー
発売○アスペクト

FB
Famitsu Bunko

“大破壊”から半世紀。“国家”という概念はすでになく、人々は数々の“企業”に導かれ、支配されていた。たったひとつの例外——報酬によって依頼を遂行し、何にも組みしない傭兵たち——を除いて。アーマード・コアと呼ばれる鋼鉄のロボットを駆る彼らを、人は、“レイヴン”と呼んだ……。人気戦闘メカシミュレーター『アーマード・コア』の世界を舞台に贈る、公式アフターストーリー！

篠崎砂美の著作リスト

篠崎砂美
Sami Shinosaki

1960年7月22日生まれ。埼玉県出身。ファンタジーから近未来アクションまで幅広く手がける。裏設定満載の緻密な作風が好評。著書に『ブレイク・エイジ　戦士たちの夏』(アスペクト)など多数。『マッチメーカー』というパソコン用ロボットバトルシミュレーターのデザイナーでもある。
http://hp.vector.co.jp/authors/VA000787/

松田大秀
Taishu Matsuda

1961年生まれ。新潟県出身のマンガ家。いろいろあって現在にいたる。家族は妻と息子が一人。生家はお寺でお念仏をあげさせていただく毎日。著書に『フロントミッションシリーズ　ガンハザード』(アスキーコミックス)ほか。戦争マンガなどでも活躍中。

カバーイラスト　松田大秀